

青森県埋蔵文化財調査報告書 第486集

# 上野遺跡Ⅱ

— 県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2010年3月

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第486集

# 上野遺跡Ⅱ

— 県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2010年3月

青森県教育委員会





調査区中央部



緑釉陶器



全景



側溝確認



硬化面の状況

## 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成18年度に引き続き、平成20年度に県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業予定地内に所在する上野遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、平安時代の竪穴住居跡・土坑・溝跡、円形周溝などの遺構や遺物が多数発見されました。特に、第15号竪穴住居跡からは緑釉陶器片が出土しており、貴重な発見です。

上野遺跡は、浪岡市街地から西へ3 kmに位置する青森市浪岡野沢地区に所在します。浪岡地域には数多くの埋蔵文化財包蔵地が遺されていますが、その中には、平安時代の史跡高屋敷館遺跡などの重要な集落遺跡が少なからず含まれています。

本報告書は、平成20年度上野遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成22年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 新岡 嗣浩




## 例言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成20年度に発掘調査を実施した、青森市上野遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査対象面積は2,500㎡、発掘調査面積は1,500㎡である。
- 2 上野遺跡の所在地は、青森市浪岡大字樽沢字村元地内、平成21年3月に刊行された青森県遺跡地図による遺跡番号は、201338である。
- 3 上野遺跡の発掘調査報告書は、本事業に伴って既に1冊刊行されており、本書は2冊目となる。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成20年4月22日～7月25日
整理・報告書作成期間	平成21年4月1日～平成22年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護事業本洋が担当した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
火山灰分析	国立大学法人弘前大学理工学部 教授 柴 正敏
石器の石質鑑定	青森県立郷土館 主任学芸主査 島口 天
放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
漆塗膜分析	株式会社 バレオ・ラボ
炭化種実同定	株式会社 バレオ・ラボ
遺物の写真撮影	シルバーフォト、スタジオエイト
- 8 発掘調査成果の一部は、現地見学会・発掘調査報告会において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た(敬称略・順不同)。青森市教育委員会、弘前市立博物館、三沢市教育委員会、京都国立博物館、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、藤沼邦彦、関根達人、尾野善裕、小森俊寛、平尾政幸、山本雅和、福田友之、三浦圭介、瀬川 滋、長尾正義、木村淳一、岩井浩介、岩井浩人、藤田徹也、正岡大実、鈴木和子、永嶋 豊、茅野嘉雄、斉藤慶史、木村 高、佐々木雅裕、工藤 忍、佐藤智生、岩田安之
- 11 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「大沢運」・「浪岡」を複写・加工して使用した。
- 12 測量原点の座標値は、日本測地系(Tokyo Datum)に基づく平面直角座標第X系による。
- 13 挿図中の方位は、すべて日本測地系(Tokyo Datum)の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、遺跡位置図1/50,000、調査区域図1/5,000、トレンチ配置図1/1,000、遺構配置図1/750とし、挿図ごとにスケールを付した。
- 15 遺構については、原則として検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。使用した略号は、以下のとおりである。

SI	竪穴住居跡	SB	掘立柱建物跡	SK	土坑	SD	溝跡	SX	性格不明遺構
----	-------	----	--------	----	----	----	----	----	--------
- 16 遺構実測図のうち、土層断面図等には水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は1/60での掲載を基本としたが、版面に収まらない溝跡等は適宜縮尺を変更した。挿図にはすべてスケールを付している。
- 18 遺構実測図に使用した網掛けは、以下のとおりである。これ以外は図ごとに説明を付した。

	粘土範囲		焼土範囲		炭化材
---	------	---	------	---	-----
- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。



20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帳 2000年度版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。

21 遺物に使用した略号は以下のとおりである。

P—土器、S—石器、C—炭化材

22 火山灰の略称は以下のとおりである。

To-H—十和田八戸テフラ、To-a—十和田aテフラ、B-Tm—白頭山苫小牧テフラ

23 遺物実測図には、原則として出土遺構ごとに1から通しの番号を付した。同一個体と考えられるものには枝番号を付した。

24 遺物実測図の縮尺は、原則として土器・礫石器・石製品・鉄製品・陶磁器は1/3、剥片石器・土製品・銭貨は1/2に統一し、挿図ごとにスケールを付した。

25 須恵器・陶器の断面は黒塗りとした。

26 遺物実測図に使用した網掛けは、以下のとおりである。これ以外は、図ごとに説明を付した。



内面黒色処理；土師器



タタキ範囲；礫石器



横断面；砥石

27 参考文献は巻末に一括とし、依頼原稿については各文末に付した。

28 計測表の（ ）内の数値は、土器は推定復元値、その他は現存値である。

29 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。

30 遺物写真の縮尺は不同である。

## 目次

序

例言

目次

挿図目次

図版目次

### 第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	2

### 第2章 遺跡の環境

第1節 周辺の遺跡	5
第2節 基本土層	7
第3節 上野遺跡の地形と地質	8

### 第3章 遺構と出土遺物

第1節 平安時代の遺構と出土遺物	13
第2節 縄文時代の遺構と出土遺物	31
第3節 江戸時代以降の遺構と出土遺物	32

### 第4章 理化学分析

第1節 上野遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	83
第2節 青森市上野遺跡の火山灰について	86
第3節 土師器内面付着の黒色物の塗膜分析	89
第4節 上野遺跡から出土した炭化種実	93

### 第5章 まとめ

(1) 調査成果の概要	100
(2) 平安時代の集落について	100
(3) 平安時代の遺物について	101
(4) 道路(街道)跡について	106

参考文献一覧	108
--------	-----

遺物観察表	109
-------	-----

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

図1	遺跡位置図	6	図35	第15号竪穴住居跡(1)	57
図2	調査区域図	6	図36	第15号竪穴住居跡(2)	58
図3	基本土層図	7	図37	第15号竪穴住居跡(3)	59
図4	段丘分布図	10	図38	第16号竪穴住居跡(1)	60
図5	トレンチ配置図	11	図39	第16号竪穴住居跡(2)	61
図6	遺構配置図	12	図40	第16号竪穴住居跡(3)	62
図7	第1号竪穴住居跡	34	図41	第17号竪穴住居跡、 第18号竪穴住居跡(1)	63
図8	第2・3号竪穴住居跡(1)	35	図42	第18号竪穴住居跡(2)	64
図9	第2・3号竪穴住居跡(2)	36	図43	第18号竪穴住居跡(3)	65
図10	第4号竪穴住居跡	36	図44	第20号竪穴住居跡	66
図11	第6号竪穴住居跡(1)	37	図45	第21号竪穴住居跡(1)	67
図12	第6号竪穴住居跡(2)	38	図46	第21号竪穴住居跡(2)	68
図13	第7号竪穴住居跡	38	図47	第21号竪穴住居跡(3)	69
図14	第8号竪穴住居跡(1)	39	図48	包含層出土遺物(平安)	69
図15	第8号竪穴住居跡(2)	40	図49	第2～5・7号土坑	70
図16	第9号竪穴住居跡	40	図50	第8～11号土坑	71
図17	第10・19号竪穴住居跡(1)	41	図51	第12～17号土坑	72
図18	第10・19号竪穴住居跡(2)	42	図52	土坑出土遺物(1)	73
図19	第10・19号竪穴住居跡(3)	43	図53	土坑出土遺物(2)	74
図20	第11号竪穴住居跡(1)	43	図54	土坑出土遺物(3)	75
図21	第11号竪穴住居跡(2)	44	図55	第10・15号溝跡	76
図22	第11号竪穴住居跡(3)	45	図56	第11・12・14・16号溝跡	77
図23	第12号竪穴住居跡(1)	46	図57	第13号溝跡	78
図24	第12号竪穴住居跡(2)	47	図58	溝跡出土遺物	79
図25	第12号竪穴住居跡(3)	48	図59	第1号円形周溝	79
図26	第13号竪穴住居跡(1)	49	図60	第2・3号掘立柱建物跡	80
図27	第13号竪穴住居跡(2)	50	図61	第1号掘立柱建物跡	81
図28	第13号竪穴住居跡(3)	51	図62	包含層出土遺物(縄文、江戸時代以降)	81
図29	第22号竪穴住居跡(1)	52	図63	街道跡	82
図30	第22号竪穴住居跡(2)	53	図64	竪穴住居跡主軸方位	102
図31	第22号竪穴住居跡(3)	54	図65	平安時代の遺構配置	103
図32	第22号竪穴住居跡(4)	55	図66	下之切通り関連図	107
図33	第22号竪穴住居跡(5)、第17号溝跡	55		a) 郷山前村漆山絵図、b) 発掘調査地付近地形図、 c) 2006年調査 溝8	
図34	第14号竪穴住居跡	56	グラフ1	上野遺跡の土師器・須恵器比率	104
			グラフ2	平安時代土師器の器種組成	104

表1	遺構の新旧関係	102
表2	遺構の推定時期	102
表3	竪穴住居跡の主軸方位	102
表4	甕の出土個体数	103
表5	上野遺跡における 土師器・須恵器の比率	104

表6	他遺跡における 土師器・須恵器の比率	104
表7	上野遺跡における 平安時代土器の器種組成	104
表8	青森県緑釉陶器出土遺跡	105

## 図版目次

巻頭図版1 調査区中央部（空中写真）、  
緑釉陶器

巻頭図版2 街道跡

図版1 遠景

図版2 調査区

図版3 遺跡の状況

図版4 竪穴住居跡(1) SI-1~4

図版5 竪穴住居跡(2) SI-6~8

図版6 竪穴住居跡(3) SI-8・9・10・19

図版7 竪穴住居跡(4) SI-10・19・11

図版8 竪穴住居跡(5) SI-11・12

図版9 竪穴住居跡(6) SI-12

図版10 竪穴住居跡(7) SI-13

図版11 竪穴住居跡(8) SI-13・14

図版12 竪穴住居跡(9) SI-15

図版13 竪穴住居跡(10) SI-15

図版14 竪穴住居跡(11) SI-16

図版15 竪穴住居跡(12) SI-16・17

図版16 竪穴住居跡(13) SI-18

図版17 竪穴住居跡(14) SI-19・20

図版18 竪穴住居跡(15) SI-21

図版19 竪穴住居跡(16) SI-22

図版20 土坑(1) SK-2~5

図版21 土坑(2) SK-7~9

図版22 土坑(3) SK-10~12

図版23 土坑(4) SK-13~17

図版24 性格不明遺構・円形周溝・溝跡(1)  
SX-1、円形周溝、SD-10・11

図版25 溝跡(2) SD-10~13

図版26 溝跡(3)・掘立柱建物跡(1)  
SD-14~16、SB-2

図版27 掘立柱建物跡(2)・街道跡  
SB-1・3、街道跡

図版28 調査の状況

図版29 平安時代の土器(1) 集合写真

図版30 平安時代の土器(2) 坏

図版31 平安時代の土器(3) 坏・皿

図版32 平安時代の土器(4) 土師器甕・鉢・壺・埴、  
製塩土器、須恵器甕

図版33 平安時代の土器(5) 土師器甕

図版34 平安時代の土器(6) 土師器甕

図版35 平安時代の土器(7) 土師器甕

図版36 平安時代の土器(8) 土師器甕

図版37 平安時代の土器(9)・緑釉陶器  
土師器甕、ミニチュア土器、緑釉陶器、  
赤色顔料付着土器、漆喰膜付着土器、  
坏・皿

図版38 平安時代の土器(10)・鉄製品  
土師器、須恵器、鉄製品

図版39 石器・土製品・石製品・鉄滓・  
縄文土器・陶器

図版40 土器細部 墨書土器、ヘラ記号、  
砂底土器、坏底部付近のケズリ

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

青森市浪岡地区に所在する上野遺跡は、青森県土整備事務所所管の県道五所川原浪岡線交通安全施設整備事業の工事予定地となっていることから、平成17年度から文化財保護課は事業所との協議を重ね、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した（一次調査）。その経緯については、平成20年3月に刊行した報告書に記載している（青森県埋蔵文化財調査報告書第445集）。

当初の予定では、平成18・19年度の二箇年で発掘調査を実施する予定であったが、用地買収が難航したため、平成19年度の予算を繰り越して平成20年度に実施することになった（二次調査）。

上野遺跡に係る土木工事のための発掘通知は、平成20年2月に東青地城県民局地域整備部長名で提出され、同年2月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

### 第2節 調査の方法

#### （1）発掘作業の方法

『浪岡町史』（浪岡町2000）には、本遺跡の所在する大字樽沢字村元地内の表採資料（土師器・須恵器）が掲載されている。平成18年度に当センターが実施した一次調査では、縄文・平安時代の遺物は出土したが集落の発見には至らなかった。平成20年度の二次調査では、存在が予想される両時代の集落跡の発見に重点を置いて調査することとした。

上野遺跡の調査グリッドは、一次調査で設定されたものを踏襲し日本測地系（Tokyo Datum）による公共座標値 $X=78,736$ 、 $Y=23,016$ を基準点に1辺4mで設定した。基準点をⅠA-1とし、東に向かってローマ数字とZを除くアルファベットでⅠA～ⅠY、ⅡA～ⅡY、ⅢA～・・を、北に向かってⅠから順に算用数字を付し、両者の組み合わせによってⅢP-76、ⅣJ-109のように表した。グリッドの名称は南東隅で代表させた。測量基準杭は本事業にあたって設定された用地幅杭を用い、標高値は付近の工事用KBMから幅杭に移動した。

遺跡の基本土層は表土から順にローマ数字を付けて呼称したが、一次調査と二次調査で土層番号が異なっている。以下の記載では二次調査の土層番号を用い、その詳細は次章に記した。

発掘作業は調査対象範囲を旧地権者別にA～J区に分け、地区ごとに任意のトレンチを設け、ロームとの漸移層（Ⅳ層）上面まで人力で掘り下げて遺構確認を行い、遺構または遺物が確認された地区は必要に応じて調査区を拡張した。また、住宅の出入り口通路付近は調査できなかった。表土からⅢ層までは遺物が希薄であることが分かったため、拡張部分の当該層掘削は主に重機で行った。排土は、調査区周辺に借り上げた排土置き場へトラックで運搬した。

遺構確認面はⅣ層上面とし、検出遺構には原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。なお、一次調査で土坑1基・溝跡9条が検出されているため、土坑は2号、溝跡は10号から番号を付けた。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の規模・形態に応じて基本的には4または2分割で設定した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に株式会社CUBIC製の「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションに

よる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴うカマド等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遺り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位で層位ごとまたは堆積土一括で取り上げたが、一部はドットマップ図や形状実測図を作成した。包含層は重機によって掘削した部分が多いが、出土した遺物はグリッドまたは地区単位で層位ごとに取り上げた。

写真撮影には、原則として35mmモノクローム・カラーリバーサルの各フィルム及び1000万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。撮影は調査担当職員が行った。また、業者に委託してラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を、6×6判・35mmカラーリバーサルフィルムを用いて行った。

## (2) 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、縄文時代の掘立柱建物跡2棟、平安時代の竪穴住居跡21軒、土坑15基、江戸時代の街道跡1条等の遺構が検出され、土師器を主体とする土器25箱等、段ボール箱換算で29箱の遺物が出土した。また、持ち帰った土壌及び炭化材サンプルは6箱である。整理・報告書作成作業は、平安時代集落跡の時期及び構造の検討を主眼として進めた。

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業では原則としてこれを縮尺1/20で図化し、簡易遺り方測量等で作成した他の図面との調整を行った。写真類は、35mmモノクロームフィルムは撮影順でネガアルバムに、35mmカラーリバーサルフィルムは遺構別に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理し、タイトルを付けた。

遺物の注記は、調査年度・遺跡名・出土区・遺構名・層位・取り上げ番号を略記し、直接注記できないものは収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点について整理を怠らないようにした。報告書掲載にあたっては、遺物の分類を行った上で遺構に伴って使用・廃棄されたものを中心に選別、図化した。また、土器は口径をできるだけ復元するよう努めた。遺物写真撮影は業者に委託し、質感が十分伝わるよう留意した。

理化学分析は、集落跡の時期を特定するための放射性炭素年代測定、火山灰同定の他、平安時代に利用された植物を特定するための炭化種実同定等を主に業者に委託して行った。炭化種実の回収にあつた土壌水洗選別は当センターで行った。

遺構・遺物実測図やその他挿図のトレースは、手作業とデジタルトレースを併用した。デジタルトレースは、株式会社CUBIC製の「トレースくん」とAdobe社製「イラストレーター」で行った。実測図版・写真図版の版下作成は、基本的に手作業で行った。

## 第3節 調査の経過

### (1) 発掘作業の経過

平成20年度の上野遺跡発掘調査は、2,500㎡を調査対象として、4月22日から7月25日までの発掘作業期間で実施することになった。第一次調査の結果予想された、縄文・平安時代集落の発見に主眼

を以て発掘作業を進めることとした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	伊藤 博文 (現青森県総合社会教育センター所長)
次長 (調査第一GL)	工藤 大 (現次長)
総務GL	櫻庭 孝雄 (平成21年3月退職)
文化財保護主査	宮嶋 豊 (発掘調査担当者) (現青森市立北中学校教諭)
文化財保護主事	岡本 洋 (発掘調査担当者)
調査補助員	高谷 景子、池田 敬亮、村上 由美子

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授 (考古学)
調査員	葛西 勲	前青森短期大学教授 (考古学)
	島口 天	青森県立郷土館学芸主査 (地質学) (現主任学芸主査)
	佐藤 仁	元青森県文化財保護審議会委員 (歴史学)
	工藤 清泰	青森市市民文化生涯学習課市史編さん室長 (考古学) (現青森市長公室次長)

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

[平成20年度]

4月中旬から、調査事務所・駐車場の整備等事前準備を行い、4月22日に調査機材等を現地に搬入し、環境整備を行った。発掘作業員は28名である。調査予定範囲をA～J区に分け、各区にトレンチを設定し、4月23日に粗掘りを開始した。また、並行して付近の工事用KBMから調査区内の用地幅杭に標高値を移動した。4月30日から5月2日まで、E区の住宅基礎撤去を重機で行った。

5月1日には、J区で道路とみられる硬化面と側溝を確認した。史料を調査した結果、江戸時代の街道跡の可能性が高まったため、佐藤仁・工藤清泰両氏に調査員を委嘱することとした。各トレンチで粗掘りと遺構確認を継続したところ、調査区全域に平安時代の遺構が広く分布することが明らかとなり、5月21日から重機を併用して調査区を拡張した。この結果、E・F区を中心に多数の遺構が確認され、順に精査した。6月24日、SI-15で緑釉陶器の破片が出土した。7月2日、SI-11で須恵器破片を蓋とする埋設土器を確認した。7月9日に、業者に委託してラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、発掘作業が終了した地区から埋め戻しを開始した。この間、村越潔調査指導員を初め調査員各氏が調査指導のため来訪され、種々ご教示を賜った。7月16日から、E区東側3箇所を確認調査を実施し、平安時代の集落が今年度調査対象範囲の東に広がることが分かった。

7月19日、浪岡地区内外から60名余りの参加を得て現地見学会を開催した。この後、7月25日まで遺構精査の残務を継続し、同日調査機材や出土品を搬出し、現地から撤収した。この後、7月30日まで重機による調査区の埋め戻し作業を行い、東青地域県民局道路管理課に現場を引き渡した。8月8日に文化財保護課から所轄の警察署に遺物発見届を提出した。

## (2) 整理・報告書作成作業の経過

平成20年度の上野遺跡発掘調査では、縄文時代の掘立柱建物跡2棟、平安時代の竪穴住居跡21軒、土坑15基、江戸時代の街道跡1条等の遺構が検出され、土師器を主体とする土器25箱等、段ボール箱換算で29箱の遺物が出土した。報告書刊行事業は、平成21年度に実施することとなったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成20年11月に、遺物の水洗・注記作業は平成21年3月までに終了している。その他の整理・報告書作成作業は、平成21年4月1日から平成22年3月31日までの期間で行った。上野遺跡は縄文・平安・江戸時代の複合遺跡であるが、主体は平安時代の集落跡であることを踏まえ、整理作業の工程を計画した。報告書の総ページ数は166ページとし、記載の多くを平安時代の遺構・遺物に充てた。

整理・報告書作成体制は、基本的に発掘調査体制を引き継いだものである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 嗣浩
次長	工藤 大
総務GM	木村 繁博
調査第一GM	成田 滋彦
文化財保護主事	岡本 洋（報告書作成担当者）
調査補助員	池田 敬亮、塩谷 龍平、平野 華奈、檜山 亜紗美
整理作業員	相馬 弘子、野呂 由美子、森 秀子、工藤 好枝

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況は、以下のとおりである。

〔平成20年度〕

11月に写真・図面類の整理作業の一部を行い、写真類の整理作業は終了した。12月に炭化材のサンプルを整理し、3点について放射性炭素年代測定を委託した。また、3月末までに遺物の水洗・注記作業を行い、終了した。

〔平成21年度〕

4月上旬から、土器を出土単位ごとに分け、接合作業を行った。6月上旬から、接合の終了した土器へ石膏を入れ、復元作業を行った。この間、並行して報告書掲載遺物の選別を行い、7月上旬から実測・拓本の採取作業を開始した。土器の実測は11月上旬まで、石器・鉄製品の実測は12月中旬までを要した。また、7月には、土壌サンプルの一部を水洗選別し、回収した炭化種実の分析委託を行った。12月下旬、図化作業が終了した遺物から、順次トレースを行った。遺構図面の整理は11月までに終え、12月に遺構実測図・遺構配置図のトレースを行った。

トレースが終了した遺物・遺構については、1月に印刷用の版下を作成した。また、遺物写真撮影を業者に委託して行い、写真図版を作成した。原稿の執筆は他の整理作業と並行して行った。1月下旬、原稿・版下が揃ったので報告書の割付・編集を行い、印刷業者を選定・入札して入校した。

3月29日、3回の校正を経て報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 周辺の遺跡（図1）

上野遺跡は青森市浪岡野沢地区にあり、JR奥羽本線浪岡駅から西へ約2kmに位置する。標高は約27mで、津軽山地南端の低平な丘陵上に立地する。南西に津軽平野を望み、その沖積地から10mほど高位にあたる。遺跡の現況は宅地であり、その中央を県道五所川原浪岡線が通っている。

浪岡地域（旧南津軽郡浪岡町）では、国道7号線浪岡バイパスの建設に伴い国史跡高屋敷館遺跡をはじめとする平安時代集落が数多く調査された。それらは本遺跡の北東約2kmに所在する道の駅「なみわか」付近から北へ3kmの間、大釈迦川右岸に沿う丘陵縁辺に連続して立地する。また、本遺跡の北方約5kmには平安時代の国史跡五所川原須恵器窯跡群が分布し、東方約4kmには中世に北畠氏が居城とした国史跡浪岡城跡が所在するなど、浪岡周辺には古代から中世にわたって多くの遺跡が営まれた。

浪岡地域では、9～10世紀にかけて、先述のように大釈迦川右岸の丘陵に大規模な集落が形成されている。これらの遺跡群は、北から山本・野尻（1）・野尻（4）・野尻（2）・野尻（3）・高屋敷館・山元（1）～（3）の各遺跡からなり、これまでに600軒を超える竪穴住居跡が調査されている。また、これらの集落には、丘陵の西側にある五所川原須恵器窯跡群から須恵器が供給されていたことが分かっている。上野遺跡はB-Tm降下後を含む10世紀前半の集落を主体とし、これらの集落と同時期に営まれ地理的にも近接するが、竪穴住居・掘立柱建物・外周溝がセットとなる建物跡や、井戸跡を伴わない点で差異が認められる。10世紀後半以降には本遺跡から南に3～4kmの十川沿いで、沖積地に進出する大沼遺跡・宮元遺跡・水木館遺跡が知られるほか、高屋敷館遺跡では大規模な土塁と壕に囲まれた集落が形成されるなど、遺跡立地等に変化が窺われる。本遺跡は丘陵に立地し、土塁や環壕を伴わない点から当該期には平安時代の集落が終焉を迎えていた可能性がある。

多くの遺跡が調査された浪岡地域にあって、果樹園の広がる野沢地区にはこれまで発掘調査の手が入ることが少なく、近年ようやく寺屋敷平遺跡・中平遺跡が相次いで調査された。寺屋敷平遺跡は本遺跡の北約2kmに位置し、標高約40mを測る。2006年の発掘調査では、竪穴住居跡10軒をはじめとする平安時代（9世紀末～10世紀前半）の集落跡が確認されたほか、縄文時代早期以降各時期の遺物が出土している（青森県教育委員会2008）。中平遺跡は本遺跡の北西約1km、熊沢溜池の対岸に位置し、標高は30～35mほどである。同遺跡では2007年から本発掘調査が行われており、同年の調査で掘立柱建物を主体とする縄文時代後期前葉の集落跡と、平安時代（10世紀前葉主体か）の集落跡が検出されたほか、縄文時代早期以降各時期の遺物が出土している（青森県教育委員会2009）。その後の調査でも、広範囲に平安時代の竪穴住居跡の存在が確認されている。上野遺跡も寺屋敷平・中平遺跡同様、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが分かり、野沢地区には両時代の遺跡が広がっていることが明らかとなった。なお、本地区の中世以降については不明な点が多く、遺跡の存在はこれまで明瞭に知られていない。近世に入ると現在の大字単位で集落が成立し始め、正保国絵図（1645年）には記載のなかった樽沢・郷山前両村にも、嘉永5年（1852）以降に成立したとみられる漆山絵図が遺されている（浪岡町2002）。また、本遺跡を貫く県道は、江戸時代に津軽藩の公道とされた「下之切通り」<sup>しもぎり</sup>と推定ルートにあたる（青森県教育委員会1984）。「下之切通り」は、「羽州街道」の銀村（本遺跡の南

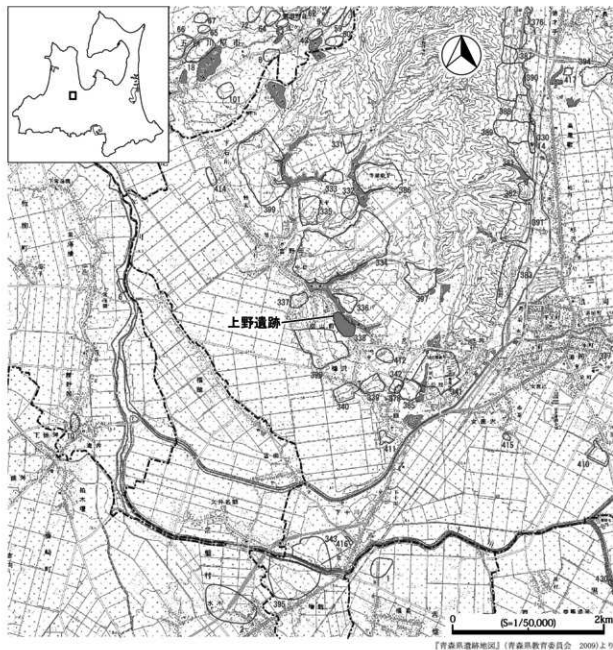


図1 遺跡位置図

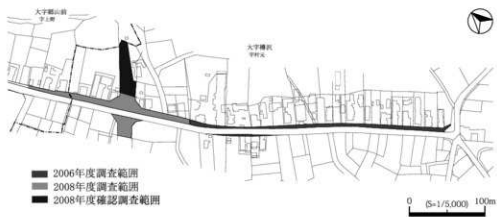


図2 調査区域図

東1.5kmにあたる青森市浪岡大字銀)を起点とし、梵珠山西麓に沿って北上した後、十三湖北岸を経て現在の北津軽郡中泊町小泊に至る全長16里ほどの街道である。

## 第2節 基本土層

一次調査のⅡ層を今回調査で細分した。対照は次の通りである。

《一次Ⅱ層→本書Ⅱ・Ⅲ層、一次Ⅲ層→本書Ⅳ層、一次Ⅳ層→本書Ⅴ層上部》

上野遺跡は県道が段丘頂部を走っており、全体としてほぼ平坦面に立地する。調査区はわずかに南に傾き、調査区北端の標高は27.5m、南端は26.5mである。また、調査区外ではE区東端から熊沢溜池に向かって緩やかな斜面を形成する。

調査区内は、住宅及び現道の基礎部分を除いて遺構面が良好に保存され、地表下約20cmに平安時代の地表面(Ⅱ層上面)がある。その下の黒色土(Ⅲ層)中では平安時代の遺構の壁面が確認できるため、Ⅲ層はそれ以前の堆積土と考えられる。なお、Ⅲ層の堆積は、調査区の一部でのみ認められた。Ⅱ・Ⅲ層は黒褐色を呈し、遺構プランが把握しづらいため、遺構確認作業は基本的にロームとの漸移層であるⅣ層上面まで掘り下げて行っている。なお、本遺跡ではTo-a・B-Tmなどの広域火山灰が自然堆積した住居跡は検出されていない。Ⅳ層以下は無遺物層のため、堆積状況を把握する目的での部分的な掘削に止めた。ただし、火山灰分析(第4章第2節)ではⅤ～Ⅶ層がTo-H再堆積とされており、本来の段丘構成層の把握は今後の課題である。図3は、ⅢS-90・ⅢM-70グリッドで採図した土層堆積状況の実測図で、これを基本土層とした。ⅢM-70のローム層は、火山灰分析の結果海綿骨針を含むため、同じく海綿骨針を含むⅦ層に対応するものであろう。この部分でⅢ層が厚く、Ⅳ～Ⅵ層を欠くのは、埋没した沢に近く堆積土が流出したためと考えられる。

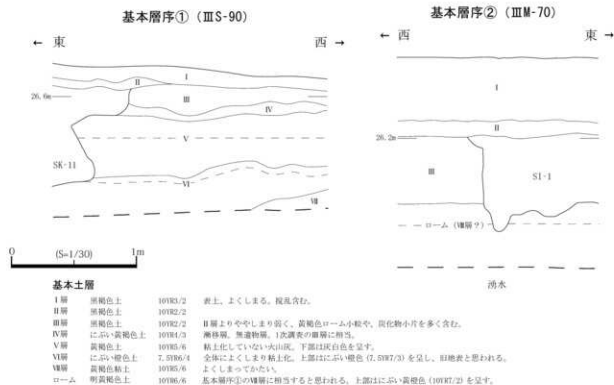


図3 基本土層図

### 第3節 上野遺跡の地形と地質

青森県立郷土館 島口 天

#### (1) 遺跡周辺地域の地形と地質

上野遺跡は青森市浪岡大字樽沢に位置し、津軽山地の南西端部に発達する海成段丘面上に立地する。図4に本地域における段丘の分布を示し、本遺跡の位置を●印で示す。以下に、吾妻(1995)を引用して上野遺跡周辺地域および遺跡内の地形と地質について述べる。

津軽山地は津軽半島を北北西-南南東方向に走る脊梁山地で、主な山頂として北から増川岳(714m)、大倉岳(677m)、馬ノ神山(549m)があり、南に向かって低くなる傾向がある。半島北東部にも丸屋形岳(718m)を中心とした山地があり、津軽半島の山地はこれらの山を中心に4つの山塊に区分され、構造地質学的には構造ドームとされている。各ドームの中心には第三系火山岩類や堆積岩が露出し、周囲に新第三系・更新統の堆積岩が分布する。ドーム東縁には、津軽断層が三厩から浪岡北方にかけて南北に走る。この断層は70~80°西傾斜した衝上性逆断層で、山地の地質構造を東西に二分する。断層の東側は鮮新統~更新統の堆積岩が厚く堆積するのに対し、西側は中部中新統よりも新しい堆積岩が緩く西へ傾いて分布する。津軽半島の北側および東西の山地・平野境界には、海成段丘が発達する。

津軽半島では、山地の東西両縁に活断層が分布する。西縁の活断層は走向が北北西-南南東方向で山地側(東)が隆起しており、津軽山地西縁断層と呼ばれる。青森県による津軽山地西縁断層の調査結果からは、五所川原市飯詰から南に幅約1km、長さ約15kmで、西側が沈降している撓曲が認められている。この撓曲の約500m東には、五所川原市飯詰から青森市浪岡樽沢にかけて北北西-南南東の方向にのび、西に傾斜した長さ約15kmの大平断層が断続的に認められている。南東縁の活断層は、青森市浪岡女鹿沢の北から徳才子村付近にかけて、長さ約6kmで東側が沈降する浪岡撓曲が分布する。

津軽半島に分布する地形面を、その分布形態と高度により5段の段丘(I面~V面)と沖積面に区分し、さらに構成層の層相からそれを海成段丘(m)と河成段丘(f)とに区分すると、高位からI面、II面、III面・III'面、IV面、V面となる。II面はI面よりも勾配が急で、I面と斜交する。III面は半島全域で最も発達した段丘で、III'面は蟹田川流域に分布し、III面に高度的に連続する。IV面はおもに現在の河川沿いに分布し、勾配はIII面より急で、段丘面の延長は沖積面下に没する。V面は沖積面と小崖をもって区別される。

津軽半島において段丘構成層を覆う火山灰の層序は、上位から十和田八戸降下テフラ(To-HP)、褐色ローム、シルト質火山灰、北日本における広域火山灰の洞爺火山灰(Toya)、風化が進んだ褐色ロームである。高位に位置するI面とII面は、これらをすべて載せるが、最下部の褐色ロームの厚さに違いがある。III面とIII'面は段丘堆積物直上、または堆積物中にToyaを挟み、Toya以上の火山灰層を載せる。IV面はToyaより上の火山灰層の一部を載せる(半島南部)か、あるいはまったく載せない(半島北部)。V面は火山灰層に覆われない。

上野遺跡は海成段丘面I面上に立地している。浪岡から原子にかけて分布するI面は西側に広がる津軽平野に向かって傾き下がり、平野側に近づくにつれ勾配が増す撓曲崖(津軽山地西縁断層)の形態を示す。上野遺跡の東側に溜池があるが、このような溜池は大平断層による山地側へ傾いた低崖に沿った水系を利用してつくられている。五所川原市高野や大沢迦川流域には、IV面が分布する。

大沢迦川右岸側のIV面は沖積面に向かって東方に高度を下げ、凸形の斜面が撓曲崖であることを示しており、浪岡撓曲の末端部は沖積面下に没すると推定される。

段丘面の形態およびToyaとの層序関係に基づき、III面を最終間氷期最盛期（酸素同位体ステージ5e）に形成されたとすると、I面の形成時期は最終間氷期よりも1つ前の間氷期（同ステージ7、約20～22万年前）と考えられるが、より古い面の可能性もある。IV面の形成年代は、Toya降下以降の低海水準期（同ステージ2、約2万年前後）と考えられる。

## （2）遺跡内における地形と地質

上野遺跡は海成段丘面I面上に立地し、標高は約27mである。I面は西側に広がる津軽平野に向かって傾き下がり、平野側に近づくにつれ勾配が増す。上野遺跡の東側に宝溜池と熊沢溜池があるが、これらは大平断層による山地側へ傾いた低崖に沿った水系を利用してつくられている。

遺跡内で見られる土層を色相や縮まり具合、含有物等によってI～VII層に細分し、それを基本層序として詳細について述べる。

I層：表土。黒褐色（10YR3/2）を呈し、よく縮まる。

II層：黒色土。黒褐色（10YR2/2）を呈する。

III層：黒色土。黒褐色（10YR2/2）を呈し、縮まりは弱い。粒状のロームを多く含む。炭化物小片が多い。

IV層：III層とV層の漸移層。にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する。

V層：砂質火山灰層。黄褐色（10YR5/6）を呈し、粘土化していないが、上部ほど風化が進み黄色味強い。中粒砂～細礫サイズの重角礫状の砂粒が含まれ、やや砂質である。中礫サイズまでの軽石粒も散在し、部分的に密集している。含まれる火山ガラスの分析から、十和田八戸テフラ（To-H）の再堆積層と考えられる。

VI層：砂質ローム層。にぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、粘土化が進みよく縮まる。最上部は薄く暗色帯となっており、V層が堆積するまでの間、地表となっていたことが考えられる。全体に粘土化が進んだ細粒火山灰が薄くレンズ状に挟まれ、それには粗粒砂サイズの砂粒が含まれる。全体にも粗粒砂サイズ程度の砂粒が含まれる。含まれる火山ガラスの分析から、十和田八戸テフラ（To-H）の再堆積層と考えられる。

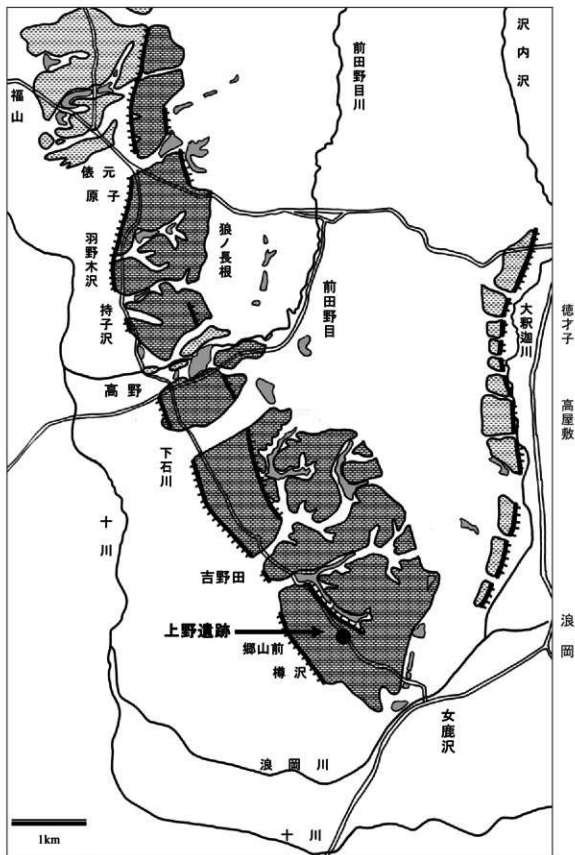
VII層：粘土層。黄褐色（10YR5/6）を呈し、VI層よりやや暗色で粘土化が進み、よく縮まって固い。含まれる火山ガラスの分析から、十和田八戸テフラ（To-H）の再堆積層と考えられる。

V・VI・VII層は、十和田八戸テフラ（To-H）の火山ガラスが含まれることから同テフラの再堆積層と考えられたが、色や岩相が異なる原因は不明である。

## 引用文献

吾妻 崇（1995）変動地形からみた津軽半島の地形発達史。第四紀研究，34，p.75 - 89。

小池一之・町田 洋（2001）1/5万段丘分布図「蟹田」・「油川」。日本の海成段丘アトラス 日本I [北海道・東北]，東京大学出版会，CD-ROM。



【凡例】 I m 面 IV f 面 溜池 断層・拗曲 (榊方へ傾斜)

図4 段丘分布図 [小池・町田 (2001) を元に作成]

## 第3章 遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構の番号は、一次調査からの連番とした。土坑は2号（SK-2）、溝跡は10号（SD-10）からとなっている。また、第5号竪穴住居跡は第11号溝跡（SD-11）に、第6号土坑は第2号掘立柱建物跡の柱1（SB-2柱1）に振り替えたため、これらは欠番とした。

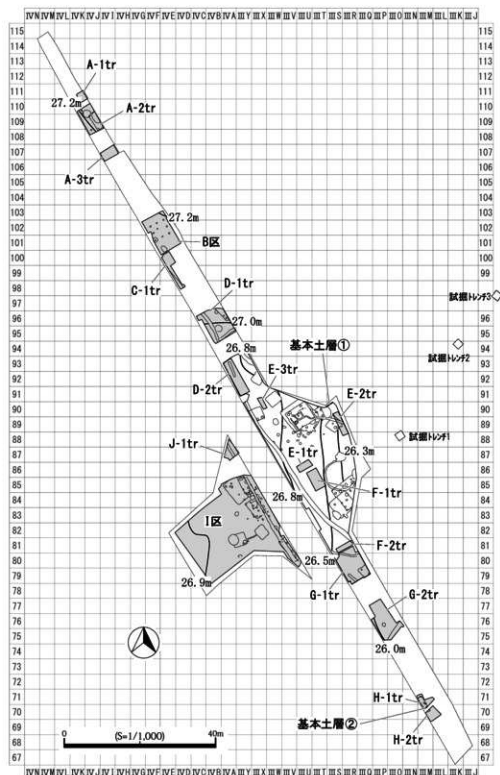


図5 トレンチ配置図

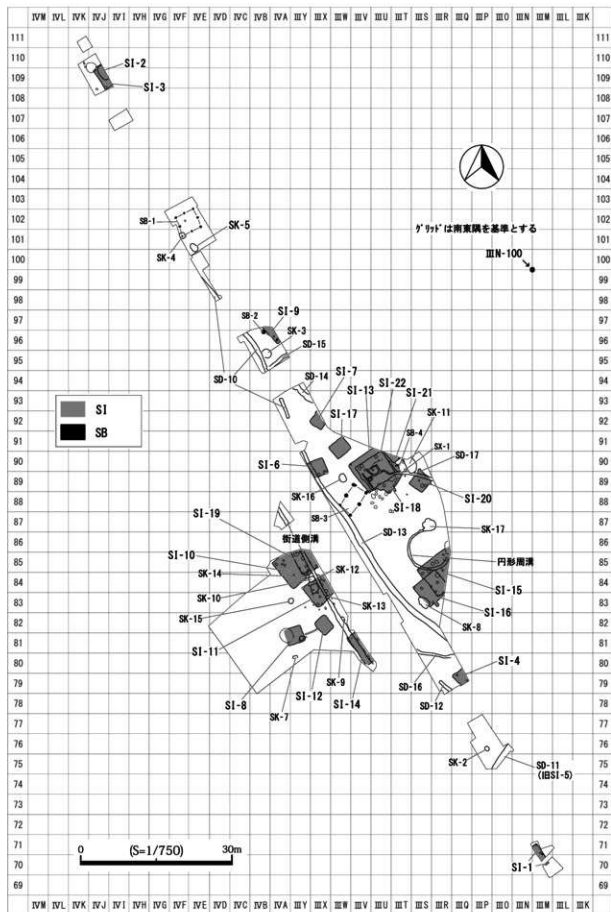


図6 遺構配置図



遺跡は丘陵頂部に立地し、各遺構は平坦面に構築されている。遺構確認は、特に記載がない限りIV層上面で行った。

発掘調査区の東側に当たる東向き緩斜面で、県道建設予定地内の確認調査を行っている。トレンチ1～3として、各辺2mの規模でIV層まで掘り下げた。すべてのトレンチで古代の遺物が出土したほか、トレンチ1では竪穴住居跡の北西隅を検出した。平安時代の集落跡は、少なくとも発掘調査区の東側に広がる事が確認された。

## 第1節 平安時代の遺構と出土遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡1棟、土坑15基、溝跡8条、円形周溝1基、性格不明遺構1基である。これらは、出土遺物や広域火山灰の堆積状況から概ね10世紀前半に収まる遺構群と考えられるため、特記事項のあるものを除いて〔時期〕の項目を省略した。出土遺物は土師器を主体とし、須恵器には五所川原産の古相に位置づけられるものを含まない。第12号竪穴住居跡では内陸部では出土がまれな製塩土器が、また、第15号竪穴住居跡では津軽平野に面した地域では初となる緑釉陶器の破片が出土した。時期決定の指標となるTo-aやB-Tmといった降下火山灰が覆土中に堆積した遺構は極めて少なく、自然堆積が認められる遺構は第5号土坑のみである。

### (1) 建物跡

竪穴住居跡は合計21軒検出しているが、これらの竪穴住居跡には付属施設を伴うものがあるため、本項のタイトルを建物跡とし、合わせて記載する。第21号竪穴住居跡には第4号掘立柱建物跡と第1号性格不明遺構が、第22号竪穴住居跡には第17号溝跡が伴うと考えられる。

カマドが確認できる住居跡は、第12号竪穴住居跡を除き南東壁に作られており、複数のカマドをもつ住居跡はない。住居跡の軸方向は、南東方向で一致する。また、住居跡同士が切り合うものもあり、集落には数段階の変遷が認められる。外周溝のある住居跡は確認していない。

#### 第1号竪穴住居跡 (SF-1 : 図7)

〔位置・確認〕ⅢM-71グリッドに位置する。〔規模・形状〕北東壁の長さは4.5mで、住居跡東端の調査に止まる。平面は方形と推定され、南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-141°-Eである。確認面から床面までの深さは45cmである。〔堆積土〕10層に細分した。ロームブロックを含む黒または黒褐色土を主体とし、廃絶後は埋め戻されている。C-D断面では7層に堆積土が軟質な部分が認められた。10層は貼床である。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。〔壁・床面〕全面を貼床とする。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。〔柱穴・施設〕東壁では部分的に周溝が確認される。C-D断面の床面(北西壁)では周溝は確認できなかったが、掘方は壁際が窪んでいるため本来周溝を伴っていた可能性がある。Pit1・2は床面で確認した。掘り底面でも3箇所のピットを確認しており、これらは床面で認識できなかった壁柱の可能性もある。床面からの深さは、Pit1が20cm、Pit2が15cm、Pit3が27cm、Pit4・5が35cmである。〔カマド〕確認していない。〔出土遺物〕土師器が少量出土した。1～4はロク口整形ではない土師器甕である。3の底部は何らかの圧痕を消すようなヘラナデ調整が施され、4の底部は砂底である。

## 第2号竪穴住居跡 (SI-2: 図8・9)

〔位置・確認〕IVJ-109グリッドに位置する。SI-3と重複し、本住居跡が新しい。〔規模・形状〕平面は隅丸方形と推定され、南西壁の長さは3.1m、確認面からの深さは75cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-150°-Eである。〔堆積土〕ロームブロックを多く含む層があり、廃絶後に埋め戻されたものと考えられるが、6・8・9層のように自然堆積とみられる黒色土が挟まれる。最下部の自然堆積層である9層より上位を上層、それより下位を下層として遺物を取り上げた。出土遺物は平安時代の土器のみである。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。〔壁・床面〕硬化面は確認できず、壁際の床面にやや起伏がみられる。17・18層は貼床の可能性がある。壁は外傾して立ち上がるが、南側では緩やかである。〔柱穴・施設・カマド〕確認していない。〔出土遺物〕土師器・石器が少量出土した。2・3は土師器坏、4は須恵器坏、6～9はロク口整形ではない土師器甕である。5は破損した砥石で、外周全体を機能面とする。

## 第3号竪穴住居跡 (SI-3: 図8)

〔位置・確認〕IVJ-109グリッドに位置する。SI-2と重複し、本住居が古い。〔規模・形状〕南西壁の長さは4.5mで、住居跡西端の調査に止まる。確認面から床面までの深さは40cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-147°-Eである。〔堆積土〕8層に細分し、断面図19～26層がこれに当たる。ロームブロックを多く含む、廃絶後に埋め戻されたと考えられる。24層上面を床とする。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。〔壁・床面〕全面を貼床とし、床面南側が硬化する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。〔柱穴・施設〕北西隅でピットが確認され、柱穴の可能性がある。床面からのピットの深さは29cmである。周溝はほぼ全体で確認された。南西壁に直交して外部に延びる2条の溝が確認されたが、住居跡に伴うものかどうか不明である。確認面からの深さは、太い溝が25cm、細い溝が35cmである。〔カマド〕確認していない。〔出土遺物〕土師器が少量出土し、復元可能な1のみを図示した。ロク口整形ではない土師器甕である。

## 第4号竪穴住居跡 (SI-4: 図10)

〔位置・確認〕IIIQ-79グリッドに位置する。SD-12は本住居跡に近接し、軸方向が類似するため外周溝の可能性もあるが、現時点では不明である。〔規模・形状〕住居跡北西隅の調査に止まり、規模は不明である。確認面からの深さは30cmである。北西壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-144°-Eである。〔堆積土〕10層に細分した。ロームブロックを多く含む、廃絶後に埋め戻されたと考えられる。10層は掘方覆土、9層は周溝である。また、床面で不整形な焼土範囲を、Pit3の上部で粘土範囲を確認した。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。〔壁・床面〕壁際に貼床が施され、中央はローム層を床面とする。平面図では、貼床の境界を破線で示した。〔柱穴・施設〕ピットを3基確認したが、柱穴かどうかは不明である。床面からの深さは、Pit1が10cm、Pit2が9cm、Pit3が5cmである。周溝は20cm程度の幅広に掘られ、検出した壁際全

体に巡る。[カマド] 確認していない。[出土遺物] 土師器・須恵器が少量出土した。1は土師器坏である。内外面が激しく被熱し、ガラス質滓が溶着しているため、増埴の可能性もある。2～4はロクロ整形ではない土師器甕である。須恵器大甕の胴部破片が出土したが、図化していない。

#### 第5号竪穴住居跡（欠番）

#### 第6号竪穴住居跡（SI-6：図11・12）

[位置・確認] ⅢX-90グリッドに位置する。SD-13と重複し、本住居跡が古い。[規模・形状] 平面は隅丸方形と推定され、北東壁の長さは3.2mで、西側は調査区外のため全体の規模は不明である。確認面から床面までの深さは10cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-155°-Eである。[堆積土] 5層に細分した。ロームブロックを多く含み、廃絶後に埋め戻されたと考えられる。3～5層は掘方覆土で、その上面を床とする。[壁・床面] 全面を貼床とし、中央付近が硬化している。[柱穴・施設] 柱穴は不明で、周溝は確認していない。ピットは3基確認した。Pit1・2は住居跡南東隅にあり、Pit1が新しい。Pit1は35×50cmの楕円形で床面からの深さは10cm、Pit2は95×60cmの楕円形で床面からの深さは25cmである。Pit2は底面付近で壁の一部がオーバーハングする。Pit3は焼土範囲の下部で検出されており、床面からの深さは15cmである。[カマド] 南東の壁際で確認した粘土・焼土範囲がカマドと考えられる。煙道は確認できなかった。[出土遺物] 床面に土師器片が多く散布していた。1～3はSI-6の出土で、1・2はPit1・2で出土した。1は内面が黒色処理された高台付の土師器坏で、1aと1bは直接接合しない。2はロクロ整形ではない土師器甕、3はロクロ整形の土師器甕である。4～9はSD-13のSI-6と重複する部分で出土した。SI-6出土土器とは接合関係をもたないが、SD-13の他の場所ではこのように集中して土器が出土することはなかったため、SI-6覆土に含まれていた可能性も考慮し、本項で記載する。4～6は土師器坏で、6の内面にはススが付着している。7は須恵器広口壺で、底部は回転ヘラ切りである。8はロクロ整形の土師器甕、9はロクロ整形ではない土師器甕である。

#### 第7号竪穴住居跡（SI-7：図13）

[位置・確認] ⅢX-92グリッドに位置する。[規模・形状] 平面は隅丸方形と推定される。南西壁の長さは2.8mで、東側は調査区外のため、全体の規模は不明である。確認面から床面までの深さは20cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-129°-Eである。[堆積土] 黒褐色土を主体とする。自然堆積か人為堆積かは判断できない。ピット周辺は破壊されたカマドに近い場所のためか、堆積状況はやや複雑である。8層は掘方覆土である。[壁・床面] 全面を貼床とする。壁は外傾して立ち上がる。[柱穴・施設] 粘土範囲の下でピットを1基検出したが、組み合わせるのは確認できない。床面からの深さは35cmである。周溝はない。[カマド] 南東壁付近で粘土の散布が認められ、カマドの痕跡と考えられるが、火床面は確認できなかった。[出土遺物] 土師器が少量出土しているが、図化できる資料はない。

## 第8号竪穴住居跡 (SI-8: 図14・15)

[位置・確認] III Y-81グリッドに位置する。[規模・形状] 南東壁の長さ3.6m、北東壁の長さ3.2mの隅丸長方形で、床面積は推定11.2㎡である。確認面から床面までの深さは10cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-152°-Eである。[堆積土] 床面までは2層に分けた。確認面に炭化物が多く散布しており、焼失家屋の可能性がある。カマド左側の床面に、粘土と焼土が混合した土が広がる。ロームと黒褐色土の混合土からなる掘方覆土を確認しているが、断面を採図していない。[壁・床面] 全面を貼床とする。壁は外傾して立ち上がる。[柱穴・施設] 床面で土坑・ピット各1基を検出した。土坑は床面の南東隅にあり、平面は90cmの円形で、深さは40cmである。覆土の状況から埋め戻された様子が窺われる。ピットは土坑と接しており、平面は30×50cmの楕円形で、深さは25cmである。[カマド] 南西隅に作られ、煙道は半地下式である。ソデは、床の上に粘土を含む褐色土を主体として構築される。ソデの端部には、芯材の一部として口縁を伏せた同一個体の裏を左右に分割して使用している(図16-7)。火床面ははっきり確認できなかったが、カマド4層がよく焼けておりその可能性がある。ソデの長さは壁面から50~60cm、ソデの幅は40cmである。前庭部の床面は周囲よりわずかに窪む。壁から煙出しまでの長さは50cmである。[出土遺物] カマド付近を中心に出土している。1は須恵器環、2~4は土師器環、5~8はロクロ整形の土師器環、9は焼成粘土塊である。2はSI-12(中層)出土のものと同接関係をもち、本住居とSI-8が同時期の可能性もある。

## 第9号竪穴住居跡 (SI-9: 図16)

[位置・確認] IV A-96グリッドに位置する。SB-2と重複し、本住居跡が新しい。[規模・形状] 南西隅を部分的に調査したのみで、全体の規模は不明である。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-131°-Eである。確認面から床面までの深さは、25cmである。[堆積土] 1層は廃絶後の堆積土で自然堆積の可能性があり、2層は埋め戻されたものと考えられる。3層は周溝で、4層は掘方覆土である。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。[壁・床面] 全面を貼床とする。壁は外傾して立ち上がる。[柱穴・施設] 床面でピットを2基検出したが、伴う柱が不明であり、柱穴かどうかは判断できない。堆積土はともに黒色土の単層で、床面からの深さは、Pit1が20cm、Pit2が8cmである。周溝は調査した範囲の壁際すべてで検出した。[カマド] 確認していない。[出土遺物] 土師器が少量出土した。10は内面が黒色処理された土師器環、11はロクロ整形ではない土師器環である。

## 第10号竪穴住居跡 (SI-10: 図17・18)

[位置・確認] IV A-85グリッドに位置する。SI-19・SK-14と重複し、本住居跡が古い。[規模・形状] 平面は1辺6.6mの隅丸方形で、床面積は推定で41㎡である。確認面から床面までの深さは15cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-140°-Eである。[堆積土] 本住居跡に伴うと考えられる堆積土は、8層に細分した。自然堆積か人為堆積かは判断できない。検出面に炭化物が多く、床面にも焼土が散らばるため、焼失家屋と考えられる。8層は掘方覆土である。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行った

が、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された。また、カマド周辺に散らばっていた構築材とみられる黄褐色土は珪藻土と同定された（第4章第2節）。[壁・床面] 全面を貼床とする。カマド周辺に硬化範囲が認められる。壁は外傾して立ち上がる。[柱穴・施設] 周溝は検出した壁のほぼ全体で確認した。北西壁の周溝は、SI-19の貼床下で検出した。SI-19と重複があり確定できないが、本住居跡に伴うと考えられるピットは9基で、主柱穴と推定できるものはない。またいずれも柱痕は確認できなかった。床面からの深さは、Pit1が61cm、Pit2が65cm、Pit3が23cm、Pit4が32cm、Pit5が34cm、Pit6が37cm、Pit7が63cm、Pit8が17cm、Pit9が36cmである。床面北西隅で、上面に焼土が堆積する土坑が検出された。45×55cmの楕円形で、深さは25cmである。[カマド] 南東壁に煙道が半地下式となるものが作られているが、残存状況が悪い。明瞭な火床面は確認できなかったが、20×50cmの不整形な被熱範囲が確認された。被熱範囲の壁寄りに伏せ置かれた土師器甕の底部（図18-1）は、支脚として用いられたものと考えられる。前底部は周囲の床面よりやや窪む。煙道は確認できなかった。[出土遺物] 土師器が主体である。1はロクロ整形ではない土師器甕、5～7はロクロ整形の土師器甕である。7の胴部上半には平行タタキが認められ、タタキで整形した後ロクロ調整されている。2・3は土師器坏で、3の外面には光沢のある黒色物質が付着し、判読不能な墨書も認められる。内面にはススが付着している。4は内面が黒色処理された土師器壺である。

#### 第11号竪穴住居跡（SI-11：図20～22）

[位置・確認] III X-84グリッドに位置する。SK-10・13と重複し、本住居が古い。[規模・形状] 南西壁の長さは5.1mで、北東壁が確認できないため全体の規模は不明である。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-137°-Eである。[堆積土] 7層に細分され、自然堆積か人為堆積かは判断できない。堆積土中に大きめの炭化材や焼土を含むため、焼失家屋と考えられる。7層は掘方覆土である。堆積土中にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された（第4章第2節）。[壁・床面] 全面を貼床とする。壁はほとんど残存していない。[柱穴・施設] ピットは13基検出されたが、主柱穴は不明である。床面からの深さは、Pit1が9cm、Pit2が68cm、Pit3が10cm、Pit4が13cm、Pit5が14cm、Pit6が42cm、Pit7が59cm、Pit8が38cm、Pit9が38cm、Pit10が20cm、Pit11が16cm、Pit12が19cm、Pit13が31cmである。周溝は確認していない。北西壁から住居外（北側）に伸びる溝を1条確認した。延長は2.5m、幅25cmで、確認面からの深さは54cmである。中央の土坑は、堆積状況から住居廃絶後に掘られたものと判断され、本住居跡に直接伴うものではない。1.5×1.7mの不正な隅丸方形で、深さは40cmである。底面には起伏があり、壁は急角度で外傾する。堆積土の状況から埋め戻されたものと考えられるが、2層に粉状の白色火山灰（同定結果はTo-h）を含む。同層はシルト質の土を主体とするため、水成堆積の可能性がある。[埋設土器] カマド左の床面では、須恵器甕の胴部片（図20-5）を蓋とする埋設土器が確認された。埋設土器本体は、内面が黒色処理された土師器小壺（同図4）である。正位に埋設されており、内部は空洞であった。頸部から口縁部は出土しておらず、破損部に接して蓋がされていたため、欠損したものを埋設したと考えてよい。底部には焼成前に施された、斜格子状のヘラ記号が認められる。蓋に用いられた須恵器甕は、SI-12で出土した破片（図25-15）と接合する。胎土は砂粒を多く含んで粗く、断面の色調は淡灰色を呈す。五所川原産とは考えら

れず、時期・産地は不明である。土師器小壺との接触部（須恵器裏内面）には鉄分が付着している。[カマド] 南東壁で、被熱範囲を挟むように埋設された甕 2 個体が出土した。この部分がカマドと考えられ、被熱範囲は火床面であろう。甕はSI-8のカマドと同様、口縁を下にして床面に伏せ置かれており、ソデの端部に設置されたと考えられる。右に図22-9が、左に同図10が使われていた。煙道は確認できなかった。[出土遺物] 土師器が主体である。図化したものは、図21・22に掲載した。1～3・6は土師器坏である。1の内面にはススが付着している。6の内面には薄い膜状の黒色物が付着しており、分析の結果漆塗膜と同定された（第4章第3節）。7・9・10はロクロ整形の土師器甕、8はロクロ整形でない土師器甕である。11はロクロ整形の土師器塼で、SI-12で出土した破片（図25-17）と同一個体の可能性がある。12は鉄製の刀子で、a～c3点は同一個体と考えられる。

#### 第12号竪穴住居跡（SI-12：図23～25）

[位置・確認] III X-82グリッドに位置する。[規模・形状] 平面は2.8×3.2mの隅丸長方形で、カマドのある辺が長い。床面積は8.2㎡、確認面から床面までの深さは30cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-132°-Wである。また、カマド右脇から南西に延びる、長さ2.6m、深さ10cmほどの溝を検出している。溝底面の標高は、住居に近いほうがやや低い。[堆積土] 11層に細分した。1～3層に炭化材が多く、焼失家屋と考えられる。12層は掘方覆土である。[壁・床面] 全面を貼床とし、カマド前庭部を中心に硬化範囲が確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がる。[柱穴・施設] カマド右脇に土坑が2基ある他、床面北東隅で床下土坑が検出された。床面からの深さは、土坑1・2が20cm、床下土坑が22cmである。柱穴・周溝は確認していない。[カマド] 南西壁に、煙道をトンネル状に掘り込む地下式のカマドが作られている。ソデは褐色粘土で作られ、ソデの間隔は50cmである。ソデの内側に弱い被熱が認められるが、火床面は確認していない。4層の下部に薄い炭化物層がある。煙道は床面から25cm高い場所から水平に延び、煙出しはビット状に窪む。壁から煙出しまでの長さは1mである。カマド堆積土の一部を採取し、フローテーション法で選別したところ、炭化したイネとイヌタデが含まれていた（第4章第4節）。[出土遺物] 遺物は床面よりやや浮いた位置で多く出土した。復元個体も多く、一括性が高い。SI-8、SI-11出土資料と接合しないし同一個体と考えられるもの（図15-2、図25-15・17）が出土しており、各住居と時期的に近接する住居跡と考えられる。1～4は土師器坏である。1の内面調整は粗雑で、工具痕のような稜を伴うロクロ目が認められる。また、1は内外面に、2は内面にススが付着している。3の口縁は扇形に欠損しており、打ち欠かれた可能性がある。また、内外面に黒斑が認められる。5～7は、ロクロ整形ではない土師器甕、8～13はロクロ整形された土師器甕である。12の頸部にはヘラ記号×が認められる。14は土師器短頸壺で、胴部上半に粘土紐の接合痕を残すため、輪積み成形の後ロクロ調整されたものと分かる。また、内外面に二次被熱によるハジケが認められる。15は須恵器甕で、外面は平行タタキで調整される。内面のタタキ目はほとんどナデ消されているが、部分的に平行タタキが認められる。16は平底のバケツ形をした、いわゆる「白砂式」とされる製塩土器である。小片化しており、外面は明赤褐色を呈する。外面に粘土紐の接合痕を明瞭に残し、底部には木目状の圧痕が認められる。口縁部は出土していない。17はロクロ整形された土師器塼である。

## 第13号竪穴住居跡 (SI-13 : 図26~28)

[位置・確認] III V-90グリッドに位置する。SI-18・21・22と重複し、本住居跡が新しい。また、本住居跡はSI-22を埋め戻した後、同一地点で拡張して建て替えた可能性がある。[規模・形状] 平面は、カマドのある南東壁の長さ7m、南西壁の長さ6.8mの方形で、推定床面積は48㎡である。確認面から床面までの深さは30cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-136°-Eである。[堆積土] 16層に細分した。全体にロームブロックを多く含み、廃絶後は埋め戻されたと考えられる。14~16層は掘方覆土である。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、To-Hのみが検出された(第4章第2節)。[壁・床面] 掘方覆土またはSI-22の覆土上面を床とする。カマド前底部の灰白色粘土範囲が硬化している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。北西壁の立ち上がりは周溝の20cm外側にあり、北東の周溝外側70cmの箇所にも同じく階段状の立ち上がりが認められるため、住居掘方は床面となる部分よりやや大きめに掘られていた可能性がある。[柱穴・施設] ピットは7基検出しており、Pit1~3が主柱穴、Pit6・7は隅柱の可能性はある。柱間はPit1-2が3m、Pit2-3が3.2mである。南東の主柱穴は確認できなかった。床面からの深さは、Pit1が35cm、Pit2が24cm、Pit3が32cm、Pit4が12cm、Pit5が20cm、Pit6が26cm、Pit7が17cmである。周溝はカマドのある南東壁を除いて検出された。[カマド] 南東壁に煙道が半地下式のもの作られており、SI-22のカマド位置と平面的にはほぼ重なる。左ソデの一部と火床面が確認されたが、残存状況は悪い。ソデは褐色の粘土で作られている。前底部には70cm×2mの不整形をした灰白色粘土範囲が確認された。上面および粘土を剥がした下部にも硬化が認められるため、カマド破壊後の粘土が散布したのではなく、床の補修と考えられる。壁から煙出しまでの長さは95cmである。[出土遺物] 土師器・須恵器・石器・土製品・石製品が出土しており、図28に掲載した。1は須恵器坏で、体部にヘラ記号が認められる。2は須恵器鉢である。口唇は面取りされざ丸く収められ、胎土は砂粒を多く含んで粗く、断面の色調は淡灰色を呈す。五所川原産とは考えられず、時期・産地は不明である。3は土師器鉢で、硬質に焼きあげられているが、側面に長径6.5cmの黒斑が認められる。整形はロクロによっており、器形は須恵器の写しと考えられる。また、側面に内側からの穿孔があり、外面は孔の周囲が剥離している。4~9はロクロ整形ではない土師器甕である。8は床面出土の破片とSK-11出土の破片が接合している。10は土師器甕で、ヘラで面取りされた把手の部分が出土している。11・12は砥石で、破損していない全面を機能面とする。11には敲打痕が、12には擦痕が顕著に認められる。13は土玉で、外面はミガキに近いナデで平滑に整えられる。14は玉髓、15は石英の自然石で、ともに白色の基石の可能性はある。[時期] SK-11出土土器と接合するものがあり、同土坑と同じくB-Tm降下後の10世紀中葉と考えられる。

## 第14号竪穴住居跡 (SI-14 : 図34)

[位置・確認] III V-81グリッドに位置する。[規模・形状] 南西壁の長さは6.8mである。部分的な検出に止まり、全体の規模は不明である。確認面から床面までの深さは20cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-144°-Eである。[堆積土] 廃絶後はロームを多く含む黒褐色土で埋め戻されている。掘方覆土も確認された。土層図は採図していない。[壁・床面] 全面を貼床とする。壁は外傾ないしほぼ垂直に立ち上がる。[柱穴・施設] ピットは6基検出された。

Pit6は床を剥がした後に確認している。位置・深さから、Pit1は支柱穴の一つである可能性もある。床面からの深さは、Pit1が49cm、Pit2が25cm、Pit3が8cm、Pit4が14cm、Pit5が12cm、Pit6が37cmである。周溝は検出された範囲の壁全体に巡る。[カマド] 確認していない。[出土遺物] 土師器が少量出土し、復元可能な個体を図示した。1～3はロクロ整形ではない土師器甕である。

#### 第15号竪穴住居跡 (SI-15: 図35～37)

[位置・確認] III R-85グリッドに位置する。重複する第1号円形周溝より古く、SI-16より新しい。  
 [規模・形状] 東側が調査区外のため全体の規模は不明だが、平面は方形と推定される。南西壁の長さは6.7mで、確認面からの深さは20cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-150°-Eである。[堆積土] 9層に細分した。1～4層が廃絶後の堆積で、埋め戻されたものと考えられる。5は周溝、6～9層は掘方覆土である。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。[壁・床面] 住居中央はローム層を床面とし、壁際は掘方が深く貼床が施される。カマド周辺に硬化範囲が認められる。壁は外傾して立ち上がる。[柱穴・施設] ビットは9基確認したが、柱穴に相当するものは不明である。床面からの深さは、Pit1が58cm、Pit2が42cm、Pit3が37cm、Pit4が22cm、Pit5が46cm、Pit6が31cm、Pit7が31cm、Pit8が22cm、Pit9が35cmである。Pit1の覆土中位で、鉄製品と緑釉陶器片が出土した。床面中央に、北西壁に対して平行に延びる長さ3.6mの浅い溝が検出されている。周溝は検出された範囲の壁全体に巡る。[カマド] 南東の壁際に粘土散布範囲および焼土範囲があり、これがカマドと考えられる。焼土はブロック状に存在し、明瞭な火床面は検出できなかった。焼土範囲の下部の床面は、周囲より窪んでいる。カマド堆積土の一部を採取し、フローテーション法で選別したところ、炭化したイネ・ヒエ・アワ・シソ属が含まれていた(第4章第4節)。[出土遺物] 土師器・須恵器・緑釉陶器・鉄製品が出土した。1は緑釉陶器深碗の腰部破片で、1辺2cmに満たない。四周の1辺は破損しているが、3辺に研磨が認められる。釉は光沢のある緑色で、釉調は内面が外面よりも濃い。破損部の周辺では釉の剥がれた部分がある。胎土は精良で灰白色を呈し、焼成は軟質である。京都国立博物館の尾野善裕氏に、10世紀中葉(950年前後)の東濃産という鑑定を頂いている。2・4は鉄製の刀子である。3は棒状の鉄製品で、断面は方形である。5～7は須恵器坏である。5・6の体部下半にはヘラ記号が認められる。また、5の内面にはススが付着しており、灯明具としての利用が考えられる。8・9は土師器坏である。10～17はロクロ整形ではない土師器甕である。12はSI-16の7層出土破片と接合するため、本来の帰属はSI-16である。18は五所川原産の須恵器甕、19～21は五所川原産の須恵器甕で、B-Tm降下後のMD3ないしMD16号窯相当の製品と考えられる。18・21はカマド付近で、19は床面中央の溝で出土した。[時期] カマド周辺および床面溝で出土した須恵器から、10世紀中葉と考えられる。

#### 第16号竪穴住居跡 (SI-16: 図38～40)

[位置・確認] III S-84グリッドに位置する。重複するSI-15・第1号円形周溝より古く、SK-8より新しい。  
 [規模・形状] 南西壁の長さ5.1m、北西壁の長さ5.6mの方形で、カマドのある辺が長い。推定床面積は27㎡である。確認面から床面までの深さは50cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、



その方位はN-141°-Eである。[堆積土] 19層に細分した。廃絶後は埋め戻されている。18・19層は掘方覆土である。4箇所では採取した土壌サンプルについて火山灰分析を行った結果、すべてでB-Tmが検出された(第4章第2節)。いずれも小さなブロック状に含まれていたもので、埋め戻しの際に混入した可能性が高い。[壁・床面] 全面を貼床とし、カマド周辺を含む床面南側に硬化が認められる。壁は垂直に立ち上がる。[柱穴・施設] ビットは9基確認しており、Pit5・6は床下で検出された。主柱穴は不明である。床面からの深さは、Pit1が16cm、Pit2が24cm、Pit3が24cm、Pit4が22cm、Pit5が23cm、Pit6が18cm、Pit7が21cm、Pit8が14cm、Pit9が6cmである。Pit9は焼土溜りである。北東壁の内側に長さ2.2m、幅30cmの浅い溝が確認された。周溝は床面では確認できなかったが、掘方は壁際が溝状に深くなっている。[カマド] 南東壁に作られており、煙道は天井部が良好に残存する半地下式である。壁から煙出しまでの長さは1mである。ソデ、煙道天井部および煙出しは黄褐色粘土を主体とし、部分的に白色粘土を貼付けて作られる。図40-14の土師器費は、ソデの粘土下に食い込むように出土しており、芯材とされた可能性がある。ソデの間隔は40cmで、明瞭な火床面は確認できなかった。燃焼部から煙出しにかけては黄褐色ロームが掘方底面の上に貼られており、煙道の底面は緩やかに上昇する。ビット状の窪みが煙道部の掘方左右で2基、壁と煙道部との境に1基検出された。カマド堆積土と前庭部床面堆積土の一部を採取し、フローテーション法で選別したところ、炭化したイネ・アワ・ダイズ属・タデなどが含まれていた(第4章第4節)。**[出土遺物]** 土師器が主体で、須恵器はごく少量である。このほか、石器・鉄製品・土製品が出土した。また、本住居跡Pit5とSI-22床面出土の土師器が接合している(図30-5)。1は棒状の鉄製品、2は鉄製の鎌である。3は板状に整形された焼成粘土で、<sup>ワ</sup>埴の可能性が高い。側面には面取りを施す。胎土に砂粒を多く含み、土師器の胎土とはやや異なる。色調は明黄褐色から赤褐色で、二次被熱によりススが付着している。破損のため本来の厚さは不明である。4は砥石で、端部を除く4面を使用する。5は羽口で、基部は破損している。内径は2.5cmと小型で、鍛冶用と推定される。先端にガラス質滓が、破損部周辺に粘土が付着し、還元による変色も認められる。6は土師器皿だが硬質に焼き上げられる。内底面には重ね焼き時の変色が認められる。7~17はロクロ成形ではない土師器費である。12は平面楕円形を呈し、長径24cm、短径20cmである。**[時期]** 堆積土に二次堆積と考えられるブロック状のB-Tmを含むため、同火山灰降下後の10世紀中葉に廃絶したと考えられる。Pit5では、SI-22出土土器と接合関係をもつ土師器環が出土しており、本住居とSI-22が同時期である蓋然性は高い。

#### 第17号竪穴住居跡(SI-17: 図41)

**[位置・確認]** IIIW-91グリッドに位置する。**[規模・形状]** 南西壁の長さ3m、南東壁の長さ3.5mの長方形で、カマドのある辺が長い。床面積は10㎡である。壁は削平されており、床面のみを検出した。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-139°-Eである。**[堆積土]** 1層は周溝、2層は掘方覆土である。**[床面]** 全面を貼床とする。**[柱穴・施設]** 柱穴は確認していない。周溝は幅がやや太く、全周しない。**[カマド]** 南東の壁際で20×30cmの被熱範囲を確認しており、カマド火床面と考えられる。**[出土遺物]** 土師器が2点出土したが、掲載していない。

## 第18号竪穴住居跡 (SI-18 : 図41～43)

〔位置・確認〕ⅢU-89グリッドに位置する。SI-13・22と重複し、本住居跡が古い。SI-21とは直接の切り合い関係がなく新旧関係は不明だが、近接しすぎているため同時存在は考え難い。〔規模・形状〕南東壁は4.6m残っているが、切り合う竪穴住居跡に破壊され全体の規模は不明である。確認面から床面までの深さは10cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-126°-Eである。〔堆積土〕廃絶後の堆積土はロームを含む黒褐色土で、埋め戻されたものと考えられる。堆積状況は採図していない。1層は掘方覆土である。〔壁・床面〕掘方覆土の上面を床とし、全面貼床である。カマド周辺に硬化範囲が広がる。〔柱穴・施設〕ピットは5基確認したが、柱穴は不明である。床面からの深さは、Pit1が40cm、Pit2が30cm、Pit3が20cm、Pit4が15cm、Pit5が25cmである。〔カマド〕南東壁に作られ、煙道は半地下式である。上部を粘土が覆っており、廃絶に伴ってカマドは破壊されている。ソデは粘土で作られ、左ソデの端部には口縁を伏せた甕(図43-8)が据え置かれていた。両ソデの間隔は50cmである。火床面の上部に硬化面が確認され、火床面の壁寄りに支脚として複数の土器が伏せ置かれていた。支脚に用いられた土器は図42に掲載した。上部から2→3→1→4→5の順に据えられていた。4は完形で、煮沸の痕跡は認められない。全体を3に覆われていたためか、外面の被熱は弱い。内部には焼土が詰まっていた。壁から煙出しまでの長さは80cmである。〔出土遺物〕土師器が出土した。図42掲載分はカマド支脚で、1・2は土師器坏、3はロクロ整形の土師器甕、4・5はロクロ整形でない土師器甕である。6は内面が黒色処理された土師器坏、7は土師器皿である。7の口縁には半円形の欠損があり、打ち欠かれた可能性がある。また、内面調整が粗雑で、工具痕のような稜を伴うロクロ目が認められる。8～10はロクロ整形された土師器甕である。

## 第19号竪穴住居跡 (SI-19 : 図17・19)

〔位置・確認〕ⅢY-85グリッドに位置する。SI-10と重複し、本住居跡が新しい。〔規模・形状〕平面は方形と推定され、東西3.5m以上×南北4.8m以上であるが、全体規模は不明である。確認面から床面までの深さは25cmである。南東壁に直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-153°-Eである。〔堆積土〕6層に細分した。図17の土層図では、本住居跡の堆積土番号を丸囲みとした。自然堆積か人為堆積かは判断できない。6層は掘方覆土である。堆積土にTo-aやB-Tmが微量に含まれる可能性もあるため、土壌サンプルを採取して火山灰分析を行ったが、いずれのサンプルでもTo-Hのみが検出された(第4章第2節)。〔壁・床面〕全面を貼床とする。壁は外傾して立ち上がる。〔柱穴・施設〕本住居跡に伴うと考えられるピットは9基、土坑は1基で、それぞれ平面図では数字を丸囲みとした。床面からの深さは、土坑が40cm、Pit1が35cm、Pit2が37cm、Pit3が44cm、Pit4が16cm、Pit5が33cm、Pit6が32cm、Pit7が38cm、Pit8が36cmである。〔カマド〕確認していない。〔出土遺物〕土師器・須恵器が少量出土しており、口径復元可能なものを図19に掲載した。1～3はロクロ整形ではない土師器甕である。

## 第20号竪穴住居跡 (SI-20 : 図44)

〔位置・確認〕ⅢS-89グリッドに位置する。SD-17と重複し、本住居跡が古い。SD-17はSI-22に付随する溝の可能性が高く、その場合本住居跡はSI-13・22より古いと考えられる。〔規模・形状〕平面は

1 辺3.2mの方形で、床面積は10m<sup>2</sup>である。確認面から床面までの深さは10cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-125°-Eである。[堆積土] 壁は削平されており、床面のみを検出した。[床面] 全面を貼床とする。[柱穴・施設] ビットは3基検出したが、いずれも柱穴ではないと考えられる。Pit1の周囲及び内部の壁に、被熱が認められる。Pit2からは完形に接合する土師器環が出土した。床面からの深さは、Pit1が27cm、Pit2が28cm、Pit3が33cmである。[カマド] 南東壁の東寄りに作られ、煙道は半地下式である。ソデの幅は40cmで、その間に火床面が確認された。火床面の壁寄りには、支脚として使われた土器が伏せ置かれていた。図44-3を下、同図4を上にして2個体が重ねられていた。壁から煙出しまでの長さは45cmである。[出土遺物] 少量の土師器と、鉄製品が出土した。1は鉄製の刀子の基部である。2・3は土師器環で、内面調整が粗雑である。2は半割された状態でPit2から出土している。底面の周囲に弱いケズリが施され、硬質に焼きあげられる。内面にはススが付着している。4はロクロ整形ではない土師器甕で、底部付近にヘラ記号が認められる。底部は砂底である。

#### 第21号竪穴住居跡 (SI-21: 図45~47)

[位置・確認] III T-90グリッドに位置する。SI-13と重複し、本住居跡が古い。SI-18・22とは直接の切り合い関係にないため新旧関係は不明だが、近接しすぎているためこれらとの同時存在は考え難い。SB-4は、本住居跡のカマドがある南東壁に接して検出されており、付属施設である可能性が高い。[規模・形状] 部分的な調査に止まるため、全体規模は不明である。南西壁は3mを確認している。確認面からの深さは50cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-142°-Eである。[堆積土] 12層に細分した。廃絶後は埋め戻されている。12層は掘方覆土である。[壁・床面] 調査した部分では全面貼床である。壁は外傾して立ち上がる。[柱穴・施設] 検出したビットは、カマド左脇の1基である。ビットは壁をやや抉るように掘られ、床面からの深さは30cmである。南西の壁際に周溝が確認された。[カマド] 南東壁に作られており、煙道は半地下式である。ソデは粘土で作られ、両ソデの芯材の一部として口縁を伏せた土師器甕が用いられる。両ソデの間隔は50cmで、その間に被熱した硬化面が認められ、これが火床面である。火床面は検出された床面よりやや高い位置にある。火床面は2面あり、火床面の壁寄りには支脚に用いられた土師器環が伏せ置かれていた。煙道は緩やかに上昇し、煙出しはビット状に窪む。壁から煙出しまでの長さは1mである。また、カマド崩落土の上面で、炭化したトチノキの種子が出土した(第4章第4節)。[出土遺物] 土師器が少量出土した。図46掲載分は、カマド支脚として用いられたものである。1は土師器皿、2・3は土師器環である。1の口縁には半円形の欠損があり、打ち欠かれた可能性がある。また、内面調整が粗雑で、工具痕のような稜を伴うロクロ目が認められる。2の内面にはススが付着している。3は硬質に焼きあげられている。4~6はロクロ整形された土師器甕である。

#### 第4号掘立柱建物跡 (SB-4: 図45)

SI-21のカマドを囲むように柱穴が確認された。Pit3~5を側柱とする1間四方の建物と考えられるが、Pit3の東には対応する柱穴が検出されなかった。Pit3-Pit4の柱間は2.7m、Pit4-Pit5の柱間は1.8mである。Pit1・2は側柱を構成する柱穴よりやや大きい。建物の中で果たした役割は不明である。確認面からの深さは、10~20cmと浅く、柱痕が検出されたものはない。覆土に土師器片が含まれる柱穴

もあるが、遺物は図化していない。また、第1号性格不明遺構(SX-1)は本建物跡の中央に位置し、付属施設の可能性がある。

#### 第1号性格不明遺構(SX-1:図45)

[位置・確認]ⅢT-90グリッドに位置し、SB-4の側柱に囲まれているため、その内部施設の可能性がある。[規模・形状]平面は直径50cmの不整な円形で、確認面からの深さは30cmである。[堆積土]4層に分けられ、1層に直径15cmの灰色粘土塊を含む。[壁・底面]中央が窪み、壁は外傾して立ち上がる。[出土遺物]土器類は出土していないが、1層の粘土は埋納された可能性がある。

#### 第22号竪穴住居跡(SI-22:図29～32)

[位置・確認]ⅢU-90グリッドに位置する。SI-13の床面で確認した。SI-13・18と重複し、本住居跡が古い。SI-21とは直接の切り合い関係にないため新旧関係は不明だが、近接しすぎているためこれらとの同時存在は考え難い。また、本住居跡に付属すると考えられるSD-17がSI-20を切っており、本住居跡はSI-20より古い可能性が高い。カマドの位置や軸方向がほぼ一致するため、SI-13は本住居跡の建て替えの可能性がある。[規模・形状]カマドのある南東壁が5.7m、南西壁が5.5mの方形を基調とし、カマドに対向する辺である北西壁は6.2mとやや長い。推定床面積は29㎡である。上部のSI-13確認面から本住居跡床面までの深さは、45cmである。カマド煙道方向を主軸とした場合、その方位はN-139°-Eである。[堆積土]11層に細分し、廃絶後は埋め戻されている。8層以下が掘方覆土である。[壁・床面]全面を貼床とする。壁は垂直に立ち上がる。[柱穴・施設]ピットは7基検出しており、Pit7は床下で確認した。やや歪んでいるが、Pit1～4が主柱穴と考えられる。柱間は、Pit1-2が2.3m、Pit2-3が3.2mである。柱の形状は、柱痕から長さ30cm、幅10cm強の方形と推定される。床面からの深さは、Pit1が38cm、Pit2が33cm、Pit3が24cm、Pit4が24cm、Pit5が19cm、Pit6が13cm、Pit7が22cmである。床下では数条の溝跡を検出した。これらは接続して住居南東隅に至る。底面の標高はこの南東隅で最も低く、SD-17底面よりも3cmほど低い。SD-17との接続部には、溝に直交する止栓状の粘土の高まりが認められた。[カマド]南東壁に作られており、煙道は半地下式である。両ソデの間隔は45cmで、その間に火床面がある。ソデは粘土で作られており、芯材の一部に土師器製の破片が用いられている。前庭部に黒色土と、その外側に灰白色粘土の広がりが確認された。灰白色粘土は黒色土を挟むように上下で検出され、床面の補修に用いられたと考えられる。火床面が少なくとも3面あることも床が改修時に補修されたと考えられる根拠となる。火床面から煙出しにかけて、煙道は緩やかに上昇する。壁から煙出しまでの長さは、60cmである。なお、カマド前庭部の黒色土の一部を採取し、フローテーション法で選別したところ、炭化したイネ・ヒエ・アワ・ダイズ・ヤナギタデなどが含まれていた(第4章第4節)。[出土遺物]土師器・須恵器・石器・鉄製品・石製品が出土した。SI-13・SI-16・SK-11と接合する土器が出土している。SI-13と接合するものは、より古い段階である本住居跡に伴うと考えられる。5は床面出土の土師器坏で、SI-16のPit5出土破片と接合した。本住居跡で出土したものは底部破片、SI-16Pit5では口縁から底部にかけての破片が出土している。14も土師器坏で、口縁から体部は本住居跡カマド周辺で、底部はSK-11で出土している。6は須恵器坏で、口縁はSI-13のPit2、底部は本住居跡の床面で出土した。内面のロク口調整は非常に粗雑である。7～13はロク口整形ではない土師器製である。15は五所川原産の須恵器壺で、口縁形状からMD3ない

し16号窯相当の製品である。1は鉄製の刀子、2は小型の楕形滓で、鍛冶滓であろう。3は頁岩の自然石で、黒色の碁石と考えられる。4は玉髓の自然石で、加工はみられない。16・17は扁平な礫の表裏を機能面とする砥石である。18は1面に敲打痕が認められる台石である。[時期] SI-16・SK-11出土土器と接合するものがあり、出土須恵器からもB-Tm降下後の10世紀中葉と考えられる。

#### 第17号溝跡 (SD-17: 図33)

SI-22の南東隅から緩い弧を描くように住居跡外側(南東方向)に延びる。SK-11より古く、SI-20より新しい。延長7mを検出し、幅は最大60cm、確認面からの深さは最大50cmで、断面は箱形またはV字形を呈す。底面の最も深い部分はA-B断面付近にあるため、排水用としては不適であろう。土師器・須恵器が少量出土しているが、図化していない。

### (2) 土坑

出土遺物が平安時代以前のものに限られ、堆積土がロームブロックを含む黒または黒褐色土を主体として堅穴住居跡の覆土と類似するものを、平安時代の土坑としてまとめた。合計15基を検出している。堅穴住居跡と同じく10世紀前半に収まるものが多いと考えている。

#### 第2号土坑 (SK-2: 図49・52)

[位置] IVB-95グリッドに位置する。輪郭が見えてから全体を15cmほど掘り下げた。掘り込みはⅡ層中である。[規模・形状] 平面は0.8×1mの楕円形で、確認面からの深さは35cmである。[堆積土] 黒褐色土の単層である。自然堆積か人為堆積かは難しいが、ローム粒を所々に含み、埋め戻された可能性が高い。[壁・底面] 底面の半分が5cmほど窪む。壁は外傾して立ち上がる。[出土遺物] 土師器が少量出土している。図52-1はロクロ整形ではない土師器裏である。

#### 第3号土坑 (SK-3: 図49・52)

[位置・確認] IVB-95グリッドに位置する。[規模・形状] 平面は1.7×1.9mの楕円形で、確認面からの深さは60cmである。[堆積土] 7層に細分した。各層にロームブロックを、覆土中位に炭化物や焼土を含み、埋め戻された可能性が高い。確認面の火山灰試料46・47は、ともにTo-aと同定された(第4章第2節) [壁・底面] 底面には起伏がある。壁は急角度で立ち上がった後、開口部に向けて開く。[出土遺物] 土師器が少量出土している。2・3はロクロ整形の土師器裏、4はロクロ整形ではない土師器裏である。また、3層出土炭化材のうち1点の放射性炭素年代を測定した。<sup>14</sup>C年代は1220±20yrBPである(試料番号08UENO-01: 第4章第1節)。[時期] 確認面に二次堆積と考えられるブロック状のTo-aを含むため、同火山灰降下後の10世紀前葉以降に廃絶したと考えられる。放射性炭素年代は9世紀後半の値を示しており、土坑の推定時期とは年代差がある。

#### 第4号土坑 (SK-4: 図49)

[位置・確認] IVF-101グリッドに位置する。SB-1の柱穴に切られており、本土坑が古い。[規模・形状] 平面は1.1×1.2mの隅丸方形に近く、確認面からの深さは12cmである。[堆積土] 2層に分けた。2層にロームを含み、埋め戻された可能性がある。[壁・底面] 底面にはやや起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。[出土遺物] 出土していない。

## 第5号土坑 (SK-5: 図49・52)

〔位置・確認〕ⅣE-101グリッドに位置する。〔規模・形状〕平面は1.1×1.8mの隅丸方形に近く、確認面からの深さは40cmである。〔堆積土〕7層に細分した。下部はロームブロックを多く含み、埋め戻されたものだが、3層以上は自然堆積と考えられる。土坑全体を覆うように、3層に白色火山灰を含む。分析の結果、To-aと同定された(第4章第2節)。〔壁・底面〕底面は中央が深く、壁は外傾して立ち上がる。〔出土遺物〕土師器が少量出土している。5はロクロ整形ではない小型の土師器甕、6はロクロ整形の土師器甕である。〔時期〕堆積土中に自然堆積と考えられるTo-aを含むため、同火山灰降下時期の10世紀前葉には埋没過程にあったと考えられる。

## 第7号土坑 (SK-7: 図49・52)

〔位置・確認〕ⅢY-80グリッドに位置する。〔規模・形状〕本来の形状は、0.5×1mの平面楕円形と考えられるが、南側は攪乱を受けている。〔堆積土〕ロームブロックを含む黒褐色土の単層で、埋め戻されたものと考えられる。〔壁・底面〕起伏のある底面から、壁は外傾して立ち上がる。〔出土遺物〕確認面で土師器が少量出土している。7はロクロ整形ではない土師器甕である。

## 第8号土坑 (SK-8: 図50・52)

〔位置・確認〕ⅢS-83グリッドに位置する。SI-16と重複し、本土坑が新しい。位置的にSI-15に近く、同時期と考えられるため、同住居跡に伴う廃棄土坑の可能性もある。〔規模・形状〕平面は1.5×2.5mの不整な楕円形である。確認面からの深さは、70cmである。〔堆積土〕8層に細分した。ロームブロック混じりの黒褐色土を主体とし、人為堆積と考えられる。2層に含まれる火山灰は、分析の結果To-a・B-Tmが混合したものと同定された(第4章第2節)。6層に炭化物や灰を多く含む。イネ科植物の茎のような形状を保った炭化物が検出されているため、灰の一部は藁灰の可能性がある。〔壁・底面〕底面はやや起伏をもつ。壁はオーバーハングする部分があり、長軸方向で顕著である。〔出土遺物〕土師器・須恵器・鉄製品・焼成粘土塊が出土している。8・9は須恵器環である。8a・8bは互いに接合しないが、同一個体である。内外面のロクロ調整は粗雑で、胎土には砂粒を含み、焼成は軟質、色調は淡灰色を呈す。五所川原産とは考えられず、時期・産地は不明である。内面には口縁部から底部にかけて赤色顔料が付着している。赤色顔料は塗膜状ではなく器面に沈着したような付着状態を示し、器面の窪みや底部に近いほどより濃く残存している。9の体部下半にはヘラ記号が認められる。10・11は土師器環である。11の外面調整は粗雑で、工具痕のような稜を伴うロクロ目が認められる。12はロクロ整形ではない土師器甕、13はミニチュア土器である。13の外面はケズリ、底部はナデ、内面はヘラナデ調整される。15は鉄製の刀子である。16は小型の鉄滓で鍛冶滓と考えられる。14は焼成粘土塊である。炭化物を多く含む6層の土塊については、一部(段ボール2箱程度)を採取してフローテーション法で選別したところ、多数の炭化種子が回収された。詳細な分析は第4章第4節に記載したが、大まかな内訳はイネを主体とし、シソ属・アワ・ヒエなどの食用植物に加え、イヌコウジュ属・ヤナギタデなどの雑草を含むものである。稲・麦・粟・稗・豆などの五穀と呼ばれる穀物が網羅的に出土しており、当時の食生活を反映していると考えられる。また、同層で出土した炭化材のうち、1点の放射性炭素年代を測定した。<sup>14</sup>C年代は1350±20yrBPである(試料番号08UENO-03:

第4章第1節)。**[時期]**堆積土中に二次堆積のB-Tmを含むため、同火山灰降下後の10世紀中葉と考えられる。放射性炭素年代は7世紀後半の値を示しており、土坑の推定時期とは年代差がある。

#### 第9号土坑(SK-9:図50・52)

**[位置・確認]**ⅢW-82グリッドに位置する。街道側溝に切られている。**[規模・形状]**平面は1.1×1.3mの楕円形と推定される。確認面からの深さは、30cmである。**[堆積土]**6層に細分した。焼土やロームブロックを含み、埋め戻されている。**[壁・底面]**底面はやや起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。**[出土遺物]**土師器が少量出土した。17・18はロクロ整形ではない土師器甕である。

#### 第10号土坑(SK-10:図50・52)

**[位置・確認]**ⅢX-84グリッドに位置する。SI-11と重複し、本土坑が新しい。**[規模・形状]**平面は1.1×1.2mの隅丸方形に近く、中央が円形に窪む。確認面からの深さは60cmである。**[堆積土]**5層に細分した。ロームブロックを多く含み、埋め戻されたと考えられる。**[壁・底面]**中央が窪み、壁は外傾して立ち上がる。**[出土遺物]**土師器と鉄製品が少量出土した。20はロクロ整形ではない土師器甕である。19は用途不明の鉄製品である。薄い鉄板を筒状に丸めたもので、外形は基底部から先端部に向けて細くなっている。

#### 第11号土坑(SK-11:図50・53)

**[位置・確認]**ⅢX-83グリッドに位置する。SD-17と重複し、本土坑が新しい。**[規模・形状]**一部が調査区外だが、平面は長軸3.1m以上、短軸2.1mの楕円形で、確認面からの深さは65cmである。**[堆積土]**8層に細分した。ロームブロックや焼土を含み、埋め戻されたと考えられる。2層にブロック状の火山灰が含まれており、分析の結果B-Tmと同定された(第4章第2節)。**[壁・底面]**底面はやや起伏があり、壁は一部でオーバーハングする。**[出土遺物]**復元可能な土器が、上層でまとまって出土した。一部はSI-13・22と接合関係をもつ。内面黒色処理された土師器甕や、掲載外資料に砂底の土師器甕を含む。1・2は土師器坏である。1の内面調整は粗雑で、工具痕のような稜を伴う段状のロクロ目が認められる。また、内面にはススが付着している。3は須恵器坏で、体部にヘラ記号が認められる。4は五所川原産の須恵器甕で、B-Tm降下後の10世紀中葉の製品と考えられる。頸部にはリング状突起が巡る。また、頸部には「夫」字状のヘラ記号が認められる。このヘラ記号の類例は朝日山(1)遺跡で出土しており(青森県2008)、「夷」の異体字の可能性がある。5～12はロクロ整形ではない土師器甕で、頸部が短い点で共通する。7の内面は黒色処理され、9の頸部にはヘラ記号が認められる。13はミニチュア土師器の底部で、外面はケズリ調整される。また、覆土の一部を採取しフローテーション法で選別したところ、炭化したイネなどが検出された(第4章第4節)。**[時期]**堆積土中に二次堆積と考えられるブロックまたは粒状のB-Tmを含むことや、出土須恵器の特徴から、B-Tm降下後の10世紀中葉と考えられる。

#### 第12号土坑(SK-12:図51)

**[位置・確認]**ⅢX-84グリッドに位置する。江戸時代の街道側溝に切られ、本土坑が古い。位置的

にSI-11内部にあるが、周辺で同住居跡の床面を確認しておらず、新旧関係は不明である。〔規模・形状〕街道側溝に切られ、全体は不明だが、平面は長軸1.3mの隅丸方形と考えられる。確認面からの深さは、25cmである。〔堆積土〕黒褐色土の単層で、ロームブロックを多く含む埋め戻されたものと考えられる。〔壁・底面〕底面はほぼ平坦で、断面は箱形を呈す。〔出土遺物〕土師器片が出土しているが、図化していない。

#### 第13号土坑 (SK-13: 図51・54)

〔位置・確認〕ⅢX-83グリッドに位置する。SI-11の床面で確認した。SI-11のビットとしたものよりも堆積土に含まれるロームの量が少なく、より黒色に近かったため、同住居を切る新しい土坑と判断した。〔規模・形状〕上面は直径60cmの円形で、底部は隅丸方形に近い。確認面からの深さは45cmである。〔堆積土〕セクションは採図していない。ロームブロックを含む黒色土の堆積を確認しており、埋め戻されたものと考えられる。〔壁・底面〕底面はやや傾斜し、壁は急角度で立ち上がる。〔出土遺物〕土師器が少量出土した。1・2は土師器坏である。3・4はロクロ整形の土師器甕、5はロクロ整形でない土師器甕である。

#### 第14号土坑 (SK-14: 図51・54)

〔位置・確認〕ⅢY-84グリッドに位置する。SI-10の側溝を切っており、本土坑が新しい。〔規模・形状〕平面は直径70cmの円形で、確認面からの深さは40cmである。〔堆積土〕黒褐色土の単層である。ロームブロックを多く含む、埋め戻されたと考えられる。〔壁・底面〕底面中央がやや窪み、壁は外傾して立ち上がる。〔出土遺物〕土師器が少量出土したが図化していない。6は焼成がやや不良な、焼成粘土塊である。

#### 第15号土坑 (SK-15: 図51・54)

〔位置・確認〕ⅢY-83グリッドに位置する。〔規模・形状〕平面は直径1.1mの円形で、確認面からの深さは45cmである。〔堆積土〕5層に細分した。3層に遺物を多く含む、埋め戻されたと考えられる。同層には粒状の火山灰が含まれ、分析の結果To-aと同定された(第4章第2節)。〔壁・底面〕底面はほぼ平坦で、壁は下部でオーバーハングする。〔出土遺物〕主に3層で土師器・須恵器が出土した。7は須恵器坏である。8は土師器坏だが、硬質に焼きあげられている。9はロクロ整形の土師器甕、10は五所川原産の須恵器壺、11・12はロクロ整形でない土師器甕である。また、3層の一部を採取しフローテーション法で選別したところ、炭化したイネ・ヒエ・アワ・シソ属が検出された(第4章第4節)。〔時期〕堆積土に二次堆積のTo-aを含むため、同火山灰降下後の10世紀前葉以降である。

#### 第16号土坑 (SK-16: 図51)

〔位置・確認〕ⅢW-89グリッドに位置する。〔規模・形状〕平面は1.3×1.6mで、隅丸方形を基調とする。確認面からの深さは15cmである。〔堆積土〕4層に分けられた。ロームブロックを多く含む層があり、埋め戻されたと考えられる。2層に黄色火山灰ブロックを少量含んでおり、B-Tmの可能性がある。〔壁・底面〕底面はやや起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。〔出土遺物〕土師器が少量出



土したが、固化していない。

#### 第17号土坑 (SK-17: 図51・54)

[位置・確認] III R-87グリッドに位置する。第1号円形周溝と位置的に重複するが、本土坑の上部に攪乱があり、新旧関係は不明である。[規模・形状] 攪乱により不明な部分もあるが、平面は直径2.2mの円形と推定される。確認面からの深さは70cmである。[堆積土] 6層に細分した。ロームブロックを多く含む層があり、埋め戻されたと考えられる。堆積土の土壌サンプルを分析した結果、確認面でTo-aとB-Tm、4層でB-Tmが検出された(第4章第2節)。「壁・底面」底面中央が最も深く、壁際はやや浅い。壁際に崩落土とみられるロームがあり、壁は本来内傾して立ち上がっていたと推定される。「出土遺物」土師器と縄文土器が少量出土した。13はロクロ整形でない土師器甕、14はロクロ整形の土師器甕である。縄文土器は、次節に記す。[時期] 堆積土に二次堆積と考えられるブロック状のB-Tmを含むため、同火山灰降下後の10世紀中葉と考えられる。

#### (3) 溝跡

合計8条を検出した。ロームを含む黒褐色の堆積土が主体で、すべてではないにせよ埋め戻されたものが多い。堆積土中に流水や滞水の痕跡は認められない。平安時代の遺物のみを含むため、平安時代の集落に伴う区画施設が多いと考えられる。

#### 第10号溝跡 (SD-10: 図55・58)

[位置・確認] C・D区の東端に位置する。[規模・形状] 断続して32mにわたって検出した。弧を描くように北西から南東に伸び、南東端の延長にあるSD-13と連続する可能性がある。確認面からの深さは10~40cmと一定しない。[堆積土] 概ね3層に分けられる。3層に大きいロームブロックを含み、一度掘り下げた底面を埋め戻して機能時の底面とした可能性がある。最終的に黒色土で覆われ、自然埋没したと考えられる。「壁・底面」底面は全体に北側に向かって標高を下げるが、長軸断面I-J、K-L部分では20cmほどの段差をもつ。「出土遺物」土師器が少量出土した。1は内面が黒色処理された土師器壺である。

#### 第11号溝跡 (SD-11: 図56・58 調査時略号: SI-5)

[位置・確認] III O-75・76グリッドに位置する。検出時に竪穴住居跡と誤認し、SI-5として撮影した写真があるが、図面や遺物の注記はSD-11とした。[規模・形状] 延長5.7mを検出し、幅は1.5m以上、確認面からの深さは1mである。南西から北東に伸びる。[堆積土] 11層に細分した。底面付近の10・11層はロームを主体とし、底面まで掘り下げた後、少し埋め戻して機能時の底面とした可能性がある。廃絶後は、ロームブロックを多く含む黒褐色土で埋め戻されている。「壁・底面」横断ラインの底面は平坦で、断面形は箱形である。開口部は崩落のためか、緩く外傾する。縦断ライン底面は、南西から北東に幾分傾斜し、その標高差は5cmである。「出土遺物」土師器・須恵器が少量出土した。2は土師器皿で底部が高台状に突出する。柱状高台とよばれる円柱状を呈す高台よりも低いが、関連をもつ可能性がある。底部は糸切り底だが磨滅している。内面にはススが付着する。4は五所川原産須恵器甕で、MD3ないしMD16号窯相当の製品である。[時期] 50m南には、一次調査で検出された

溝7・9があり、それと同規模である。本溝跡が溝7に連続すると考えた場合、その内部にSI-1が位置する。集落を区画する大溝と考えられ、出土遺物からB-Tm降下後の10世紀中葉と考えられる。

#### 第12号溝跡 (SD-12: 図56)

〔位置・確認〕ⅢR-79グリッドに位置する。SI-4に近接し、その外周溝の可能性もある。〔規模・形状〕北西から南東方向に、延長2.7mを検出した。幅は65cmで、確認面からの深さは15cmである。〔堆積土〕ロームブロックを多く含む黒褐色土の単層で、埋め戻されたものと考えられる。〔壁・底面〕底面はやや起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。縦断ラインの底面は、南側より北側が5cm深い。〔出土遺物〕土師器が少量出土した。

#### 第13号溝跡 (SD-13: 図12・57)

〔位置・確認〕E・F区に位置する。SI-6を切っており、本溝跡が新しい。〔規模・形状〕延長45mにわたって検出した。幅は最大1.2m、確認面からの深さは20～45cmと一定しない。北西端の延長上にあるSD-10と連続する溝の可能性はある。〔堆積土〕ロームブロックを多く含む埋め戻されたものと判断できる下層と、黒色土を主体とする上層に大別できる。SD-10同様、一度掘った底面を埋めて機能時の底面としている可能性がある。I-J断面で採取した土壌サンプルを分析したところ、3層でTo-a、1層でB-Tm、溝埋没後のⅡ層でTo-a・B-Tmが検出された。いずれも再堆積である(第4章第2節; 試料番号54～60)。〔壁・底面〕横断面はほぼ箱形である。縦断ラインの底面に段差がみられ、一部はK-L断面のように掘り残されている。全体に南東が低く作られているが、先に述べた段差があるため、排水の機能は低いと考えられる。〔出土遺物〕土師器・須恵器が少量出土した。SI-6付近でややまとまりがあり、復元個体が含まれる。他の場所では覆土中の遺物がほとんどみられないため、これらはSI-6の覆土に含まれていた可能性があり、図12に掲載した。但し、SI-6の遺物と接合関係はもたない。〔時期〕火山灰分析の結果から、10世紀前葉のTo-a降下後に廃絶したと考えられる。

#### 第14号溝跡 (SD-14: 図56・58)

〔位置・確認〕ⅢY-93・94グリッドに位置する。〔規模・形状〕北西から南東方向に、延長4.5mを検出した。幅は最大1.1mで、確認面からの深さは最大55cmである。〔堆積土〕3層に分けられ、埋め戻されたものと考えられる。〔壁・底面〕底面には起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。南北端における底面の標高差はほとんどない。〔出土遺物〕土師器・須恵器が少量出土した。5は須恵器坏で、腰部にヘラ記号が認められる。6はロクロ整形ではない土師器甕である。

#### 第15号溝跡 (SD-15: 図55)

〔位置・確認〕ⅣA-95グリッドに位置する。〔規模・形状〕SD-10に直交する、延長4.5mを検出した。幅は60cm、確認面からの深さは10cmである。〔堆積土〕ロームブロックを含む黒褐色土の単層で、埋め戻されたものと考えられる。〔壁・底面〕底面は起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。東西端における底面の標高差はほとんどない。〔出土遺物〕土師器が少量出土したが、図化していない。

## 第16号溝跡 (SD-16: 図56)

[位置・確認] III S・R-80グリッドに位置する。[規模・形状] 東西に延びる、延長7.5mを検出した。東端で二股に分かれる。幅は50cm、確認面からの深さは20cmである。[堆積土] ロームブロックを含む3層に分けられた。[壁・底面] 断面形は箱形である。[出土遺物] 土師器が少量出土した。

## 第17号溝跡 (図33)

第22号竪穴住居跡の床下で検出された溝跡に接続しており、同住居跡の項で記載した。

## (4) 円形周溝

## 第1号円形周溝 (図59)

[位置・確認] F区の中央部に位置する。SI-15・16より新しい。SK-17とは位置的に重複するが、同土坑上部に攪乱があったため、新旧関係は不明である。[規模・形状] 外周直径8.7mの円形で、東側が広く開口する。溝の掘り込みは確認面から5~20cmと浅く、断面形も一定しない。[堆積土] 黒色土が主体で、自然堆積と考えられる。[出土遺物] 土師器が少量出土したが、図化していない。[時期] B-Tm降下後のSI-15を切って作られており、10世紀中葉以降である。

## (5) 性格不明遺構

## 第1号性格不明遺構 (SX-1: 図45)

第21号竪穴住居跡の付属施設と考えられる第4号掘立柱建物跡の内部に位置する。第21号竪穴住居跡の項で記載した。

## (6) 包含層出土遺物 (図48)

7・8は須恵器甕、9は須恵器鉢で、いずれも五所川原産と考えられる。7は、頸部に丸と斜線を組み合わせたヘラ記号が認められるもので、口縁の形状からB-Tm以前の10世紀前葉の製品と考えられる。8の口唇は面取りされず、口縁外面に2条の沈線が施される。9の頸部には、×印状のヘラの痕跡が認められ、ヘラ記号の可能性はある。10は鉄滓で、流動滓である。

## 第2節 縄文時代の遺構と出土遺物

縄文時代と考えられる遺構は、掘立柱建物跡2棟である。遺物は土器が主体で、214点出土した。時期は前期～後期で、中期の割合が多い。散布範囲は2008年度調査区の全域にわたるが、A・D・E区での出土が多い。

## (1) 掘立柱建物跡

## 第2号掘立柱建物跡 (SB-2: 図60 柱1の調査時略号; SK-6)

[位置・確認] IVA・B-96グリッドに位置する。柱2はSI-9の床下で検出されたため、本建物跡が古い。[規模・構造] 柱穴2基を検出した。柱間は2.7mで、それを踏まえて柱穴を結ぶC-Dラインの北西延長上を掘り下げたが、柱跡は確認できなかったため、建物は北東または南東に延びると考えられ

る。次項で記すSB-3と同じ構造と考えれば、1×2間の北東方位をとる建物であろう。C-Dに直交するラインを主軸とした場合、その方位はN-28°-Eである。[柱穴]柱穴は直径80~90cmの円形で、柱1の確認面からの深さは90cmである。底面は両者がほぼ同じ標高であることから、同規模の柱が並んでいたと推定される。両柱穴の底面はほぼ平坦で、中央部に柱当たりとみられる硬化面が確認できた。壁は開口部に向かって外傾して立ち上がる。柱1の底面付近では柱材と考えられる炭化物が出土しており、その平面は20×30cmの隅丸方形である。[出土遺物]柱2で出土した図60-1は、円筒下層d1式の深鉢胴部破片である。また、柱1で検出した柱材と考えられる炭化物の外縁部を採取し、放射性炭素年代を測定した。<sup>14</sup>C年代は4410±30yrBPである(試料番号08UENO-02:第4章第1節)。**[時期]**柱2で出土した土器から、縄文時代前期後葉以降と考えられる。なお、放射性炭素年代の測定結果4400yrBPは円筒上層式期に相当する測定値であり(青森県2002)、縄文時代中期に属する可能性がある。

### 第3号掘立柱建物跡(SB-3:図60)

[位置・確認]ⅢV・W-88グリッドに位置する。柱6はSD-13に切られており、本建物跡が古い。

[規模・構造]柱穴6基を検出した。1×2間の北東方位をとり、2.8×5.5mの規模をもつ。柱4-6の間は柱1-3よりも50cm狭く、5mである。柱当たりを基準とする柱間は概ね2.8mとなる。また、C-Dラインを主軸とした場合、その方位はN-36°-Eである。[柱穴]平面は直径50~70cmの円形で、柱2を除く底面には柱当たりとみられる硬化面が確認された。柱3で確認された柱痕は、直径30cmである。底面は中央が窪むものと平らなものがあり、壁は概ね外傾して立ち上がる。確認面からの深さは40~60cmで、底面の標高はほぼ揃っている。[出土遺物]柱3の覆土から円筒上層d・e式の深鉢胴部破片が出土した。**[時期]**出土土器から縄文時代中期以降と考えられる。SB-2と同規模で、主軸方位も類似すると考えられることから、何らかの関連が推定される。

#### (2) 包含層出土遺物(図62)

平安時代の遺構覆土に含まれていたものも一括し、磨滅が少なく時期の分かる破片を掲載した。1・2は前期の円筒下層d1式、3は中期の円筒上層d式、4~6は円筒上層e式、7は円筒上層d・e式、8・9は十腰内1式である。10は後期のものと考えられる小型土偶の右腕部で、表面にキザミに近い沈線が縦方向に3条施される。石器は少量で、製品のみを掲載した。11は凹基無茎石鏃である。12は敲石で、3面に敲打痕をもつ。その他に剥片が5点出土している。

### 第3節 江戸時代以降の遺構と出土遺物

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、道路(街道)跡1条である。なお、本遺跡で中世の遺構・遺物は確認されていない。

#### (1) 掘立柱建物跡

##### 第1号掘立柱建物跡(SB-1:図61)

[位置・確認]B区に位置する。SK-4と重複し、本建物跡が新しい。[規模・構造]側柱8基で構成

される。1辺を3.8mとする2間四方の建物を構成しており、柱間は1.9mが基本である。柱1-3を結ぶ南辺が、4mと他より長い。四周の内側にある小穴は、柱筋に合わないため建物とは無関係と考えられる。柱3・8を結ぶA-Bラインを主軸とした場合、その方位はN-23°-Wである。【柱穴】8基を検出した。柱穴の深さは20~40cmで、底面の深さは一定でない。柱1・8・6で直径15cmほどの柱痕を検出した。柱2・3・7の掘方は、確認面では方形に近かった。【出土遺物】出土していない。【時期】柱1がSK-4を切っているためこれより新しい。主軸が現道に沿っていることや柱間の寸法が短いこと、付近で中世の遺物が出土していないことなどから、江戸時代以降と考えられる。

## (2) 街道跡 (図63)

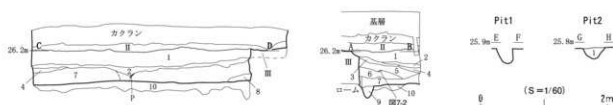
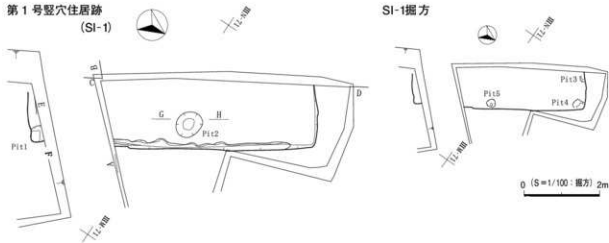
【位置・確認】1・J区の北東側に位置し、現道に沿う部分を37mにわたって検出した。重複する他の遺構より新しい。硬化面を伴う路面と、その脇に掘られた側溝が直線状に伸びる。【路面】全体が叩き締められたように硬化しており、他の遺構と重複しないローム面では特に顕著である。路面幅は最大で1.4mを検出したが、さらに東へ伸びると考えられる。【側溝】西側のみを確認した。I区では新旧二段階が確認できる部分がある。古い段階の溝が埋没し、路面上に黒褐色土が堆積した後、古い段階の溝よりも内側(東側)に浅目に掘り直されている。古い段階の溝は、幅50~60cm、深さ40~50cmで、J区では底面が深く窪む場所が確認された。新しい段階の溝は、幅30~40cm、深さ20~40cmで、古い段階の溝に沿って掘られてはいるものの、全体にやや蛇行している。また、新しい段階の溝は、明治時代以降の遺物を含む黒褐色土(土層図ではI層として扱った)を切って掘られている。【出土遺物】平安時代の遺構を切って作られているため、側溝出土遺物のほとんどは平安時代の土器である。道路跡に伴うものとしては、古い段階の側溝覆土で陶器が1点出土した(1)。肥前系陶器徳利の底部である。外面は刷毛目文様で、底面にも釉薬が掛かっている。18~19世紀と考えられる。また、硬化面を覆う黒褐色土からは明治時代以降の陶磁器やガラス片が出土している。【時期】『郷山前村漆山絵図』に記された道路跡と考えられ、江戸時代の街道である「下之切通り」の可能性が高い。古い段階の側溝覆土には明治時代以降の遺物を含まないため、明治時代初頭までには機能を停止し埋没したと考えられる。新しい段階の側溝は、明治時代以降の遺物を含む黒褐色土を切っており、近代以降に掘り直されたものである。

## (3) 包含層出土遺物 (図62)

13~17は寛永通宝で、すべて新寛永である。18は銅製のキセル雁首である。火皿が小さく、19世紀以降の年代が与えられる。19はガラス製の薬瓶で、富山模範精業院・イタミトールの文字が見える。ガラスの質は悪く、気泡を多く含む。

幕末以降に生産された陶磁器は、コンテナ1箱程度出土したが掲載しなかった。これらの出土地点は、街道跡の硬化面を覆う黒色土やD区1トレンチの攪乱などに限られ、調査区全体には分布しない。

第1号竪穴住居跡  
(SI-1)



第1号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム堆(φ1~50mm)7%。
- 2層 黒褐色土 10YR2/3 褐色焼土10%、ローム堆(φ2~10mm)1%、赤褐色焼土粒(φ1mm)1%以下。
- 3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム堆(φ10~40mm)30%。
- 4層 黒褐色土 10YR2/2 ローム堆(φ1~3mm)1%、赤褐色焼土粒(φ2mm)1%以下。
- 5層 黒色土 10YR2/1 暗褐色土5%、ローム堆(φ1~20mm)3%。
- 6層 黒色土 10YR2/1 黒褐色土2%、ローム堆(φ2mm)1%以下。
- 7層 黒色土 10YR2/1 ローム堆(φ1~80mm)10%、C-Dラインでは層中にピット状のおちこみ。
- 8層 黒色土 10YR1.7/1 ローム堆(φ2~10mm)10%。
- 9層 黒色土 10YR2/1 ローム堆(φ10mm)1%以下。
- 10層 黒色土 10YR1.7/1 ローム堆(φ10~100mm)50%。

SI-1 Pit2

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 に近い黄褐色ロームブロック(φ5~10mm)7%、黄褐色ローム粒(φ2~5mm)5%。

SI-1遺物

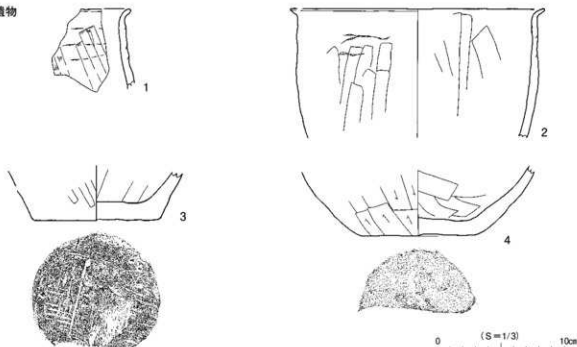


図7 第1号竪穴住居跡

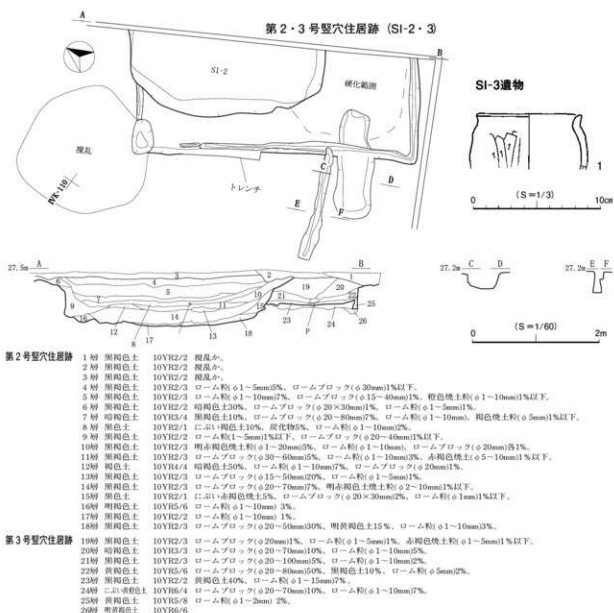


図8 第2・3号竪穴住居跡 (1)

SI-2遺物

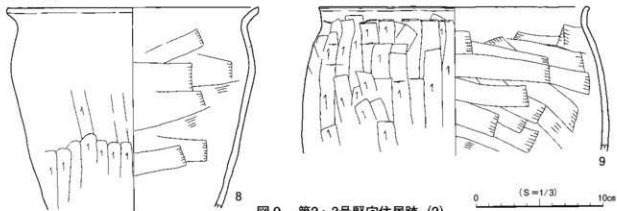
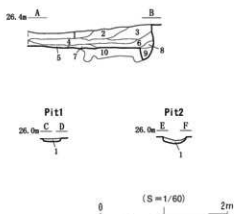
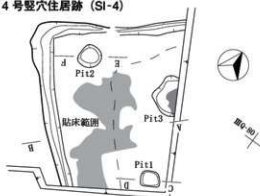


図9 第2・3号竪穴住居跡(2)

第4号竪穴住居跡(SI-4)



第4号竪穴住居跡

- |     |      |         |  |
|-----|------|---------|--|
| 1層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 黄褐色ロームブロック(φ5~20mm)5%。                 |
| 2層  | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 黄褐色ロームブロック(φ3~40mm)20%。                |
| 3層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 黄褐色ロームブロック(φ5~10mm)3%。                 |
| 4層  | 黒色土  | 10YR2/1 | 褐色ロームブロック(φ5~50mm)25%。                 |
| 5層  | 黒色土  | 10YR2/1 | 明黄褐色ロームブロック(φ3~10mm)2%。                |
| 6層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 黄褐色ロームブロック(φ5~20mm)5%。明褐色ローム1%。        |
| 7層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 明褐色焼土塊10%。炭化物φ1~5mm)7%。                |
| 8層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 黄褐色ロームブロック(φ5~10mm)3%。炭化物φ1~5mm)1%未滿。  |
| 9層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 明黄褐色ロームブロック(φ5~30mm)7%。炭化物φ1~5mm)1%未滿。 |
| 10層 | —    | —       | 黒褐色土と褐色土との混合土。                         |

SI-4 Pit1

- 1層 — — 黒褐色土と明黄褐色ロームの混合土。

SI-4 Pit2

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)1%混入。

SI-4遺物

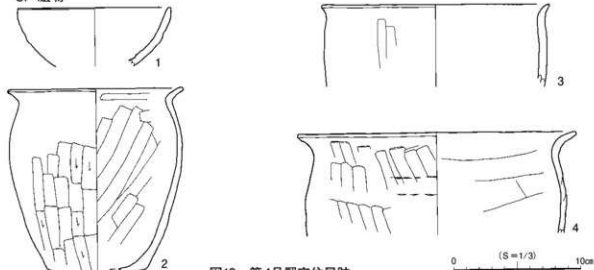
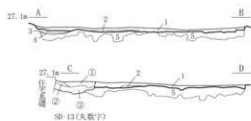
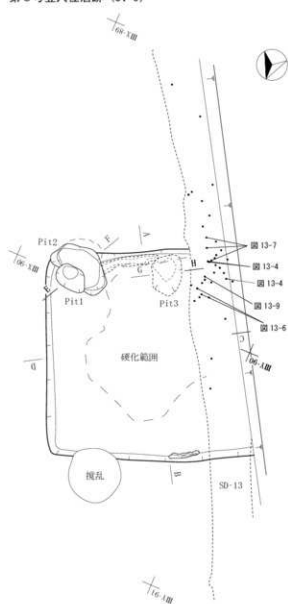


図10 第4号竪穴住居跡



## 第6号竪穴住居跡 (SI-6)



## 第6号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 103K2/3 ローム粒( $\phi 1\sim 10\text{mm}$ )5%,  
ロームブロック( $\phi 15\sim 50\text{mm}$ )2%,  
炭化物( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )15以下,  
黄褐色土 103K3/3 赤褐色土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )15以下,  
黄褐色土 103K5/6  
2層 粘褐色土 103K3/3 赤褐色土 20%,  
黄褐色土 103K5/8 黒褐色土 20%,  
①層 黒褐色土 103K2/3 明黄褐色ロームブロック( $\phi 20\text{mm}$ )3%,  
ローム粒( $\phi 1\sim 10\text{mm}$ )2%,  
②層 黒褐色土 103K2/3 明黄褐色ローム粒( $\phi 1\sim 10\text{mm}$ )3%,  
③層 黒褐色土 103K2/3 明黄褐色ロームブロック( $\phi 15\sim 30\text{mm}$ )10%,  
ローム粒( $\phi 1\sim 10\text{mm}$ )3%,

## SI-6 Pit1

- 1層 黒褐色土 103K2/3 赤褐色土粒, 黄褐色ローム粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )各 2%,

## SI-6 Pit2

- 1層 粘褐色土 103K3/4 明黄褐色ロームブロック( $\phi 50\text{mm}$ )5%,  
赤土, 黄褐色ローム粒( $\phi 5\sim 10\text{mm}$ )各 3%,  
2層 粘褐色土 103K3/4 褐色ローム粒( $\phi 2\sim 10\text{mm}$ ),  
明黄褐色ロームブロック( $\phi 50\text{mm}$ )各 3%,  
褐色土上, 赤土を含む。

## SI-6 Pit3

- 1層 黒褐色土 103K2/2 明赤褐色土粒( $\phi 1\sim 10\text{mm}$ )3%,  
黄褐色ローム粒( $\phi 1\sim 10\text{mm}$ ), 炭化物( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )各 2%,  
2層 粘褐色土 103K2/3 浅黄褐色ロームブロック( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )10%,  
黄褐色ローム粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )1%,  
炭化物( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )15以下,  
3層 粘褐色土 103K3/3 黄褐色ロームブロック( $\phi 5\sim 20\text{mm}$ )20%,  
炭化物( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )2%。

## 遺物出土状況

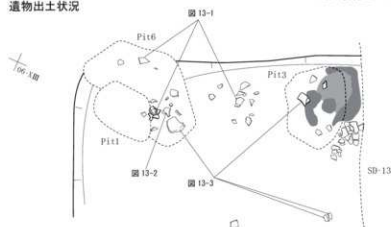


図11 第6号竪穴住居跡(1)

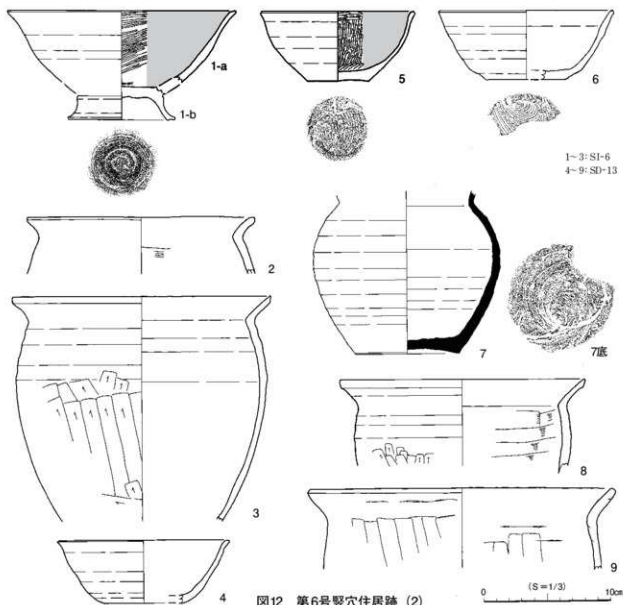


図12 第6号竪穴住居跡 (2)

1-3: SI-6  
4-9: SD-13

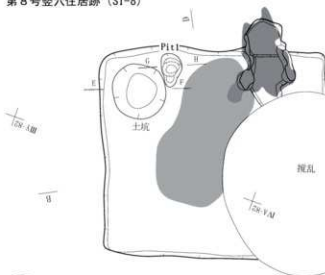


第7号竪穴住居跡

- 1 層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ2-4mm)2%。
- 2 層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ5mm)1%。
- 3 層 褐色粘土 7.5YR4/4 黒褐色土、明黄褐色ローム粒(φ3mm)51%。
- 4 層 褐色土 10YR4/6 明黄褐色ローム粒(φ3mm)1%。
- 5 層 黒色土 10YR1.7/1 明黄褐色ローム粒(φ1-5mm)1%。
- 6 層 褐色土 10YR4/4 黄褐色ローム粒(φ1-15mm)15%、明赤褐色焼土粒(φ1-7mm)1%。
- 7 層 暗褐色土 10YR3/3 黒色土が粒状に混入、黄褐色ローム粒(φ1-5mm)5%。
- 8 層 黒色土 10YR1.7/1 黄褐色ロームブロック(φ20-40mm)20%、黄褐色ローム粒(φ1-3mm)10%。
- 9 層 黒色土 10YR2/1 黒褐色土との混合土、黄褐色ローム粒(φ1-3mm)1%。

図13 第7号竪穴住居跡

## 第8号竪穴住居跡 (SI-8)



## 第8号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(φ5mm)4%, ローム粒(φ1~10mm)2%,  
ロームブロック(φ15~20mm)1%,  
ローム粒(φ1~10mm)7%,  
2層 黒褐色土 10YR2/2 ロームブロック(φ15~20mm)3%,  
炭化物(φ1~10mm)1%,  
赤褐色土粒(φ1~20mm)1%以下。

## SI-8 土坑

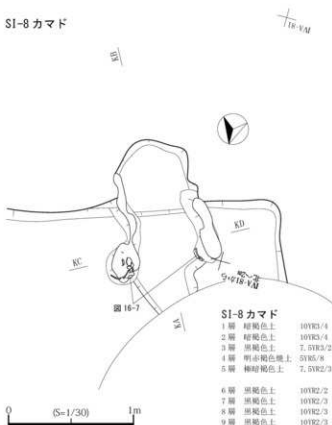
- 1層 黒褐色土 10YR2/1 ロームブロック(φ20mm)10%,  
明赤褐色土粒(φ2mm)1%以下,  
2層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~10mm)5%,  
橙褐色土 3%,  
3層 黒褐色土 10YR2/1 ロームブロック(φ15~40mm)3%,  
ローム粒(φ1~10mm)1%,  
4層 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック(φ15~10mm)10%,  
ローム粒(φ1~10mm)7%。

## SI-8 Pit1

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~10mm)5%, ロームブロック(φ20mm)3%。



## SI-8 カマド



## SI-8 カマド

- 1層 暗褐色土 10YR3/4 赤褐色土粒(φ1~2mm)5%, ローム粒(φ1~5mm)3%, 炭化物(φ1mm)1%以下,  
2層 暗褐色土 10YR3/4 赤褐色土粒 40%, 炭化物(φ1~5mm)1%, ローム粒(φ1mm以下)1%,  
3層 黒褐色土 7.5YR3/2 暗灰赤色の灰 5%, ローム粒(φ1~10mm)2%, 赤褐色土粒(φ1~2mm)1%,  
4層 明赤褐色土 5YR3/8 暗褐色土 20%, 炭化物(φ1mm)1%以下,  
5層 暗褐色土 7.5YR2/3 暗褐色土 10%(A-B層右半分が赤を多く含む), ローム粒(φ1~10mm)1%,  
赤褐色土 10%(A-B層右端に多く含む), 赤褐色土粒(φ1~10mm)1%,  
6層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(φ2~5mm)1%, 赤褐色土粒(φ1mm)1%以下,  
7層 黒褐色土 10YR2/3 明赤褐色土粒(φ5~15mm)2%, ロームブロック(φ1~5mm)1%,  
8層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~10mm)5%,  
9層 黒褐色土 10YR2/3 ロームブロック(φ20~30mm)15%, ローム粒(φ1~15mm)5%。



図14 第8号竪穴住居跡(1)

SI-8遺物

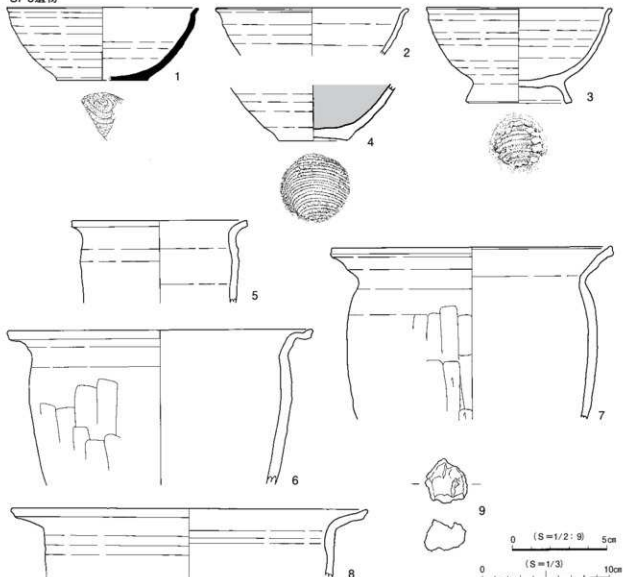
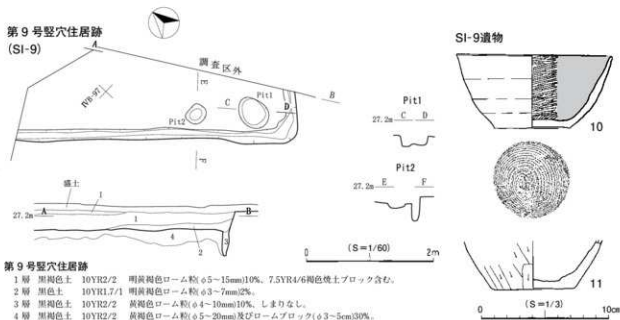


図15 第8号竪穴住居跡 (2)

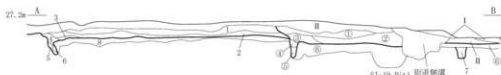
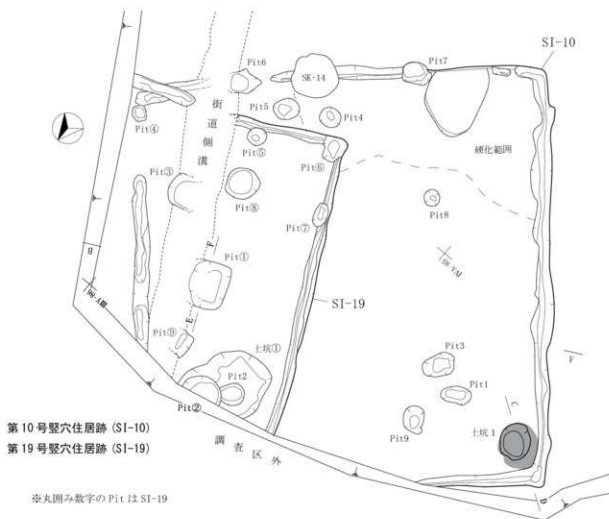
第9号竪穴住居跡  
(SI-9)



第9号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ5-15mm)10%、7.5YR4/6褐色焼土ブロック含む。
- 2層 黒色土 10YR1.7/1 明黄褐色ローム粒(φ3-7mm)2%。
- 3層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ4-10mm)10%、しまりなし。
- 4層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ5-20mm)及びロームブロック(φ3-5cm)30%。

図16 第9号竪穴住居跡



## 第10号竪穴住居跡

- |    |      |         |                         |
|----|------|---------|-------------------------|
| 1層 | 黒色土  | 10YR2/1 | 炭化物小片が多い、ローム粒、白色バミスを含む。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒、焼土粒、炭化材を含む。        |
| 3層 | 黒色土  | 10YR2/1 | 炭化材を多く含む。               |
| 4層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | ローム粒、炭化材を含む。            |
| 5層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | しまりなし。                  |
| 6層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒を多く含む。              |
| 7層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒、炭化物を含む。            |
| 8層 | -    | -       | 黒色土と黄褐色ロームの混合土。         |

## SI-10土坑1

- |    |       |          |                                   |
|----|-------|----------|-----------------------------------|
| 1層 | 黒色土   | 10YR4/6  | 炭化物(φ5mm)2%。                      |
| 2層 | 明褐色土  | 7.5YR5/8 | -                                 |
| 3層 | 黒色土   | 10YR2/1  | 炭化物(φ5~10mm)2%、褐色焼土粒(φ5~10mm)2%。  |
| 4層 | 黒褐色土  | 10YR2/3  | 炭化物(φ1~10mm)1%、褐色焼土粒(φ1~5mm)1%以下。 |
| 5層 | 明黄褐色土 | 10YR6/8  | -                                 |
| 6層 | 黒褐色土  | 10YR2/3  | -                                 |

## 第19号竪穴住居跡

- |    |      |         |  |
|----|------|---------|--|
| ①層 | 黒色土  | 10YR2/1 | 太粒のロームブロックがやや多く、炭化物小片や白色バミス、粒状の火山灰を含む。 |
| ②層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | やや太粒のロームブロック、炭化物を含む。                   |
| ③層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | ロームブロック含む。                             |
| ④層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | しまりなし。                                 |
| ⑤層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | ロームとの混合土、しまりなし。                        |
| ⑥層 | -    | -       | 黒色土と黄褐色ロームの混合土。                        |

## SI-19Pit①

- |    |      |         |  |
|----|------|---------|--|
| 1層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 黄褐色ローム粒(φ1~20mm)25%、黄褐色ロームブロック(φ20mm)5%。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | にじみ黄褐色ローム粒(φ5mm)                         |

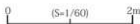
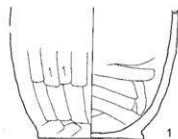
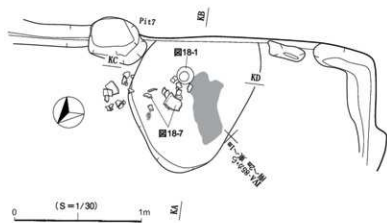


図17 第10・19号竪穴住居跡(1)

SI-10カマド



SI-10遺物

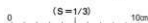
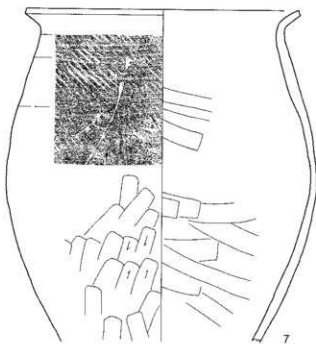
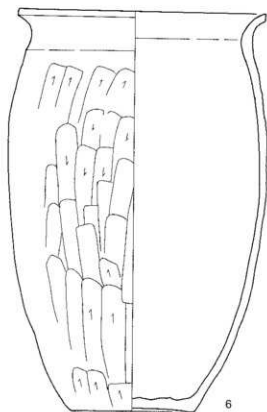
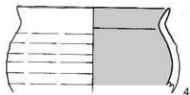
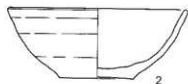


図18 第10・19号竪穴住居跡(2)

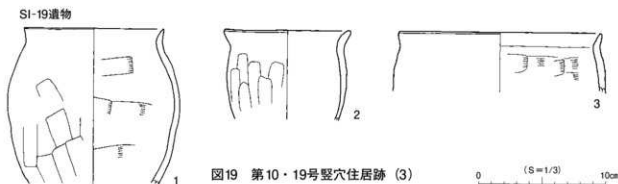
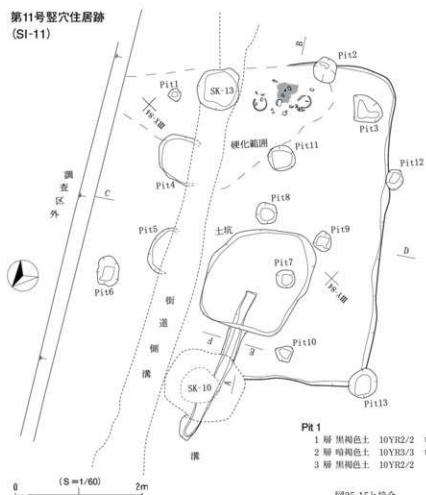


図19 第10・19号竪穴住居跡 (3)

第11号竪穴住居跡 (SI-11)

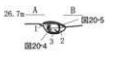


Pit1埋設土器

検出状況



埋設状況



Pit1

- 1 層 黒褐色土 10YR2/2 □-△粒(φ1~2mm)5%、炭化物(φ1~2mm)2%、  
2 層 暗褐色土 10YR3/3 □-△粒(φ1mm)2%、炭化物(φ1mm)1%以下、  
3 層 黒褐色土 10YR2/2

図25-15と接合

埋設土器

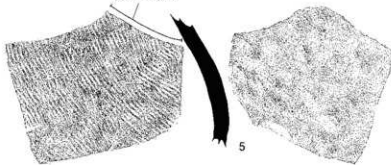
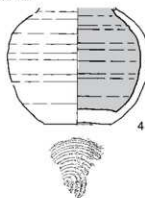
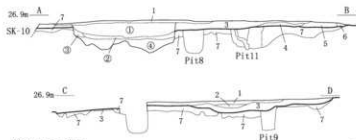


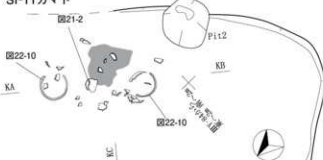
図20 第11号竪穴住居跡 (1)



第11号竪穴住居

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 全体に均質で炭化物粒、焼土粒、ローム粒を含む。
- 2層 黒褐色土 10YR3/2 火山灰状源と思われる。褐色土を粉粒に含む。
- 3層 黒色土 10YR2/1 ローム粒、炭化材を多く含む。
- 4層 黒褐色土 10YR3/2 焼土粒、ロームブロックを含む。
- 5層 暗褐色土 10YR3/3 焼土を多く含む。
- 6層 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒を含む。
- 7層 — 黒褐色土とロームの混合土。

SI-11カマド



カマド

- 1層 濃い赤褐色土 5YR4/4 明赤褐色焼土ブロック(φ20~50mm)20%、明褐色土10%。
- 2層 暗褐色土 7.5YR3/4 明赤褐色焼土粒(φ1~5mm)2%、炭化物1%以下。
- 3層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ2×20mm)含む。
- 4層 暗褐色土 10YR4/6 暗褐色土40%、明褐色焼土10%、赤褐色焼土粒(1~10mm)1%、炭化物(φ5mm)1%。
- 5層 黒褐色土 10YR2/2 ロームブロック(φ20~30mm)40%。
- 6層 明褐色焼土 7.5YR5/6
- 7層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1mm)2%。
- 8層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~10mm)7%。
- 9層 黒色土 10YR2/1 ロームブロック(φ20~40mm)30%、ローム粒(φ1~10mm)2%。
- 10層 黒色土 10YR2/1 ロームブロック(φ20~50mm)20%、ローム粒(φ1~10mm)2%。
- 11層 黒褐色土 10YR2/3 ロームブロック(φ20~60mm)20%、ローム粒(φ1~10mm)3%。
- 12層 明褐色焼土 10YR7/6
- a層 褐色土 7.5YR4/4 棕色焼土粒(φ1~10mm)1%。
- b層 褐色土 7.5YR4/3 黄褐色ロームブロック(φ30~40mm)30%、明赤褐色焼土3%、赤褐色焼土粒(φ1~10mm)1%。
- c層 黒色土 10YR1/7 炭化物が主体の層。
- d層 黒褐色土 10YR2/2
- e層 暗褐色土 10YR3/3 ロームブロック(φ15~20mm)20%。
- f層 黒褐色土 10YR2/2 ロームブロック(φ15~50mm)30%、ローム粒(φ5~10mm)2%。

SI-11遺物

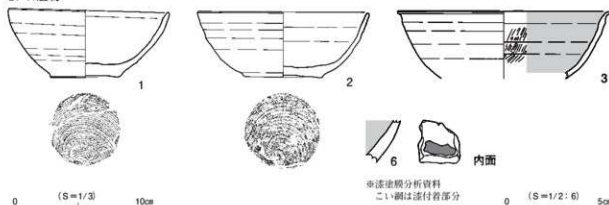


図21 第11号竪穴住居跡(2)



## SI-11遺物

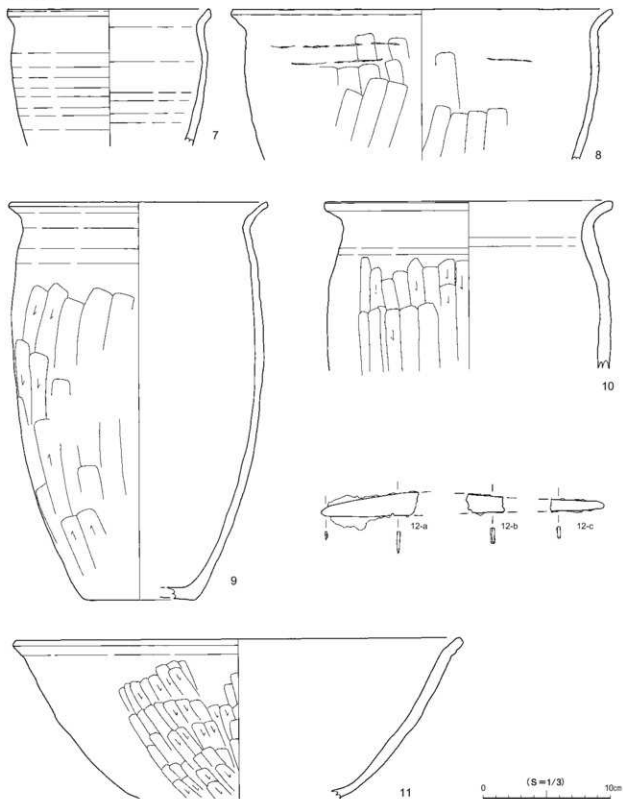
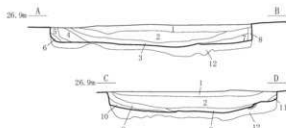
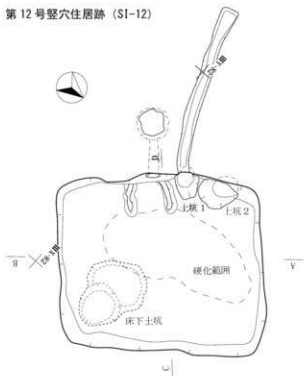


図22 第11号竪穴住居跡 (3)

第12号竪穴住居跡 (SI-12)

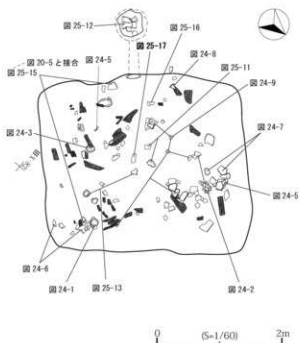


第12号竪穴住居跡

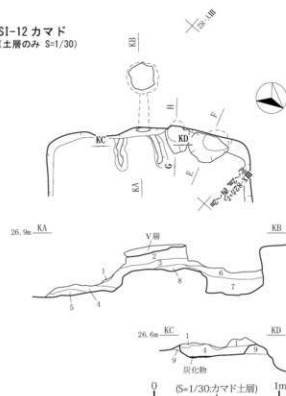
- |     |      |         |                                  |
|-----|------|---------|----------------------------------|
| 1層  | 黒色土  | 10YR2/1 | 炭化物、ローム粒少量。遺物は土層として取り上げ。         |
| 2層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 炭化物、焼土多量。遺物は中層として取り上げ、上面に大きな炭化材。 |
| 3層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 本層以下の遺物は下層として取り上げ。               |
| 4層  | 黒褐色土 | 10YR3/2 |                                  |
| 5層  | 黒色土  | 10YR2/1 |                                  |
| 6層  | 褐色土  | 10YR4/8 | ローム多量。                           |
| 7層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 |                                  |
| 8層  | 黒褐色土 | 10YR2/2 |                                  |
| 9層  | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム主体。                           |
| 10層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 砂質強い。                            |
| 11層 | 褐色土  | 10YR4/4 |                                  |
| 12層 | -    | -       | ローム主体、黒褐色土との混合土。                 |



SI-12 遺物出土状況



SI-12 カマド (土層のみ S=1/30)



SI-12カマド

- |    |         |         |  |
|----|---------|---------|--|
| 1層 | にぶい黄褐色土 | 10YR5/4 | 灰黄色粒土 5%。  |
| 2層 | 暗褐色土    | 10YR3/3 | ローム粒 (φ1~5mm) 2%、ロームブロック (φ20mm) 1%、明赤褐色焼土粒 (φ10mm) 1%以下。                              |
| 3層 | 暗褐色土    | 10YR3/4 | 炭化物 (φ5~30mm) 2%、ローム粒 (φ1~10mm) 2%、明赤褐色焼土粒 (φ1~2mm) 1%以下。                              |
| 4層 | 赤褐色焼土   | 5YR4/6  | 明赤褐色焼土ブロック (φ20~50mm) 15%、明赤褐色焼土粒 (φ1~10mm) 7%、にぶい黄褐色粒土粒 (φ5~15mm) 2%、炭化物 (φ1~5mm) 1%。 |
| 5層 | 黒褐色土    | 10YR2/3 | 灰黄褐色土 20%、ローム粒 (φ1~5mm) 2%、赤褐色焼土粒 (φ1~5mm) 1%。   |
| 6層 | 黒褐色土    | 10YR2/2 | 炭化物 5%、にぶい黄褐色土 3%、ローム粒 (1~5mm) 1%。   |
| 7層 | 明黄褐色土   | 10YR6/6 | 黒褐色土 5%、ローム粒 (φ1~10mm) 2%、ロームブロック (φ20~50mm) 2%。                                       |
| 8層 | にぶい黄褐色土 | 10YR5/4 | 炭化物 (φ1mm) 1%以下。   |
| 9層 | 褐色土     | 10YR4/6 | 黄灰色粒土粒 1%、ソデ。  |

図23 第12号竪穴住居跡 (1)

SI-11 遺物

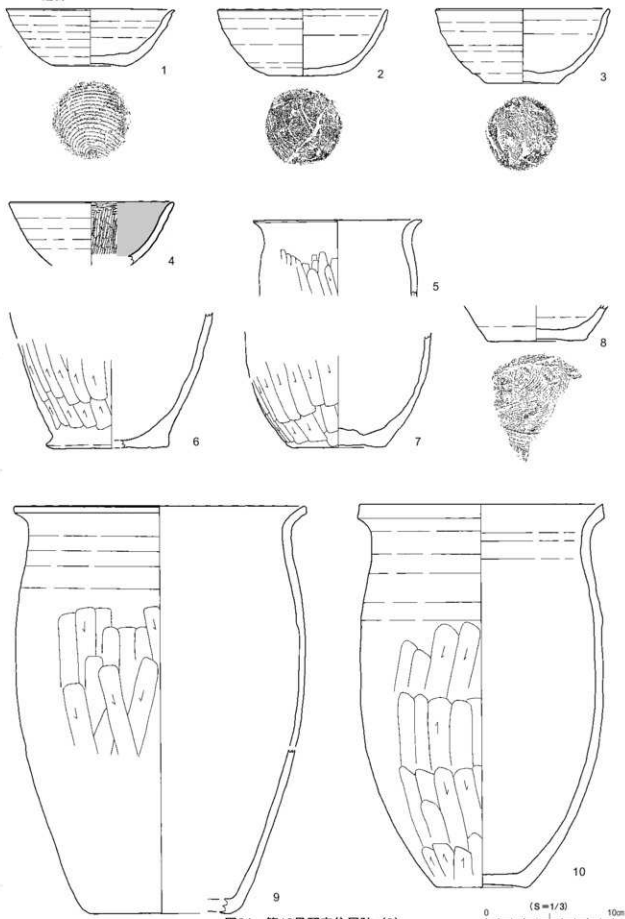


图24 第12号竖穴住居跡 (2)

SI-12遺物

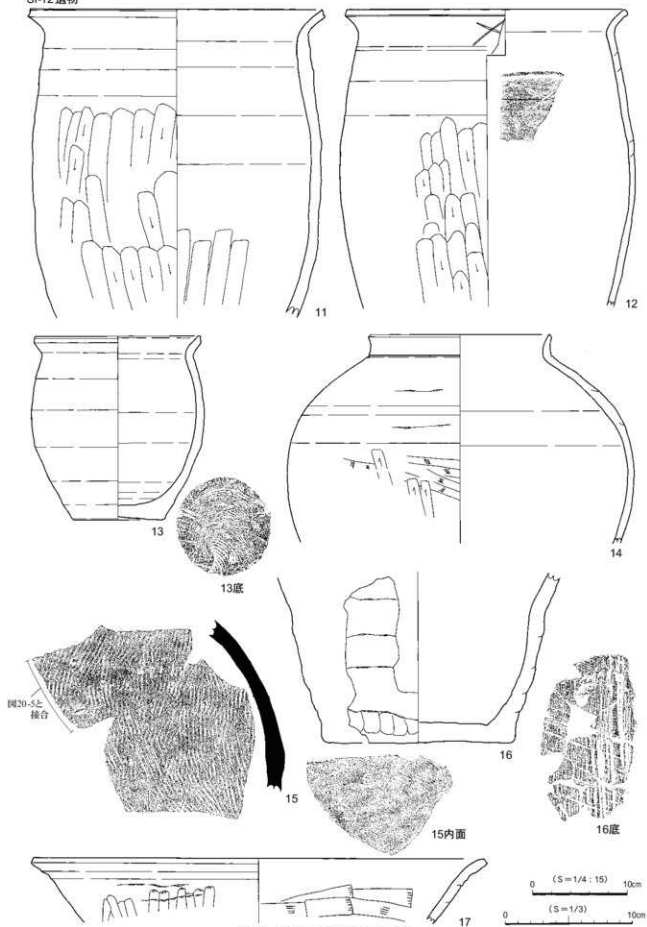


図25 第12号竪穴住居跡 (3)

## 第13号竪穴住居跡 (SI-13)

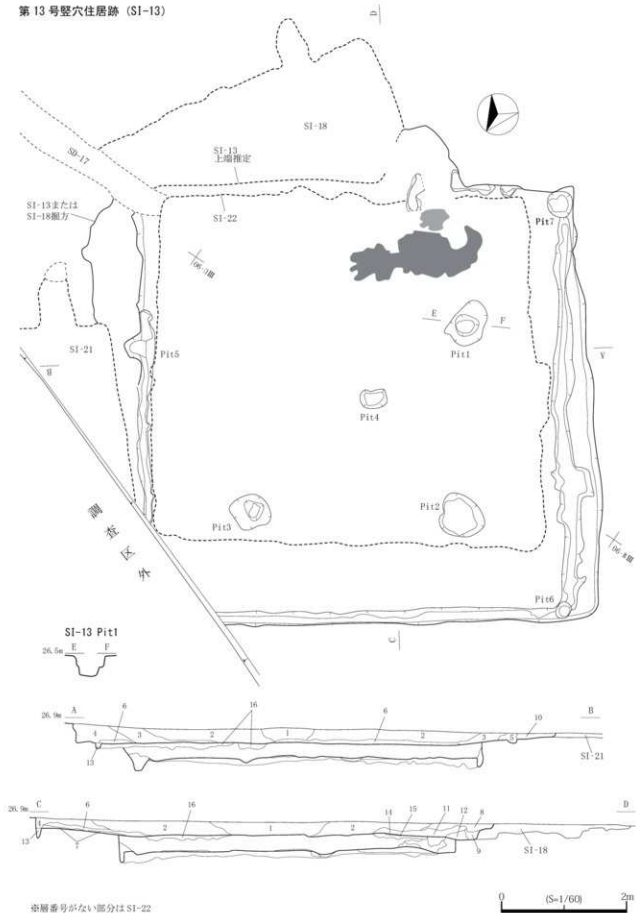


図26 第13号竪穴住居跡 (1)



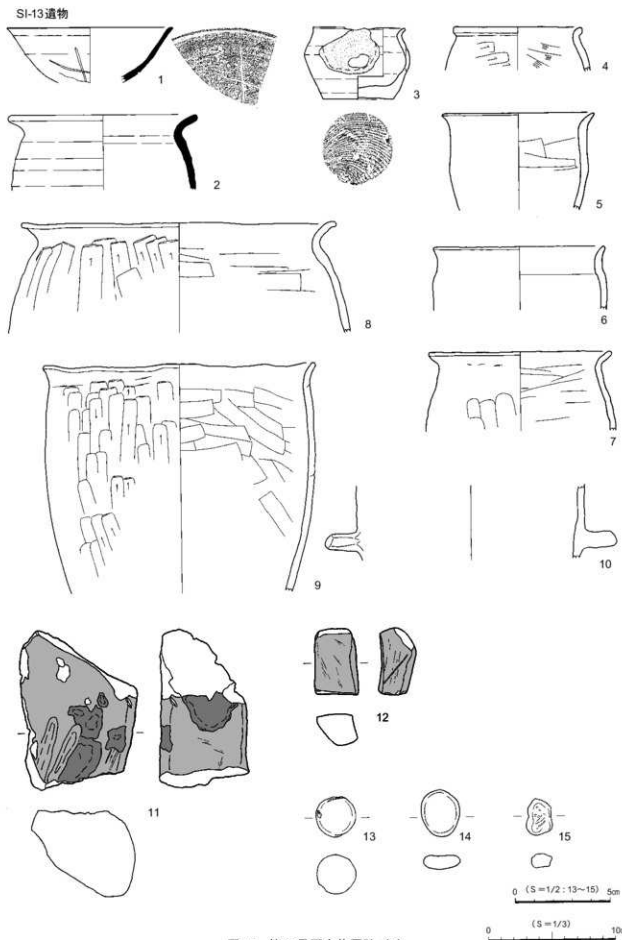


図28 第13号竪穴住居跡(3)

第22号 竪穴住居跡 (SI-22)

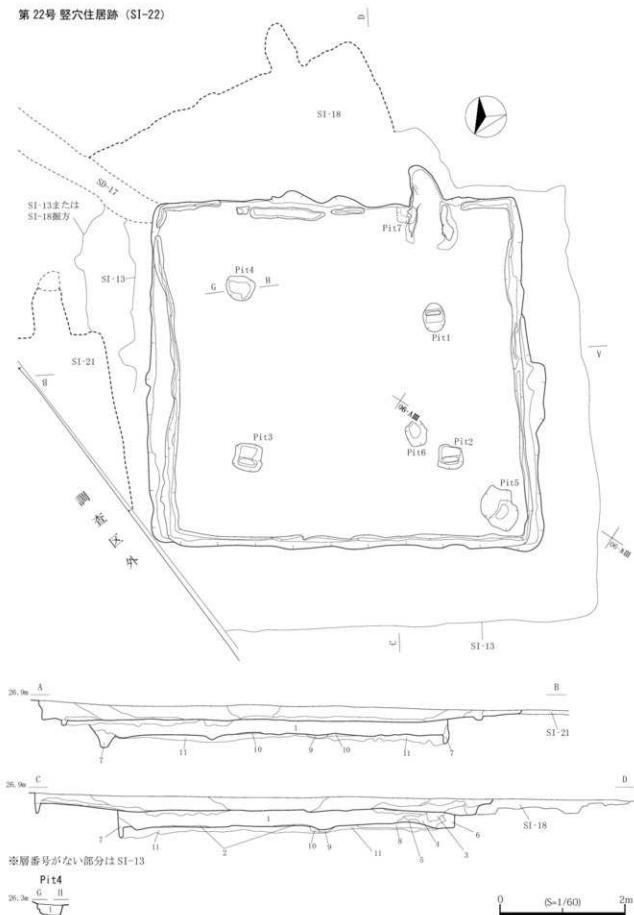


図29 第22号竪穴住居跡 (1)



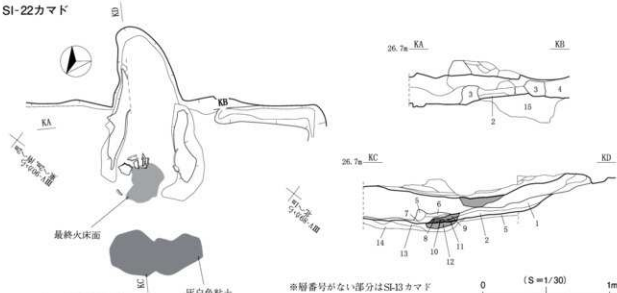
## 第22号竪穴住居跡

- 1層 暗褐色土 10YR3/4 明黄褐色ロームブロック(φ5~200mm)30%、黒色土3%、炭化物1%。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 褐色粘土20%、黒色土10%、明黄褐色ローム粒(φ1~mm)2%。  
 3層 黒褐色土 10YR2/3 明黄褐色ロームブロック(φ5~20mm)10%。  
 4層 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色ロームブロック(φ1~20mm)20%、明褐色焼土粒(φ1~20mm)、にぶい黄褐色土粒(φ10~15mm)各1%。  
 5層 暗褐色土 7.5YR2/3 明赤褐色土7%、赤褐色焼土ブロック(φ10~20mm)、にぶい黄褐色土粒(φ5~30mm)各5%。  
 6層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%、浅黄褐色土粒(φ10~25mm)1%。  
 7層 黒褐色土 一 盛土。  
 8層 黒色土 10YR1.7/1 浅黄褐色土、黒褐色土各10%。(両者が2~10mmの厚さで互層をなす。)  
 9層 黒色土 10YR2/1 明赤褐色ローム粒(φ1~10mm)2%。(床下溝)  
 10層 黒褐色土 10YR2/2 (床下溝)  
 11層 黄褐色土 10YR5/6 暗褐色土20%。

## SI-22 Pit4

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色ロームブロック(φ5~80mm)、明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)各10%、炭化物(φ1~5mm)1%。

## SI-22カマド



## 第22号竪穴住居跡カマド

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 赤褐色焼土粒(φ1~5mm)1%。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 暗褐色土との混合土。赤褐色焼土粒(φ1~7mm)30%、にぶい黄褐色土粒(φ5mm)1%。  
 3層 褐色土 10YR4/4 カマド軸。  
 4層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ローム粒5%。  
 5層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ローム粒(φ5~20mm)10%。  
 6層 黒褐色土 10YR3/2 一 盛土。  
 7層 黒色土 10YR1.7/1 黄褐色粘土、黒色土、暗褐色土、黒色土の順で互層をなす。黒色土の部分はしまりなし。  
 8層 二色赤褐色土 10YR4/3  
 9層 暗赤褐色土 5YR3/6  
 10層 二色赤褐色土 10YR5/4  
 11層 赤褐色焼土 10YR4/8  
 12層 暗褐色土 10YR2/3  
 13層 暗褐色土 7.5YR2/3 黒色土、にぶい黄色粘土を含む。  
 14層 褐色土 10YR4/6 層下部で黒色土と褐色土が互層をなす。  
 15層 黄褐色土 10YR5/6 黒色土、黄褐色粘土を含む。

## SI-22遺物

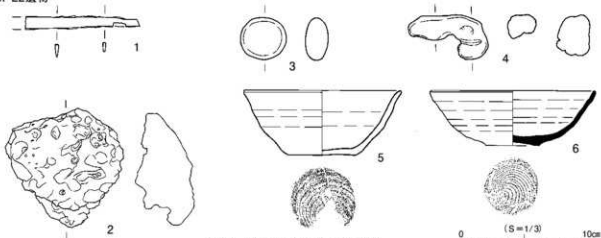


図30 第22号竪穴住居跡 (2)

SI-22遺物

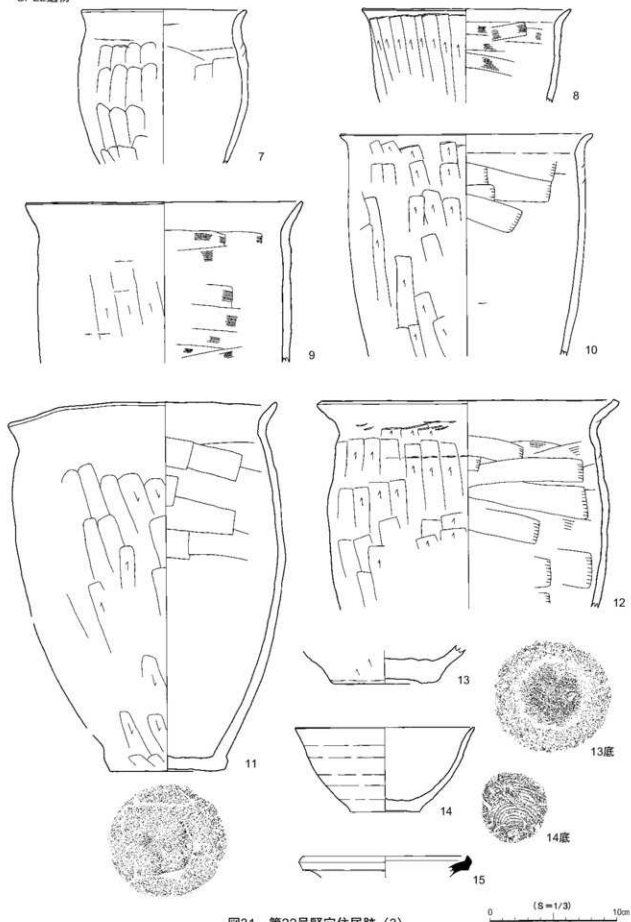


図31 第22号竪穴住居跡(3)

SI-22遺物

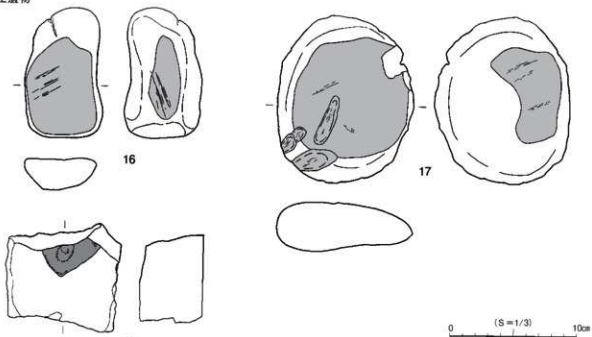
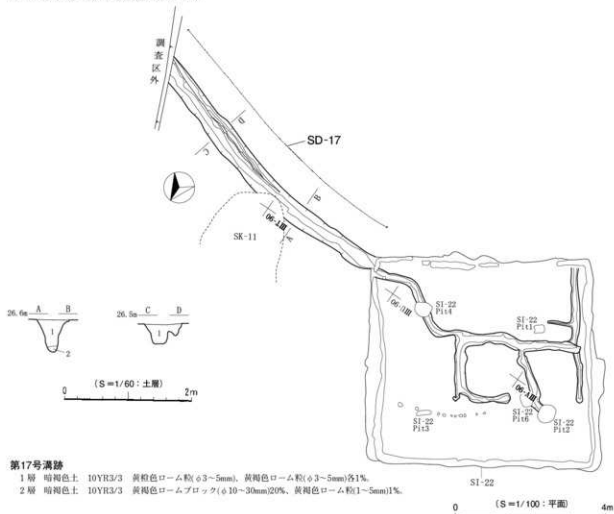


図32 第22号竪穴住居跡 (4)

SI-22床下溝・第17号溝跡 (SD-17)

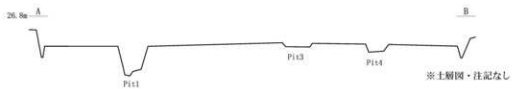
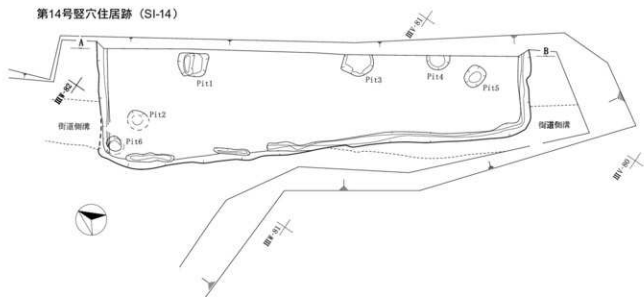


第17号溝跡

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 黄棕色ローム粒(φ3~5mm)、黄褐色ローム粒(φ3~5mm)各1%。
- 2層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ロームブロック(φ10~30mm)20%、黄褐色ローム粒(1~5mm)1%。

図33 第22号竪穴住居跡 (5)、第17号溝跡

第14号竪穴住居跡 (SI-14)



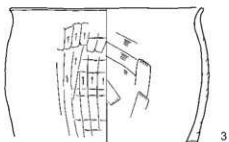
SI-14 遺物



1



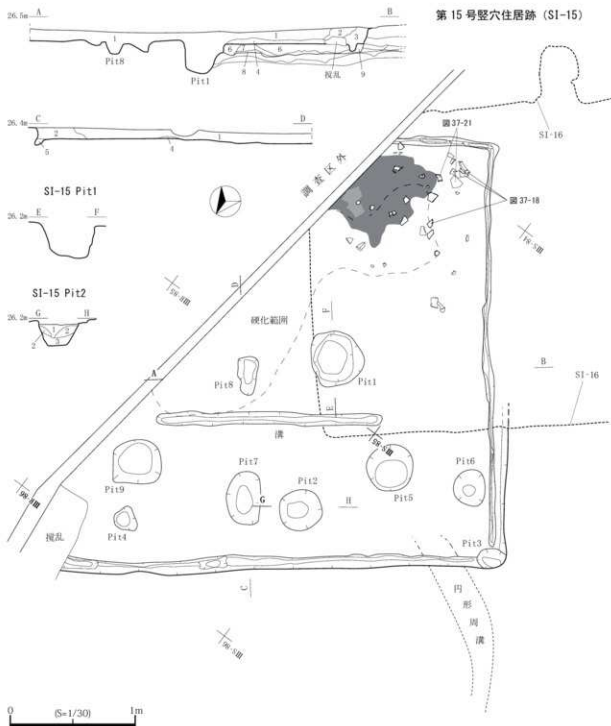
2



3

0 (S=1/3) 10m

図34 第14号竪穴住居跡



## 第15号竪穴住居跡

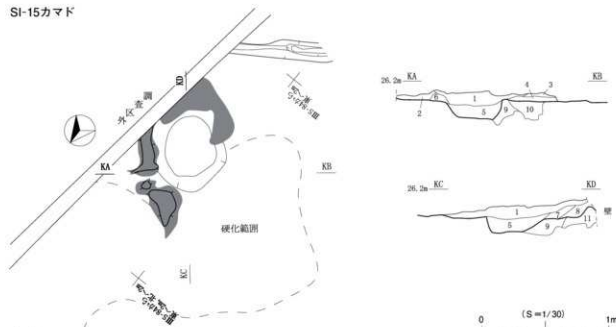
- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黒色土との混合土。黄褐色ローム粒(φ5~20mm)10%。
- 2層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土との混合土。黄褐色ローム粒(φ5~20mm)20%。
- 3層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色ロームブロック(φ50~70mm)15%。
- 4層 褐色土 10YR4/4 に近い黄褐色ロームブロック(φ10mm)3%。
- 5層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)3%。
- 6層 褐色土 10YR4/4 黄褐色ローム粒(φ1~30mm)30%、明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)5%、黄褐色ロームブロック(φ100mm)10%。
- 7層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ3~7mm)4%、明黄褐色ローム粒(φ5~7mm)1%。
- 8層 褐色土 10YR4/4 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)3%。
- 9層 褐色土 10YR4/4 明黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)15%、黄褐色ロームブロック(φ10mm)3%。

## SI-15 Pit 2

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)1%。
- 2層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色ローム粒(φ1~15mm)10%、に広い黄褐色粘土粒(φ15mm)、明黄褐色ローム粒(φ5~7mm)各1%。
- 3層 褐色土 10YR4/4 黄褐色ローム粒(φ3~10mm)10%。

図35 第15号竪穴住居跡 (1)

SI-15カマド



カマド

- 1層 におい明色土 7.5YR5/4 赤褐色粘土ブロック(φ20-90mm)7%、明褐色焼土粒(φ1-15mm)3%、黄褐色粘土ブロック(φ20×20mm)2%、におい黄褐色粘土粒(φ5-15mm)、炭化物(φ1-10mm)各1%。
- 2層 黒褐色土 10YR3/2 浅黄色粘土3%、棕色粘土ブロック(φ10×30mm)2%、明赤褐色焼土粒(φ1-5mm)、炭化物1-10mm)各1%以下。
- 3層 におい赤褐色土 10YR6/4 におい褐色土40%、ローム粒(φ1-10mm)2%、明赤褐色焼土粒(φ1-10mm)1%以下。
- 4層 黒色土 10YR1.7/1 におい黄褐色土3%。
- 5層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(φ1-15mm)3%、明赤褐色焼土粒(φ1-5mm)1%。
- 6層 暗褐色土 10YR3/3 赤褐色焼土粒(φ1-2mm)1%。
- 7層 灰黄褐色土 10YR4/2 棕色焼土粒(φ1mm)1%。
- 8層 黒褐色土 10YR2/3 明褐色焼土粒(φ1-10mm)3%。
- 9層 黒褐色土 10YR2/3 ロームブロック(φ20-30mm)5%、ローム粒(φ1-10mm)1%、明赤褐色焼土粒(φ1mm)1%以下。
- 10層 黒色土 10YR2/1 ローム粒(φ1-10mm)、におい黄褐色粘土各1%。
- 11層 黒褐色土 10YR2/3 褐色土40%、ローム粒(φ1-5mm)2%。

SI-15遺物

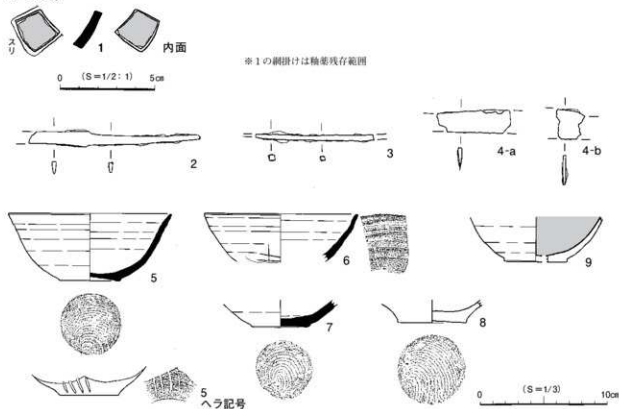


図36 第15号竪穴住居跡(2)

## SI-15遺物

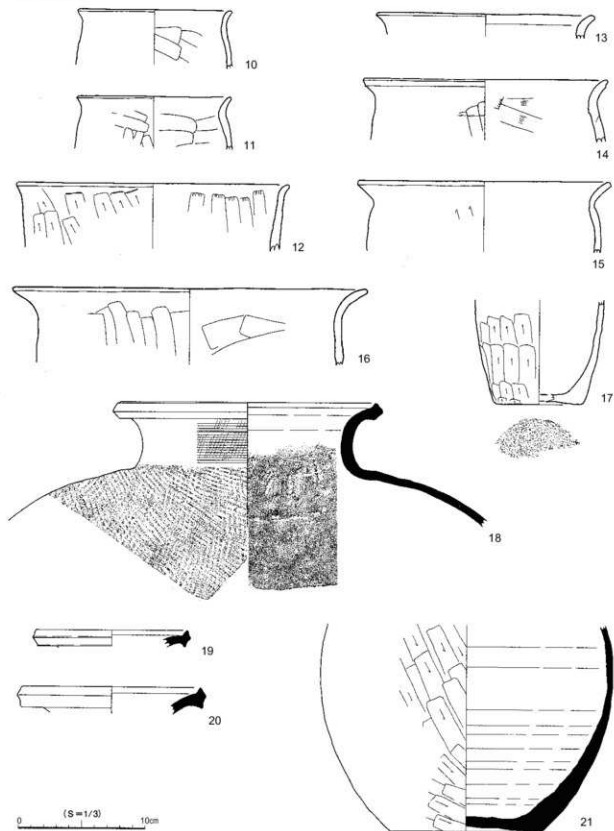
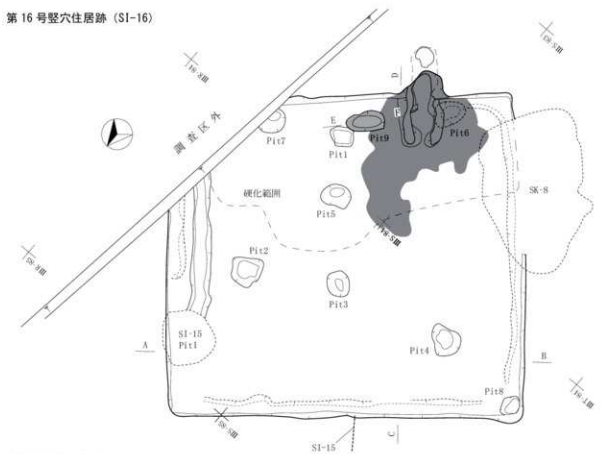
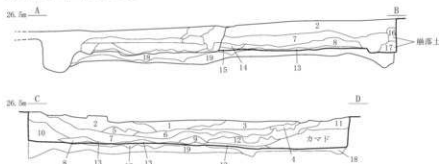


図37 第15号竪穴住居跡 (3)

## 第16号竪穴住居跡 (SI-16)



※別番号がない部分はSI-15



## 第16号竪穴住居跡

1層	黒色土	01R1.7/1	黒褐色土25%, 黄褐色ローム(φ1~20mm)7%, 黄褐色ローム(φ1~30mm)7%, 暗褐色土3%,
2層	黒褐色土	01R2.2	黒色土20%, 黄褐色ローム(φ1~20mm)10%, 明黄褐色ローム(φ1~30mm)5%, 褐色土3%, 明褐色ローム粒(φ3~15mm)2%,
3層	暗褐色土	01R3.4	明黄褐色ローム(φ5~20mm)20%, 黄褐色ローム(φ1~30mm)10%, 明黄褐色ロームブロック(φ30~60mm)10%, 黒色土5%,
4層	黒色土	01R2.1	明黄褐色ローム(φ5~20mm)3%,
5層	黒褐色土	01R2.2	黄褐色ローム(φ10~60mm)20%, 黄褐色ローム(φ5~30mm)10%,
6層	黒褐色土	01R2.3	黄褐色ローム(φ1~180mm)10%, 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)5%, 黒色土3%, 赤褐色土, 灰化物(φ15mm)各1%,
7層	黒褐色土	01R2.2	明黄褐色ローム(φ1~300mm)30%, 黄褐色ローム(φ1~50mm)5%, 明褐色ローム粒(φ1~5mm)1%,
8層	黒褐色土	01R2.2	明黄褐色ローム(φ10~100mm)10%, にぶい黄褐色(φ5~10mm)2%,
9層	黒色土	01R2.1	黒褐色土10%, 黄褐色ローム(φ1~30mm)7%, 明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)2%,
10層	黄褐色土+5	01R7.8	黒色土15%, 黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)10%, にぶい褐色粘土塊(φ20mm)1%,
11層	黒褐色土	01R2.1	暗褐色土15%, 明黄褐色ローム(φ1~50mm)7%, 黄褐色ローム(φ1~20mm), 灰白色エゴツク各5%, 赤褐色土ブロック(φ30mm)1%,
12層	明黄褐色土+4	01R6.6	黒色土10%, 褐色土2%, 赤褐色土2%,
13層	黒褐色土	01R2.2	明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)3%, にぶい黄褐色ローム(φ5~10mm)1%,
14層	黒褐色土	01R2.2	黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%,
15層	黒褐色土	01R2.3	明黄褐色ローム粒(φ3~5mm)2%, 黄褐色ローム粒(φ5mm)1%,
16層	褐色土	01R1.4	黒褐色土, 黄褐色ロームブロック(φ10~20mm)7%, 明黄褐色ローム粒(φ10~15mm)5%,
17層	褐色土	01R1.4	黄褐色ロームブロック(φ30mm)10%, 黒褐色土を含む。
18層	明黄褐色土+4	01R6.6	黒色土10%, 黄褐色ロームブロック(φ10~30mm)5%,
19層	明黄褐色土+4	01R6.6	にぶい黄褐色粘土5%, 黒色土2%,

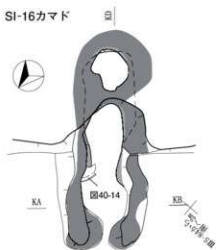
## SI-16 Pit9

1層 赤褐色粘土: 01R1/8 黄土, 黒褐色土を含む。

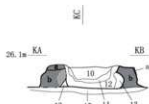
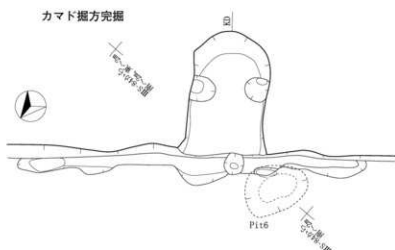
図38 第16号竪穴住居跡(1)



SI-16カマド



カマド掘方完掘



a : 白色粘土  
b : 黄褐色粘土



## カマド

- |     |      |           |   |
|-----|------|-----------|---|
| 1層  | 黄褐色土 | 10YR5/6   |   |
| 2層  | 暗褐色土 | 10YR3/3   | にぶい黄色粘土ブロック(φ20~50mm)3%、黄褐色ローム粒(φ2~10mm)、明褐色焼土粒(φ1~3mm)各1%。         |
| 3層  | 黄褐色土 | 10YR5/6   | 暗褐色土との混合土。黒色土が粒状に少量混入。  |
| 4層  | 褐色土  | 10YR4/4   | 黄褐色土との混合土。黒褐色土ブロック(φ30mm)を含む。                                       |
| 5層  | 褐色粘土 | 10YR4/6   |   |
| 6層  | 褐色土  | 10YR4/6   | にぶい黄褐色土との混合土。にぶい黄色粘土粒(φ3~10mm)を含む。                                  |
| 7層  | 褐色土  | 10YR4/4   |   |
| 8層  | 褐色土  | 10YR4/6   | 黄褐色ローム粒(φ5~7mm)3%、褐色粘土粒(φ5mm)2%。                                    |
| 9層  | 黄褐色土 | 10YR5/6   | 黄褐色土が層中央に混入。褐色焼土粒(φ1~2mm)2%、灰黄色粘土ブロック(φ2~3mm)1%。                    |
| 10層 | 黒色土  | 10YR2/1   | 褐色土。にぶい黄褐色粘土ブロック(φ10~20mm)各5%。にぶい黄褐色シルト(φ2~3mm)、黄褐色ローム粒(φ3~6mm)各1%。 |
| 11層 | 黒褐色土 | 10YR2/2   | 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)3%。左側下部に黒色土。  |
| 12層 | 黄褐色土 | 10YR5/6   | 黄褐色ローム粒(φ2~4mm)、にぶい黄褐色粘土(φ1mm)各1%。                                  |
| 13層 | 黒色土  | 10YR1/7.1 |   |
| 14層 | —    | —         | 黒色土混じり黄褐色ローム。   |
| 15層 | —    | —         | 褐色土混じり黄褐色ローム。   |

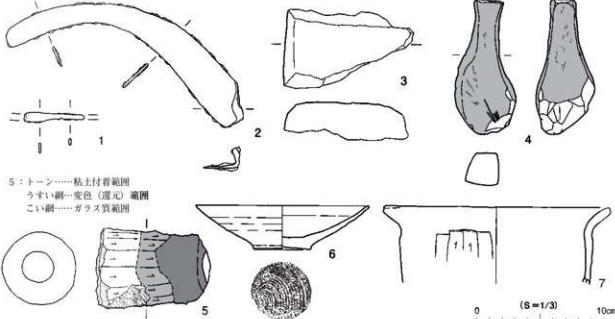


図39 第16号竪穴住居跡 (2)

SI-16遺物

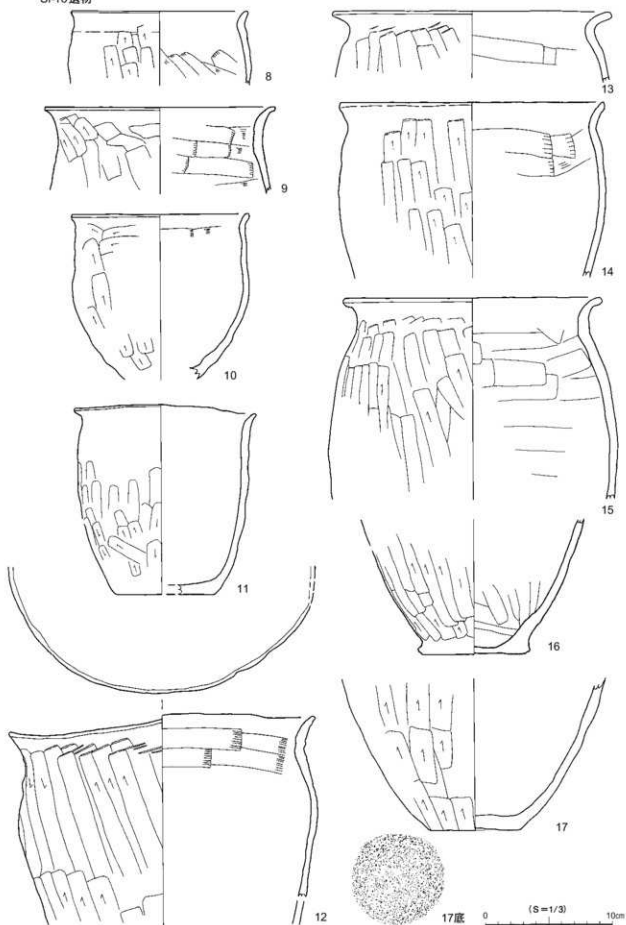
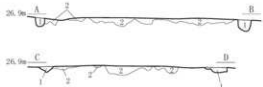


図40 第16号竪穴住跡(3)

## 第17号竪穴住居跡 (SI-17)

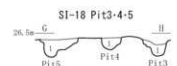
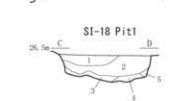
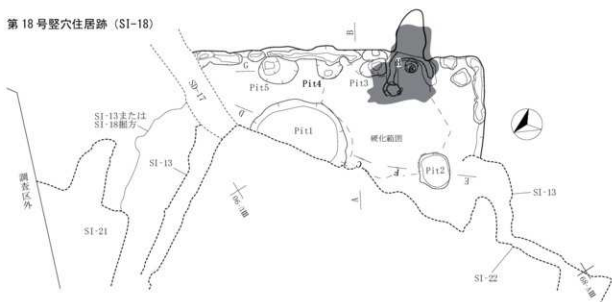


## 第17号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~7mm)2%,  
2層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土との混合土、黄褐色ローム粒(φ3~10mm)10%



## 第18号竪穴住居跡 (SI-18)



## 第18号竪穴住居跡

- 1層 黄褐色ローム 10YR7/8 黒褐色土20%、黄褐色ローム、にぶい黄褐色土各5%、炭化物1%

## SI-18 Pit1

- 1層 暗褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~12mm)5%、明褐色焼土粒(φ2~4mm)1%、  
2層 暗褐色土 10YR3/3 にぶい黄褐色土ブロック状に混入(15~20mm)2%、炭化物が粒状に混入、  
3層 褐色土 10YR4/6 黄褐色ロームブロック(φ5~50mm)5%、粘性あり、  
4層 暗褐色土 10YR3/4 明黄褐色ロームブロック(φ70mm)5%、黄褐色ロームブロック(φ10~30mm)2%、  
赤褐色焼土粒(φ2mm)1%、炭化物が粒状(φ2~4mm)に1%混入、  
5層 黄褐色+3F+7F 10YR5/6 褐色土10%

## SI-18 Pit2

- 1層 褐色土 10YR4/6 黄褐色ローム粒(φ5~200mm)20%、褐色粘土粒(φ10mm)、  
黒色土が粒状に混入(φ1~2mm)各1%

## SI-18 Pit3

- 1層 暗褐色土 10YR2/3 褐色土15%、層下部に黒色土15%、黄褐色ローム粒(φ3~10mm)2%

## SI-18 Pit4

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ2~10mm)2%、褐色焼土粒(φ1mm)1%、層下部に明黄褐色土、

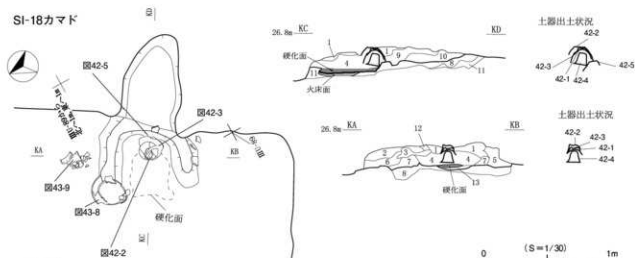
## SI-18 Pit5

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 にぶい黄褐色粘土、黄褐色ロームブロック(φ20~70mm)各10%、黒褐色土5%、  
ローム粒(φ1~3mm)2%、赤褐色焼土粒(φ2~3mm)1%、炭化物(φ3~5mm)混入、



図41 第17号竪穴住居跡、第18号竪穴住居跡(1)

SI-18カマド



カマド

- 1層 褐色土 10YR4/4 赤褐色焼土粒(φ3-10mm)5%。
- 2層 褐色土 10YR4/4 明赤褐色土、赤褐色焼土(φ1-7mm)各3%。炭化物ブロックを含む。
- 3層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色ロームブロック(φ3-5mm)1%。
- 4層 褐色土 10YR4/4 赤褐色焼土粒(φ1-5mm)7%。褐色ローム粒(φ2-5mm)2%。
- 5層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ローム粒(φ1-20mm)5%。赤褐色焼土粒(φ1-2mm)1%。
- 6層 褐色土 10YR4/4 黄褐色ローム粒(φ1-2mm)1%。
- 7層 褐色シムト 10YR4/6 黄褐色粘土塊(φ15mm)含む。
- 8層 暗褐色土 10YR3/4 明黄褐色ローム粒(φ3-20mm)10%。
- 9層 明赤褐色土 5YR5/8 明褐色ローム粒(φ15mm)1%。  
にふい黄褐色土がブロック状に混入し、その周囲ににふい黄色粒(φ2mm)と明褐色ローム粒(φ7mm)。
- 10層 暗褐色土 7.5YR3/4 褐色焼土粒(φ3-10mm)各1%。
- 11層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土、明赤褐色焼土粒(φ5mm)各1%。
- 12層 褐色土 10YR4/6
- 13層 褐色土 7.5YR4/4 褐色ローム粒(φ3-7mm)2%。
- 硬化面 二色褐色土 2.5Y6/3
- 火床面 明褐色焼土 7.5YR5/8

SI-18カマド支脚

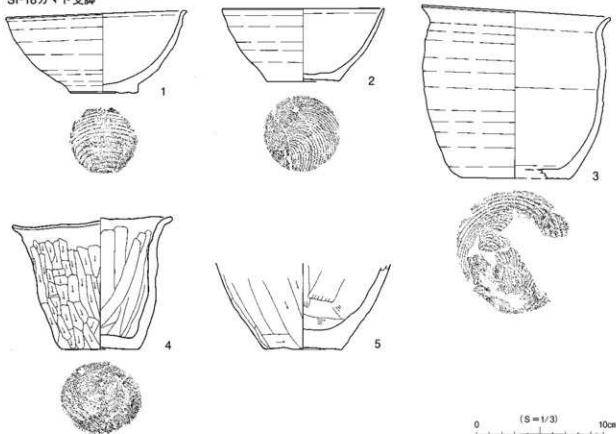


図42 第18号竪穴住居跡(2)

SI-18遺物

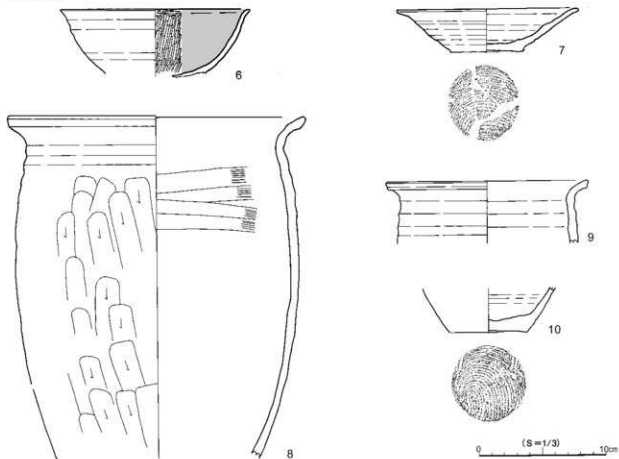
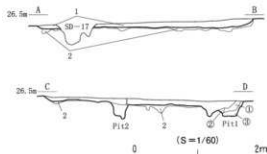
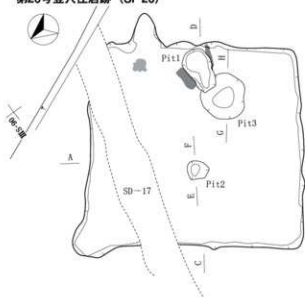


图43 第18号竖穴住居跡 (3)

第20号竪穴住居跡 (SI-20)



第20号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ロームブロック(φ1~30mm)3%。  
2層 — — 黄褐色ロームと黒褐色土の混合土。

SI-20 Pit2

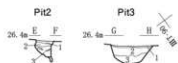
- 1層 黒褐色土 10YR2/2 褐色土含む、炭化物1%。  
2層 褐色土 7.5YR4/4 赤褐色焼土(φ3~7mm)3%。  
3層 褐色土 7.5YR4/4

SI-20 Pit3

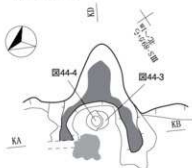
- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)30%。  
2層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ロームブロック(φ20~100mm)30%。  
黄褐色ローム粒(φ3~20mm)15%。  
3層 黄褐色ロームブロック 10YH5/6 褐色土10%。

SI-20 Pit1

- ①層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)10%、炭化物粒(φ1~5mm)1%。  
②層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)2%、褐色ローム粒(φ1~10mm)1%未満。  
③層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色焼土粒(φ5~30mm)15%、明黄褐色ローム粒(φ5~15mm)10%、炭化物粒(φ1~5mm)3%。



SI-20カマド



0 (S=1/30) 1m

カマド

- 1層 褐色土 7.5YR4/6 明赤褐色焼土粒(φ1~20mm)1%。  
2層 黄褐色粘土 10YR5/6 赤褐色焼土粒(φ5~30mm)1%、ソデ。  
3層 褐色粘土 10YR4/6 ソデ。  
4層 褐色土 7.5YR4/6 明赤褐色焼土粒(φ5~15mm)5%、明褐色粘土(φ5~15mm)1%。  
5層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%、明赤褐色焼土粒(φ5~10mm)3%。  
6層 黒褐色土 10YR2/3 明赤褐色焼土粒(φ10mm)1%未満。  
7層 黒褐色土 10YR2/3 暗褐色土1%。  
8層 暗褐色土 10YR3/3 明赤褐色焼土(φ5~30mm)10%、明褐色ローム3%。  
9層 黒褐色土 10YR2/3  
10層 褐色粘土 7.5YR4/6 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%。  
11層 褐色土 10YR4/6 明黄褐色ローム粒(φ5~30mm)20%。  
火床面 褐色焼土 7.5YR4/6

SI-20遺物

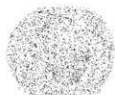
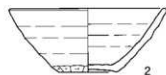
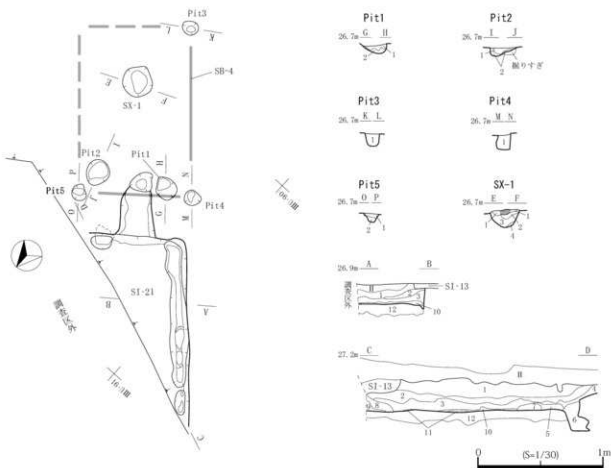


図44 第20号竪穴住居跡

## 第21号竪穴住居跡 (SI-21)



## 第21号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 109K2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~20mm)10%, 黒色土 7%, 明褐色粒 1%未満。  
 2層 黒褐色土 109K2/2 黒褐色土 30%, 明黄褐色ローム(φ1~30mm)10%, 黒色土、にぶい黄褐色ローム各 5%。  
 3層 黒褐色土 109K3/4 黒褐色土 20%, 明黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)15%, にぶい褐色ロームブロック(φ20~50mm)7%。  
 4層 黒褐色土 109K2/2 黄褐色ローム粒(φ1~2mm)2%, 橙褐色粒(φ3mm), 炭化物各 1%。  
 5層 黒色土 109K2/1 明黄褐色塊 10%, 赤褐色焼土 5%, にぶい黄褐色ローム 3%, 明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)2%, 炭化物 1%, カマド腐落土。  
 6層 黒色土 109K2/1 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%, 赤褐色焼土粒, 炭化物各 1%。  
 7層 - - 黒色土、焼土混じり粘土。  
 8層 暗褐色土 109K3/3 明黄褐色ローム粒(φ2~20mm)10%, 橙褐色ローム、炭化物各 3%。  
 9層 黒色土 109K2/1 炭化物 10%, 明黄褐色ローム粒 2%。  
 10層 黒色土 109K2/1 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)15%。  
 11層 黒色土 109K1.7/7 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)15%, 炭化物 3%。  
 12層 黄褐色土 109K7/8 明黄褐色土 5%, にぶい黄褐色土 2%, 明黄褐色ローム小粒(φ2~10mm)、炭化物各 1%。

## 第4号掘立柱建物跡 Pit1

- 1層 黒褐色土 109K2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~1mm)2%, 褐色粘土 1%。  
 2層 黒褐色土 109K2/3 黄褐色ロームとの混合土。

## 第4号掘立柱建物跡 Pit2

- 1層 黒褐色土 109K2/2 黒褐色土 5%, 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%。  
 2層 黒褐色土 109K2/3 明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)2%。

## 第4号掘立柱建物跡 Pit3

- 1層 黒褐色土 109K2/2 黒褐色土、暗褐色土各 15%, 明黄褐色ローム粒(φ1~15mm)2%。

## 第4号掘立柱建物跡 Pit4

- 1層 黒褐色土 109K2/2 褐色ローム粒(φ1~2mm)2%。

## 第4号掘立柱建物跡 Pit5

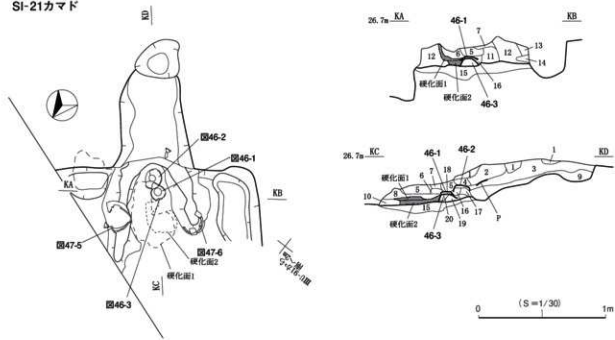
- 1層 暗褐色土 109K3/4 黄褐色ロームブロック(φ10~50mm)50%, 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%。  
 2層 暗褐色土 109K3/4 黒色土(φ5~8mm)5%。

## 第1号性格不明遺構

- 1層 オリーブ黄褐色粘土 1.56T/3 中央に大きな粘土ブロック, 黒色土、にぶい黄褐色砂各 10%。  
 2層 明褐色灰色粘土 1.56T/7/1 灰白色砂との混合土、にぶい黄褐色砂 5%。  
 3層 にぶい黄褐色砂 109K5/3 黒色土 5%。  
 4層 黒色土 109R1.7/1 灰白色粘土粒(φ5~7mm)10%。

図45 第21号竪穴住居跡 (1)

SI-21カマド



カマド

1層	黒褐色土	10YR2/3	褐色焼土5%、炭化物(φ1~5mm)3%。
2層	黒褐色土	10YR2/2	赤褐色焼土粒(φ5~35mm)7%、明褐色土ローム5%、暗褐色土3%。
3層	暗褐色土	7.5YR3/4	赤褐色焼土粒(φ5~30mm)7%、褐色土5%。
4層	褐色土	7.5YR4/6	明赤褐色焼土粒(φ1~15mm)10%。
5層	明赤褐色土	10YR6/6	赤褐色焼土10%、にぶい黄褐色土3%。
6層	黒褐色土	10YR2/3	棕色ローム粒(φ1~10mm)2%、明赤褐色焼土(φ1~5mm)3%。
7層	暗褐色土	10YR3/3	にぶい褐色ローム10%、赤褐色焼土5%。
8層	黒褐色土	10YR2/2	明赤褐色焼土粒(φ1~15mm)10%。
9層	黒褐色土	10YR2/3	明黄褐色ローム粒(φ1~15mm)7%、炭化物粒(φ1~5mm)、暗赤褐色焼土(φ1~5mm)各5%。
10層	黒褐色土	10YR2/2	明黄褐色ローム5%、明赤褐色焼土粒(φ1~10mm)1%。
11層	褐色土	7.5YR4/6	明赤褐色焼土(φ1~15mm)3%、棕色ローム粒(φ1~10mm)1%。
12層	黄褐色土	10YR5/6	明赤褐色ロームブロック(φ5~50mm)30%、明赤褐色焼土(φ1~15mm)15%、にぶい黄褐色土1%。
13層	黒褐色土	10YR2/3	黄褐色土5%、明褐色ローム粒(φ1~10mm)2%。
14層	暗褐色土	10YR2/2	にぶい黄褐色土2%、黄褐色ローム粒(φ1~3mm)1%。
15層	暗褐色土	10YR3/4	明黄褐色ロームブロック(φ1~50mm)30%、炭化物粒(φ1~5mm)1%。
16層	暗褐色土	7.5YR3/4	褐色焼土粒(φ1mm)1%、炭化物微量。
17層	暗褐色土	7.5YR3/4	
18層	暗褐色土	7.5YR3/4	
19層	褐色土	10YR4/4	
20層	明赤褐色土	5YR5/8	
硬化面1	黄褐色土	10YR5/6	
硬化面2	暗褐色土	7.5YR3/4	

SI-21カマド支脚

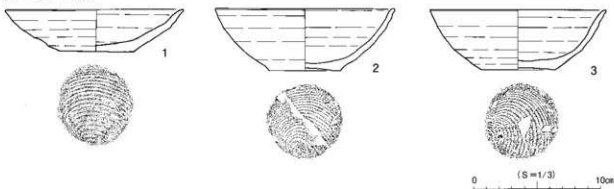


図46 第21号竪穴住居跡(2)



SI-21遺物

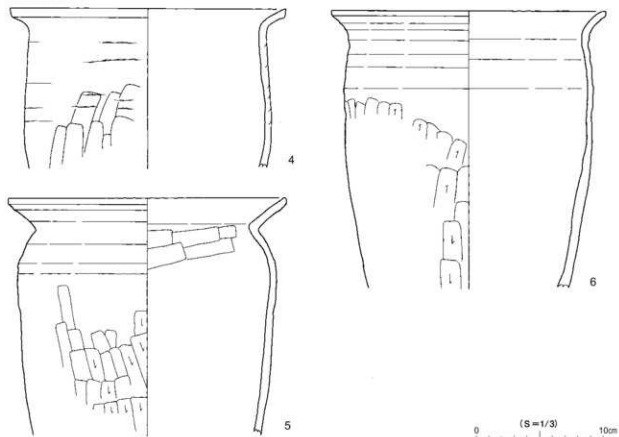


図47 第21号竪穴住居跡 (3)

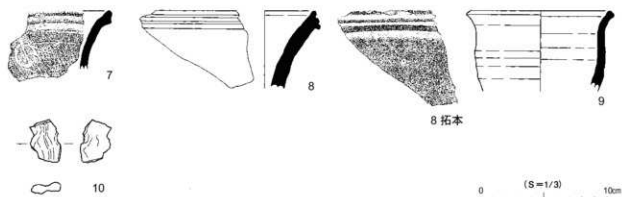


図48 包含層出土遺物 (平安)

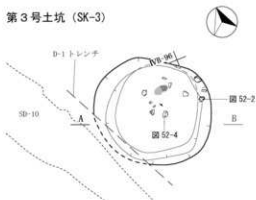
第2号土坑 (SK-2)



第2号土坑

1層 黒褐色土 101R1/7/1 黄褐色ローム粒(φ1~20mm), 炭化物(φ1~5mm)微量。

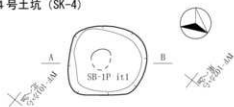
第3号土坑 (SK-3)



第3号土坑

- 1層 黒褐色土 101R2/2 ローム(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ3mm)1%以下, 火山灰含む。  
 2層 黒褐色土 101R2/2 ローム(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~5mm), 燧土粒(φ1~3mm)各1%以下。  
 3層 黒褐色土 101R2/2 黒褐色土15%, ローム(φ1~20mm), 燧土粒(φ1mm以下)各1%以下。  
 4層 黒褐色土 101R2/2 ローム(φ1~20mm)2%。  
 5層 黒褐色土 101R2/2 燧土(φ1~5mm), ローム(φ1~2mm)各1%以下。  
 6層 黒褐色土 101R2/2 ローム(φ10~50mm)40%。  
 7層 黒褐色土 101R2/2 ローム(φ5~50mm)50%。

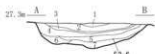
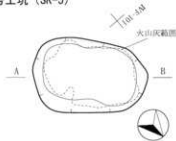
第4号土坑 (SK-4)



第4号土坑

- 1層 黒色土 101R2/1  
 2層 黒褐色土 101R2/2 黄褐色ローム粒(φ1~20mm)7%。  
 a層 褐色土 101R1/4  
 b層 黒褐色土 101R2/2 黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)10%。  
 c層 黒色土 101R2/1 黄褐色ローム粒(φ2~20mm)5%。  
 ※a~c層はSB-1柱1の埋積土。

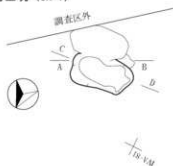
第5号土坑 (SK-5)



第5号土坑

- 1層 黒褐色土 101R2/2 黄褐色ローム粒(φ2~3mm)50%。  
 2層 黒褐色土 101R2/2 黒色土含む。  
 3層 粉褐色土 101R3/3 灰(灰含む)。  
 4層 黒褐色土 101R2/1 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)2%。  
 5層 黒褐色土 101R2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)10%。  
 6層 黒褐色土 101R2/2 明黄褐色ロームブロック(φ10~20mm)10%。  
 7層 黒褐色土 101R2/2 黄褐色ロームブロック(φ10~20mm)7%。  
 8層 黒褐色土 101R2/2 黄褐色ローム粒(φ3~5mm)10%。  
 9層 黄褐色土 101R5/6 ロームブロック。

第7号土坑 (SK-7)



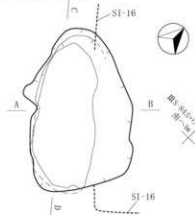
第7号土坑

- 1層 黒褐色土 101R3/2 ロームブロック(φ20~80mm)20%, ローム粒(φ1~10mm)2%。



図49 第2~5・7号土坑

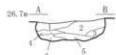
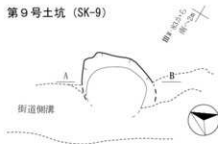
## 第8号土坑 (SK-8)



## 第8号土坑

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)1%, 黒色土まじりに含む。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 赤色土、赤色ローム粒(φ3~15mm)各3%,  
 次山灰をブロックまたは粉状に含む。  
 3層 黄褐色土 10YR5/8 ローム、硬質腐葉土。  
 4層 黒褐色土 10YR2/2 黒褐色土、赤色土、黄褐色ローム粒(φ2~30mm)各1%,  
 黄褐色ロームブロック(φ120mm)1%。  
 5層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%。  
 6層 黒色土 10YR2/1 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)2%, 褐色焼土ブロック(φ50mm),  
 焼土粒(φ20mm)各1%, 炭化物、灰を多く含む。  
 7層 黒褐色土 10YR2/2 褐色ローム粒またはブロック(φ3~10mm)10%。  
 8層 黒褐色土 10YR2/2 褐色ロームブロック(φ30mm)1%, 黄褐色ローム粒(φ3~7mm)2%。

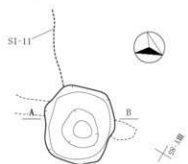
## 第9号土坑 (SK-9)



## 第9号土坑

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 赤黄褐色ローム小粒(φ2~8mm)2%,  
 浅黄褐色ローム小粒(φ2~5mm)2%および大塊(φ20~40mm)1%,  
 赤褐色土を多く含む。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ロームブロック2%, 赤褐色土2%,  
 明黄褐色ローム小粒(φ2~5mm)および炭化物1%。  
 3層 に近い黄褐色土 10YR5/4 褐色土1%, 灰白色土、明黄褐色土各1%。  
 4層 黄褐色土 10YR5/8 ローム、黒色土含む。  
 5層 黒褐色土 10YR3/2 明黄褐色ロームブロック3%, 明黄褐色ロームブロック2%。  
 6層 黄褐色土 10YR5/8 ローム。

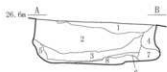
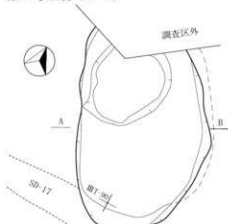
## 第10号土坑 (SK-10)



## 第10号土坑

- a層 黒褐色土 10YR2/2 SI-11 覆土。  
 b層 黒色土 10YR2/1 黒層相土。  
 1層 赤色土 10YR2/1 明黄褐色ローム(φ1~5mm)2%, 黄褐色ローム(φ1~5mm)1%,  
 炭化物(φ5~10mm)1%, 明黄褐色土(φ5mm)、暗赤褐色土(φ3mm)各1%未満。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム(φ1~12mm)5%, 黄褐色ローム(φ5~15mm)2%,  
 炭化物(φ5~30mm)1%, 明黄褐色土(φ5mm)、暗赤褐色土(φ3~10mm)各1%,  
 炭化物(φ5~30mm)2%, 明黄褐色土ブロック(φ3~10mm)1%。  
 3層 黒褐色土 10YR2/1 暗赤褐色土3%, 明黄褐色ローム(φ5~20mm)2%,  
 明黄褐色ローム(φ10~15mm)2%。  
 4層 黒色土 10YR2/1 明黄褐色ロームブロック(φ20~60mm)30%, 暗赤褐色土1%。

## 第11号土坑 (SK-11)

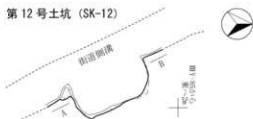


## 第11号土坑

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)2%。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)2%, 赤褐色焼土粒(φ1~2mm)1%,  
 黄色火山灰ブロック含む。  
 3層 黒褐色土 10YR2/2 明赤褐色焼土粒(φ10mm)、褐色ローム粒(φ2~5mm)各1%,  
 炭化物、赤色土少量。  
 4層 黒褐色土 10YR2/3 ローム腐葉土含む。  
 5層 暗褐色土 10YR3/3 ローム腐葉土含む。  
 6層 黒褐色土 10YR2/3 明赤褐色焼土粒(φ2~2mm)1%, 炭化物(φ2~8mm)少量。  
 7層 黒褐色土 10YR2/2 褐色ローム粒(φ2~5mm)、赤褐色焼土粒(φ1~4mm)各1%,  
 炭化物(φ2mm)含む。  
 8層 褐色土 10YR4/6 黒褐色土含む。

図50 第8~11号土坑

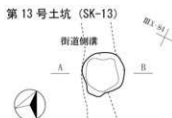
第12号土坑 (SK-12)



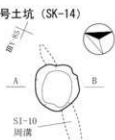
第12号土坑

1層 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック及びビローム粒を多量に含む。

第13号土坑 (SK-13)



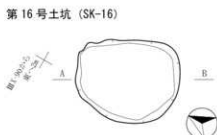
第14号土坑 (SK-14)



第15号土坑 (SK-15)



第16号土坑 (SK-16)



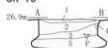
SK-13



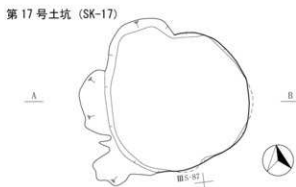
SK-14



SK-15



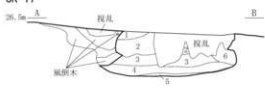
第17号土坑 (SK-17)



SK-16



SK-17



第14号土坑

1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒含む。

第15号土坑

1層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)1%。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)3%、炭化物粒(φ1~5mm)1%。  
 3層 黒色土 10YR2/1 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%、炭化物粒(φ1~5mm)1%、土器多量、淡黄色火山灰を含む。  
 4層 褐色土 10YR4/0 ローム崩落土主体。  
 5層 黒色土 10YR2/1 黄褐色ローム粒(φ1~20mm)5%、黒褐色土1%。

第16号土坑

1層 黒褐色土 10YR2/3  
 2層 黒褐色土 10YR2/3 褐色糠土、明褐色ローム(φ10mm)、黄褐色ローム(φ1~3mm)各1%、黄色火山灰ブロック少量含む。  
 3層 黒褐色土 10YR2/2 明黄褐色ローム粒(φ20mm)5%。  
 4層 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色ローム(φ3~7mm)10%。

第17号土坑

1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム(φ1~30mm)3%、明黄褐色ローム(φ1~15mm)2%。  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム(φ1~15mm)2%、明黄褐色ローム(φ1~5mm)1%、明黄褐色ローム(φ1mm)2以上び炭化物1%未満。  
 3層 黒褐色土 10YR2/3 明黄褐色ローム(φ1~50mm)20%、黄褐色ローム(φ1~15mm)5%、黒色土1%。  
 4層 黒色土 10YR2/1 黄褐色ローム(φ1~30mm)3%、明黄褐色ローム(φ1~25mm)2%、炭化物1%未満。  
 5層 黒色土 10YR1/7/3 黄褐色ローム(φ1~10mm)、褐色土、黄褐色ローム(φ1~5mm)各1%、炭化物1%未満。  
 6層 黄褐色土 10YR5/6 ローム(崩落土)主体、黒褐色土10%、明黄褐色ローム(φ30mm)1%。

図51 第12~17号土坑

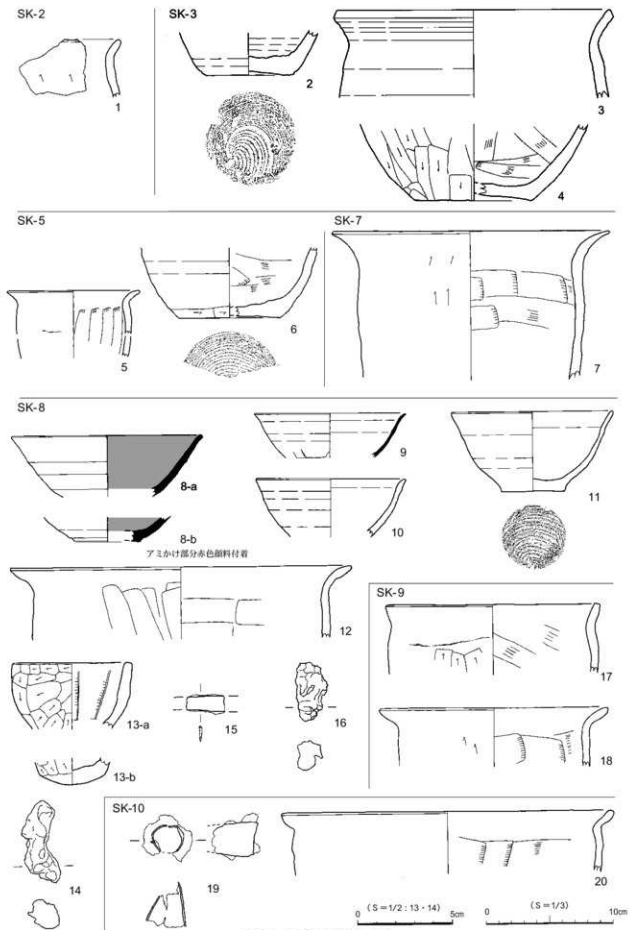


図52 土坑出土遺物 (1)

SK-11

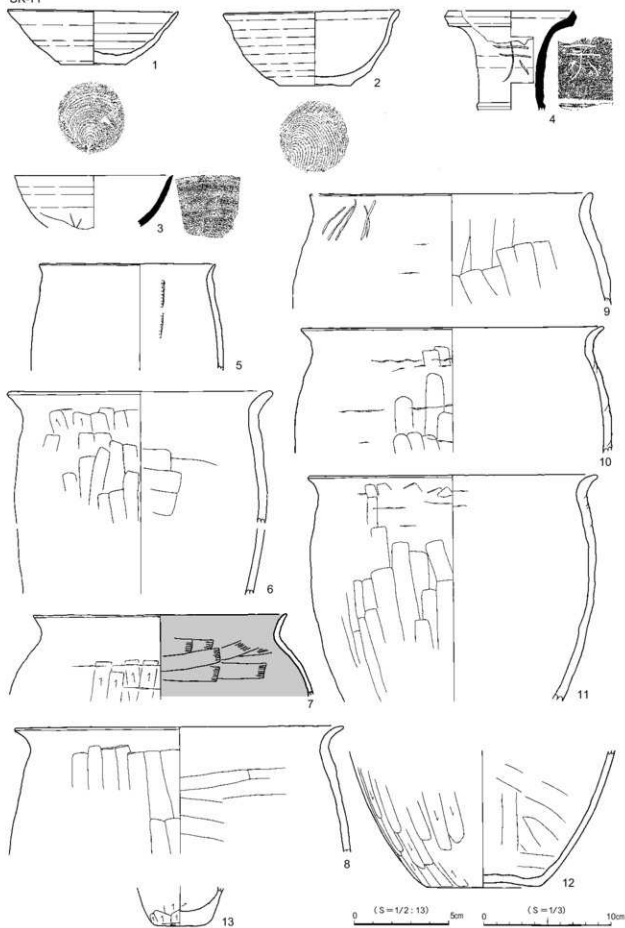


图53 土坑出土遺物(2)

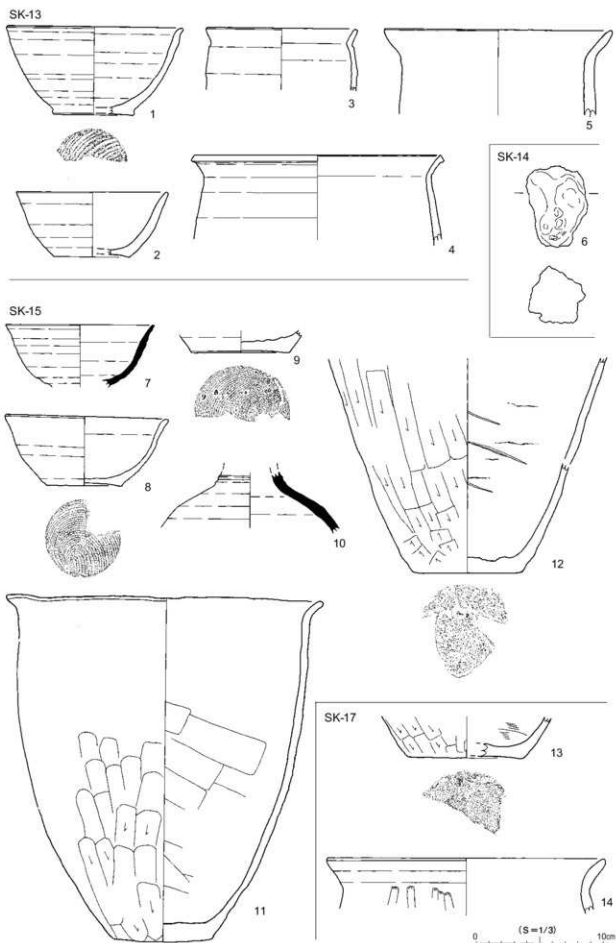
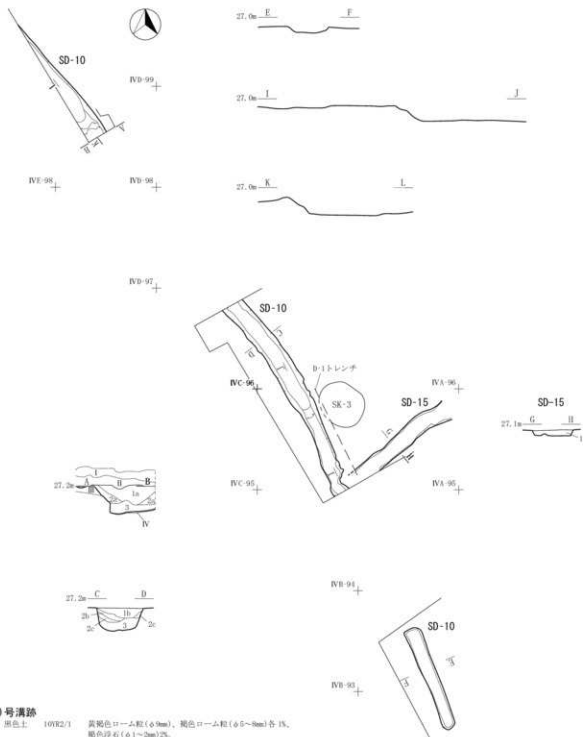


図54 土坑出土遺物 (3)

第10-15号溝跡 (SD-10-15)



第10号溝跡

- |          |           |   |
|----------|-----------|---|
| 1層 黒色土   | 10YR2/1   | 黄褐色ローム粒(φ5mm)、褐色ローム粒(φ5~8mm)各1%、<br>褐色浮石(φ1~2mm)2%。           |
| 1h層 黒褐色土 | 10YR2/2   | 褐色ローム粒(φ1~5mm)3%、明黄褐色浮石(φ1~2mm)1%。                            |
| 2a層 黒色土  | 10YR1.7/1 | 明黄褐色ロームブロック(φ5~10mm)1%、明黄褐色ローム粒(φ2~3mm)、<br>黄褐色浮石(φ1~2mm)各1%。 |
| 2b層 暗褐色土 | 10YR3/4   | 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)30%、褐色ロームブロック(φ5~10mm)20%。                     |
| 2c層 黒褐色土 | 10YR2/2   | 褐色ローム粒(φ2~7mm)2%。   |
| 3層 黒色土   | 10YR2/1   | 黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)50%、明黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)3%。              |

第15号溝跡

- |         |         |
|---------|---------|
| 1層 黒褐色土 | 10YR2/2 |
|---------|---------|

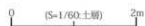
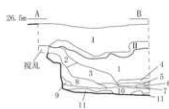


図55 第10・15号溝跡



第11号溝跡 (SD-11)



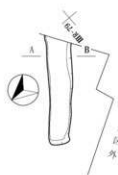
第11号溝跡

- |     |       |           |  |
|-----|-------|-----------|--|
| 1層  | 黒色土   | 10YR1.7/1 | 褐色ローム粒(φ1~10mm)30%,<br>炭化物(φ1~3mm)0%,              |
| 2層  | 黒褐色土  | 10YR2/2   | 黄褐色ローム粒(φ1~5m)30%,                                 |
| 3層  | 黒色土   | 10YR2/1   | 明黄褐色ロームブロック(φ5~30mm)30%,<br>にぶ・黄褐色ローム粒(φ1~5mm)10%, |
| 4層  | 黄褐色土  | 10YR5/6   | 暗褐色土10%,   |
| 5層  | 黒色土   | 10YR2/1   | 褐色ローム粒(φ1~5m)0%,                                   |
| 6層  | 黄褐色土  | 10YR5/8   | 褐色土5%,   |
| 7層  | 黒褐色土  | 10YR2/2   | 明黄褐色ロームブロック(φ20~50mm)30%,                          |
| 8層  | 黒色土   | 10YR1.7/1 | 明黄褐色ローム粒(φ1~1mm),<br>炭化物(φ1~5mm)5%,                |
| 9層  | 黒色土   | 10YR1.7/1 | 黄褐色ロームブロック(φ1~30mm)7%,                             |
| 10層 | 黄褐色土  | 10YR5/6   | 黒褐色土5%,  |
| 11層 | 浅黄褐色土 | 10YR8/4   | 黒褐色土2%,  |

規模の大きな溝跡の位置関係



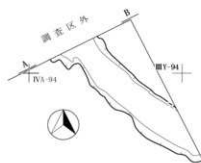
第12号溝跡 (SD-12)



第12号溝跡

- |    |      |         |  |
|----|------|---------|--|
| 1層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 明黄褐色ロームブロック(φ5~50mm)20%,<br>炭化物(φ1~5mm)1%未満, |
|----|------|---------|--|

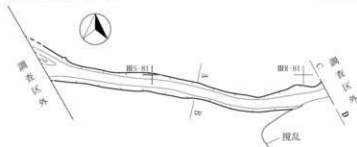
第14号溝跡 (SD-14)



第14号溝跡

- |    |     |           |  |
|----|-----|-----------|--|
| 1層 | 黒色土 | 10YR2/2   | 明黄褐色ロームブロック(φ5~10mm)5%,<br>明黄褐色ローム粒(φ1~3mm)10%, 炭化物(φ1~3mm)1%, |
| 2層 | 黒色土 | 10YR2/1   | 黄褐色ロームブロック(φ5~20mm)2%,   |
| 3層 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | 明黄褐色ロームとの混合土,  |

第16号溝跡 (SD-16)



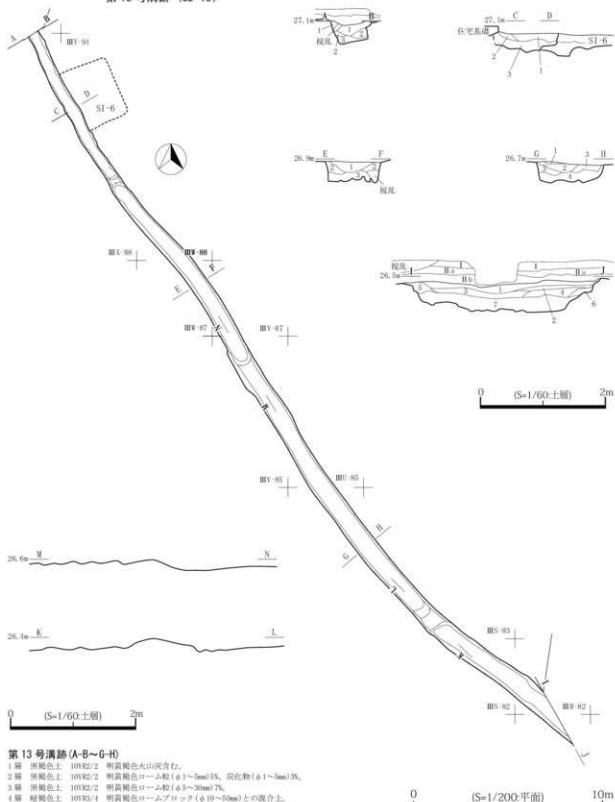
第16号溝跡

- |    |      |         |  |
|----|------|---------|--|
| 1層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%,<br>炭化物粒(φ1~2mm)1%以下,       |
| 2層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)0%,<br>黄褐色ロームブロック(φ20~30mm)2%, |
| 3層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)2%,                             |



図56 第11・12・14・16号溝跡

第13号溝跡 (SD-13)



第13号溝跡(A-B~G-H)

- 1層 黒褐色土 10182/2 明黄褐色火山灰含む。
- 2層 黒褐色土 10182/2 明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)5%、炭化物(φ1~5mm)3%。
- 3層 黒褐色土 10182/2 明黄褐色ローム粒(φ5~30mm)7%。
- 4層 暗褐色土 10183/4 明黄褐色ロームブロック(φ10~50mm)との混合土。

第13号溝跡(1~J)

- 1層 黒褐色土 10182/2 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%。
- 1a層 黒褐色土 10182/2 黄褐色ローム粒(φ1~2mm)、炭化物(φ1mm)各1%以下。
- 1b層 黒褐色土 10182/3 火山灰10%、黄褐色ローム粒(φ1~10mm)3%、黄褐色ロームブロック(φ20~30mm)1%、炭化物(φ1mm)1%以下。
- 2層 黒褐色土 10182/3 黄褐色ローム粒(φ1~2mm)3%、黄褐色ロームブロック(φ20mm)、炭化物(φ1mm)各1%以下。
- 2a層 黒褐色土 10182/3 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)5%。
- 3層 黒褐色土 10182/3 黄褐色土20%を層中央に多く含む、黄褐色ローム粒(φ1~10mm)10%、黄褐色ロームブロック(φ30~50mm)2%。
- 4層 黒褐色土 10182/1 黄褐色ローム粒(φ1mm以下)1%以下。

図57 第13号溝跡

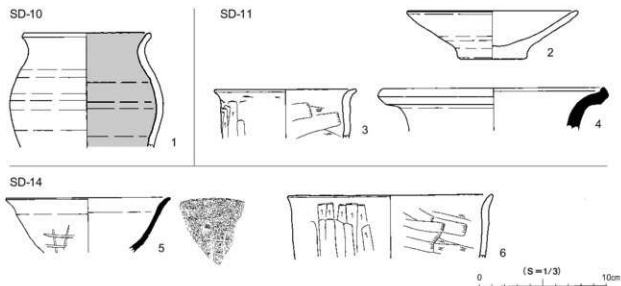
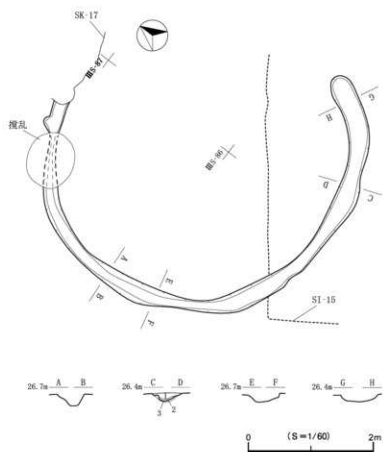


図58 溝跡出土遺物

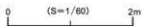
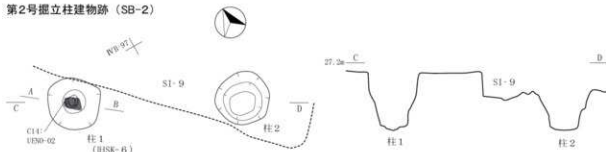


第1号円形周溝

- 1層 黒色土 10YR1.7/1  
 2層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色口→△粒(φ1~5mm)1%未満  
 3層 黒色土 10YR2/1 明黄褐色口→△粒(φ1~3mm)1%、SI-15 礫土。

図59 第1号円形周溝

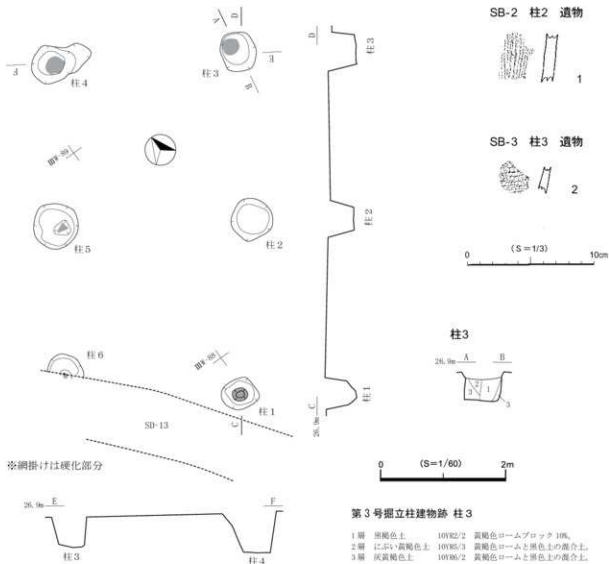
第2号掘立柱建物跡 (SB-2)



第2号掘立柱建物跡 柱1

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(φ3~5mm)、炭化物(φ3mm)各1%、下層はしりなし。
- 2層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ローム粒(1~2mm)、炭化物(φ3mm)各1%。
- 3層 褐色土 10YR4/1 黒色が中央に混入、黄褐色ローム粒(φ5~20mm)5%。
- 4層 黒褐色土 10YR2/3 褐色ローム粒(φ3~10mm)7%。

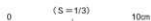
第3号掘立柱建物跡 (SB-3)



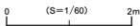
SB-2 柱2 遺物



SB-3 柱3 遺物



柱3



第3号掘立柱建物跡 柱3

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黄褐色ロームブロック10%。
- 2層 に近い黄褐色土 10YR5/3 黄褐色ロームと黒色土の混合土。
- 3層 灰黄褐色土 10YR6/2 黄褐色ロームと黒色土の混合土。

図60 第2・3号掘立柱建物跡

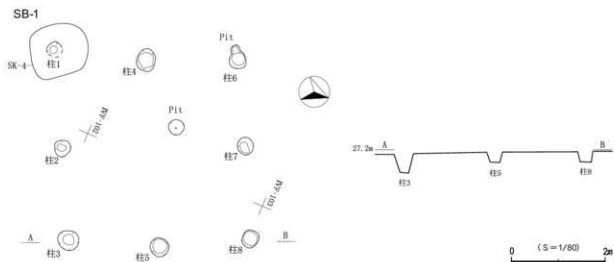


図61 第1号掘立柱建物跡

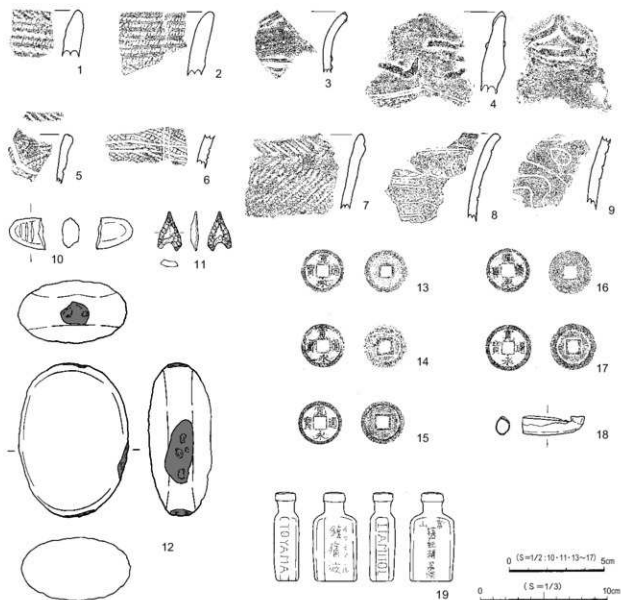
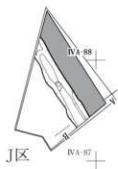


図62 包含層出土遺物(縄文、江戸時代以降)



陶器出土状況（白矢印の箇所）

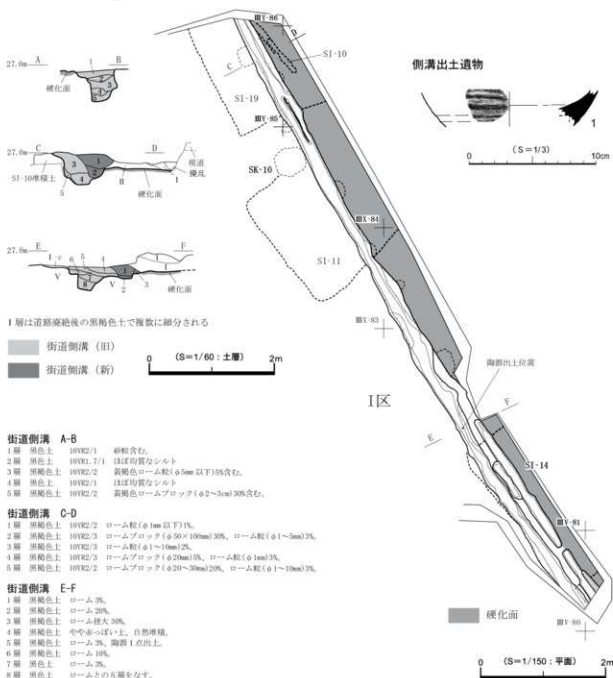


図63 街道跡

## 第4章 理化学分析

### 第1節 上野遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

上野遺跡は、青森県青森市浪岡大字樽沢字村元（北緯40° 42′ 53″、東経140° 33′ 15″）に所在する。更新世に形成された低位段丘上（標高約27m）に立地する。測定対象試料は、SK-3 出土木炭（08UENO-01：IAAA-90509）、SB-2 柱穴出土木炭（08UENO-02：IAAA-90510）、SK-8 出土木炭（08UENO-03：IAAA-90511）、合計3点である。

#### 2 測定の意義

遺構の帰属年代を検討する際の参考とする。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

#### 4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) <sup>14</sup>C年代（Libby Age；yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。
- (5) 暦年校正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた校正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年校正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する校正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma=68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。暦年校正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、校正曲線および校正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年校正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.1校正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## 6 測定結果

$^{14}\text{C}$ 年代は、08UENO-01が $1220\pm 20\text{yrBP}$ 、08UENO-02が $4410\pm 30\text{yrBP}$ 、08UENO-03が $1350\pm 20\text{yrBP}$ である。

平安時代の土器を伴い、覆土中に10世紀の降下火山灰を含む土坑から出土した木炭08UENO-01が平安時代前半頃、同じく08UENO-03はより遡る年代を示した。第2号掘立柱建物跡の柱穴から出土した08UENO-02は縄文時代中期の年代となった。

炭素含有率は60%を超えており、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 参考文献

- Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389
- Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



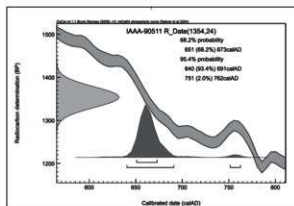
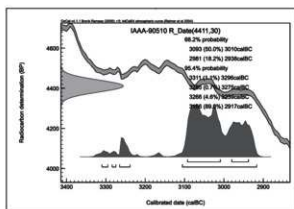
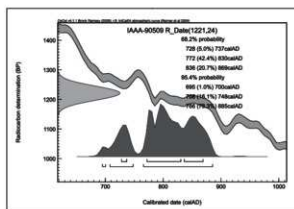
試料名	測定機関番号	前処理方法	試料状態	処理前試料量 (mg)	回収効率 (%)	燃焼量 (mg)	純化効率 (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加算値)	Libby Age (yrBP)	(yrBP・失効込みなし)	暦年校正 1 $\sigma$ (yrcaBP)	暦年校正 2 $\sigma$ (yrcaBP)
08UENO-01	IAAA-90509	AAA	炭燻	34.34	22.04	4.55	2.99	-30.56 $\pm$ 0.24	1,220 $\pm$ 20	1,221 $\pm$ 24	728AD - 737AD ( 5.0%) 772AD - 830AD (42.4%) 836AD - 869AD (20.7%)	695AD - 700AD ( 1.0%) 708AD - 748AD (16.1%) 766AD - 885AD (78.3%)
08UENO-02	IAAA-90510	AAA	炭燻	36.81	28.50	4.67	3.01	-23.2 $\pm$ 0.22	4,410 $\pm$ 30	4,411 $\pm$ 30	3093BC - 3010BC (50.0%) 2981BC - 2938BC (18.2%)	3311BC - 3296BC ( 1.1%) 3285BC - 3275BC ( 0.7%) 3266BC - 3239BC ( 4.6%) 3106BC - 2917BC (89.0%)
08UENO-03	IAAA-90511	AAA	炭燻	32.51	18.31	4.54	3.01	-24.58 $\pm$ 0.23	1,350 $\pm$ 20	1,354 $\pm$ 24	651AD - 673AD (68.2%)	640AD - 691AD (93.4%) 751AD - 762AD ( 2.0%)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-90509	08UENO-01	遺構: SK-3 層位: 3層	木炭	AAA	-30.56 $\pm$ 0.24	1,220 $\pm$ 20	85.90 $\pm$ 0.26
IAAA-90510	08UENO-02	遺構: SB-2柱穴 層位: 底面	木炭	AAA	-23.20 $\pm$ 0.22	4,410 $\pm$ 30	57.75 $\pm$ 0.22
IAAA-90511	08UENO-03	遺構: SK-8 層位: 6層	木炭	AAA	-24.58 $\pm$ 0.23	1,350 $\pm$ 20	84.49 $\pm$ 0.26

[#2996]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90509	1,310 $\pm$ 20	84.92 $\pm$ 0.25	1,221 $\pm$ 24	728AD - 737AD ( 5.0%) 772AD - 830AD (42.4%) 836AD - 869AD (20.7%)	695AD - 700AD ( 1.0%) 708AD - 748AD (16.1%) 766AD - 885AD (78.3%)
IAAA-90510	4,380 $\pm$ 30	57.96 $\pm$ 0.22	4,411 $\pm$ 30	3093BC - 3010BC (50.0%) 2981BC - 2938BC (18.2%)	3311BC - 3296BC ( 1.1%) 3285BC - 3275BC ( 0.7%) 3266BC - 3239BC ( 4.6%) 3106BC - 2917BC (89.0%)
IAAA-90511	1,350 $\pm$ 20	84.56 $\pm$ 0.26	1,354 $\pm$ 24	651AD - 673AD (68.2%)	640AD - 691AD (93.4%) 751AD - 762AD ( 2.0%)

[参考値]



[参考] 暦年校正年代グラフ

## 第2節 青森市上野遺跡の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科  
柴 正敏

青森市上野遺跡より採集された火山灰サンプル60試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井, 2003)。

ガラスの形態及び共存鉱物(表)、ならびに軽石粒子の発泡度・色(特に褐色ガラスの有無)・粒径より、ガラスは以下のように帰属される:

- (1) 白頭山苫小牧テフラ (B-Tm) のガラスのみからなると推定される試料  
(アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含み、褐色ガラス、石英(斑晶)及びホルンブレンドを含まないもの)  
・試料番号42, 43, 44, 45, 50, 53及び54 (計7試料)
- (2) 白頭山苫小牧テフラ (B-Tm) と十和田aテフラ (To-a) のガラスが混合したと推定される試料  
(アルカリ長石、エジリンオージャイト、褐色ガラス及び石英(斑晶)を含み、ホルンブレンドを含まないもの)  
・試料番号49及び52 (計2試料)
- (3) 白頭山苫小牧テフラ (B-Tm)、十和田aテフラ (To-a) 及び十和田八戸テフラ (To-H) のガラスが混合したと推定される試料  
(アルカリ長石、エジリンオージャイト、ホルンブレンド、褐色ガラス及び石英(斑晶)を含むもの)  
・試料番号60 (計1試料)
- (4) 十和田aテフラ (To-a) のガラスのみからなると推定される試料  
(褐色ガラス及び石英(斑晶)を含み、アルカリ長石、エジリンオージャイト及びホルンブレンドを含まないもの)  
・試料番号46及び48 (2試料)
- (5) 十和田aテフラ (To-a) と十和田八戸テフラ (To-H) ガラスが混合したと推定される試料  
(褐色ガラス、石英(斑晶)及びホルンブレンドを含み、アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含まないもの)  
・試料番号47, 51, 57及び59 (4試料)
- (6) 十和田八戸テフラ (To-H) ガラスのみからなると推定される試料  
(ホルンブレンドを含み、褐色ガラス、石英(斑晶)、アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含まないもの)

・ 試料番号 1～25, 27～41, 55, 56及び58 (計43試料)。

試料番号 8, 13及び18は海綿骨針を含む。試料 8 はOSTも認められる。

各試料について多数のガラス及び鉱物粒子を観察することにより、以上のようなグループ分けをすることができるが、ガラス粒子単独でガラスの帰属が明らかにできるとは限らないことを付記しておく。

試料番号26は、珪藻土であり、火山灰ではない。

#### 参考文献

- 青木かおり・町田 洋 (2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 —  $K_2O$ - $TiO_2$ 図によるテフラの識別。地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258。
- Hayakawa, Y. (1985). Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592.
- Machida, H. (1999). Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194-201.
- 町田 洋・新井房夫 (2003)、新編火山灰アトラス — 日本列島とその周辺 —。東京大学出版会、pp.336。
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 (2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成 (1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19。
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 (2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 — 宇樽部の一露頭を例として —。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。
- 柴 正敏・佐々木 実 (2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化、月刊地球、第28巻、第5号、322-325。



### 第3節 土師器内面付着の黒色物の塗膜分析

藤根 久・竹原弘展・佐々木由香（パレオ・ラボ）

#### 1 はじめに

上野遺跡は、青森市浪岡地区に所在する江戸時代の街道跡、平安時代の集落跡である。調査では、内面に漆様の黒色物が層をなして付着する土師器が検出された。土師器内に漆がある例は県内でも数例の事例しかない。そのため、この黒色付着物について赤外分光分析を行って漆かどうかの確認をした後、顕微鏡観察による塗膜観察とX線分析を行って、塗膜の構造および材料を検討した。なお、塗膜の顕微鏡観察と赤外分光分析は藤根が担当し、X線分析は竹原が担当し、本文は藤根・佐々木が作成した。

#### 2 試料と方法

分析試料は、11号竪穴住居跡のカマド周辺の床面から出土した10世紀代の土師器破片の内面（底部近く・体部下半）に付着する黒色物1点である（表1）。なお、付着黒色物は塗膜状に付着していることから、以下ではこの黒色付着物を塗膜状付着物と呼ぶ。

表1 土器内面付着黒色物と塗膜分析結果

試料No	種類	器種	遺構	時期	塗膜層	下地層
1	黒色付着物（内面、体部の底部近く）	土師器破	SI-11,カマド周辺,床面	10世紀	c1層	なし

試料は、極少量採取した後、包埋樹脂に注型用高透明エポキシ樹脂を使用して断面プレパラートを作製し、赤外分光分析、光学顕微鏡による観察およびX線分析を行った。

まず漆かどうかを調べるために、赤外分光分析を行った。試料は、塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

薄片は、予め塗膜構造を調べるために光学顕微鏡で観察した。その後、無機成分を調べるためにエネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡で調べた。薄片試料は、精密研磨フィルム2000～8000番を用いて研磨した。光学実体顕微鏡による観察の後、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。

#### 3 結果および考察

塗膜状付着物の表面部分の赤外分光分析では、漆の成

表2 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

分であるウルシオールの吸収ピーク (No.6 ~ No.8) と一致したことから、漆と同定された (図1-A)。なお、図1-Aの赤外吸収スペクトル図は、試料が実線、生漆が点線で示し、縦軸が透過率 (%R)、横軸が波数 (Wavenumber (cm<sup>-1</sup>); カイザー) である。スペクトル図は、ノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す (表2)。

表3 塗膜のエネルギー分散型X線分析結果

点No	C	SiO <sub>2</sub>	SO <sub>2</sub>	FeO
1	80.62	1.69	1.64	16.05
2	87.56	1.02	1.51	9.91

実体顕微鏡による観察では、光沢のある滑らかな面を呈し、塗膜状に付着して一部が剥離していた (図版1-2,3)。なお、縮み皺は認められない。

塗膜の薄片の光学顕微鏡観察では、厚さ約30μmで比較的均一の厚さからなり、淡褐色透明の塗膜層1層 (c1層) のみからなる。なお、土師器付着面には黒色部分が見られるが、漆層下には下地に相当する層は認められない (図版1-4)。また、薄片のSEM反射電子像の観察では、均質な組成を示す (図1-B)。また、X線分析では炭素 (C) が主成分であり、鉄 (FeO) やケイ素 (SiO<sub>2</sub>) あるいはイオウ (SO<sub>2</sub>) といった無機成分は少なく、漆以外の夾雑物は含まれていない (図1-B、表3)。

土師器坯の内面に見られた塗膜状付着物は、無機物 (顔料や夾雑物) を含まない精製した漆が付着していた。なお、膜の厚さが比較的均一であり、縮み皺は認められないが、下地に相当する黒色層は認められない。よって、この土師器は精製漆を入れた容器と考えられる。上野遺跡は台地上の遺跡のため、生の植物遺体は残存しなく集落周辺から漆を採取していたかどうかは不明であるが、精製漆を入れた容器が住居跡床面から出土したことにより、漆作業が集落内で行われていた可能性がある。

青森県内における土師器内に付着した漆の事例として、青森市朝日山 (2) 遺跡では、平安時代の竪穴住居跡から出土した土師器坯内面に褐色付着物が見られ、断面観察の結果、精製度の低い漆で坯はパレットとして利用されていた (榎吉田生物研究所, 2003)。また、東北町に所在する赤平 (3) 遺跡では古代の土師器内面に精製漆が付着し、容器として利用されており (藤根, 2007)、本遺跡例と類似する。

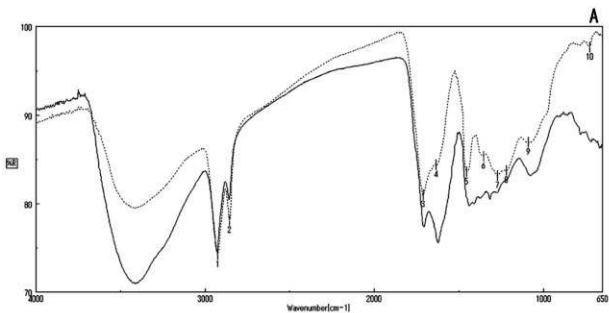
県内における古代の漆の利用は事例が少なく不明な点が多いが、類例を蓄積していくことにより、古代の漆利用が明らかになっていくと思われる。

#### 4 おわりに

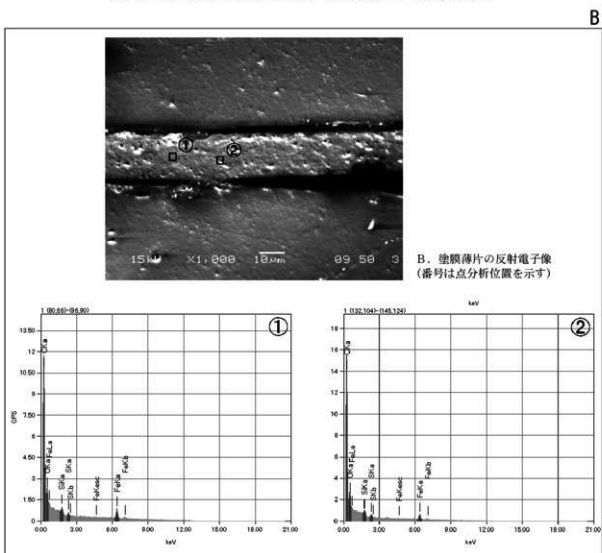
10世紀代の土師器坯内面に見られた塗膜状付着物は、漆と同定され、炭素以外の無機成分は少なかったことなどから、無機物 (顔料や夾雑物) を含まない精製した漆が付着していると考えられた。よって、この土師器は精製漆を入れた容器と考えられる。

#### 引用文献

- 藤根 久 (2007) 土師器付着物の材質分析。東北新幹線建設に伴う遺跡発掘調査報告。青森県埋蔵文化財調査センター編「赤平 (2) 遺跡・赤平 (3) 遺跡」: 167-168, 青森県教育委員会。
- 榎吉田生物研究所 (2003) 朝日山 (2) 遺跡の礎・土師器表面付着物の断面構造調査。青森県埋蔵文化財調査センター編「朝日山 (2) 遺跡VI」: 200-202, 青森県教育委員会。



A. 黒色付着物の赤外線分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸波数を示す）



B. 塗膜薄片の反射電子像（番号は点分析位置を示す）

図1 土器内面付着黒色の赤外線分光分析とX線分析結果



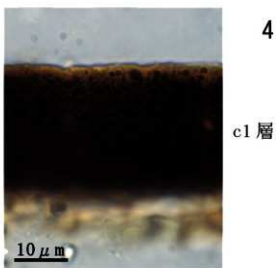
1. 土器片 (外側、bar:1cm)



2. 黒色付着物 (内内面、bar:1cm)



3. 塗膜薄片の採取位置



4. 塗膜層 (C1層) の光学顕微鏡写真

図版1 黒色物が付着する土器片と採取位置および塗膜層の顕微鏡写真



## 第4節 上野遺跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スタルシャン (パレオ・ラボ)

### 1 はじめに

上野遺跡は青森市浪岡大字樽沢字村元に位置し、JR奥羽本線浪岡駅から西へ約2 km、標高約27mの高位段丘頂部のほぼ平坦面に立地する。遺跡は平安時代の竪穴住居跡22軒をはじめとする集落跡で、時期は10世紀前半を主体とする。ここでは平安時代の竪穴住居跡および土坑から得られた炭化種実の同定を行い、利用された種実を検討した。

### 2 試料と方法

試料は炭化物が顕著に認められた竪穴住居跡のカマドや土坑の覆土の一部を採取して水洗した結果、炭化種実が含まれていた地点のもので、1試料あたり複数の炭化種実を含む水洗選別済みの試料である。試料の内訳を遺構名と試料数で示すと、竪穴住居跡であるSI-12 (カマド4・5層) 1試料、SI-15 (カマド灰層) 1試料、SI-16 (カマド内堆積土、カマド前庭部13層、カマド周辺床面) 3試料、SI-21 (カマド崩落土) 1試料、SI-22 (カマド前庭部黒色土) 1試料、土坑であるSK-8の6層 1試料、SK-11覆土 1試料、SK-15の3層 (灰混じり) 1試料の計10試料である (試料No.6は未分析)。遺構の時期はSK-15が10世紀前葉の十和田A火山灰降下後、SI-15とSI-16、SI-22、SK-8、SK-11が10世紀中葉の白頭山火山灰降下後、SI-12とSI-21が9世紀後半から10世紀前半である。またSI-12は焼失住居跡である。

堆積物の採取から洗浄、抽出までの作業は青森県埋蔵文化財調査センターによって行われた。土壌は浮遊物・沈降物共に0.5mm目の篩で水洗され、ある程度分類されていた。洗浄前の土壌重量を表1に示す。試料No.7は現場で目についた炭化物のみが回収されたため、計量はされていない。種実の同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。数が多い分類群はおおよその数を記号で表記した。試料は青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

### 3 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のトチノキ炭化種子と、サンショウ属炭化種子、ブドウ属炭化種子の3分類群、草本植物ではアサ炭化核と、ヤナギタデ炭化果実、イヌタデ炭化果実、サナエタデ・オオイヌタデ炭化果実、タデ属炭化果実、タデ科炭化果実、ダイズ炭化種子、ダイズ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属アズキ型 (以下アズキ型) 炭化種子、ササゲ属炭化種子、マメ科A炭化種子、マメ科B炭化種子、イヌコウジュ属炭化果実、エゴマ炭化果実、シソ属炭化果実、ナス属炭化種子、メナモミ属炭化果実、コナギ炭化種子、ツククサ炭化種子、ヒエ属炭化果実・種子、イネ炭化果実・種子、キビ炭化種子、アワ炭化果実・種子、オオムギ炭化種子、イネ科炭化種子、スゲ属炭化果実、ウキヤガラ炭化果実、ホタルイ属炭化果実の28分類群の計31分類群が見いだされた。このほかに、科以下の同定ができなかったものを不明炭化種実とした。残存が悪く、微細な破片であるため同定不能な一群を同定不能種実とした。植物以外には炭化した虫えいと子囊菌、未炭化の昆虫が少量得られた。

表1と2に同定 表1 堅穴住居跡から出土した炭化種実 (括弧は破片を示す)

結果を示す。

以下に遺構別

に炭化種実の出

土傾向を記載す

る (不明種実、

同定不能種実、

虫えい、子囊菌、

昆虫は除く)。

SI-12 (カマ

ド4・5層) :

イヌタデ果実と

イネ種子がわずかに得られた。

SI-15 (カマド灰層) : イネ種子が

わずかに得られた。

SI-16 (カマド内堆積土・カマド前

底部13層・カマド周辺床面) : カマ

ド内からはシソ属果実と、ヒエ属種

子、イネ種子、アワ種子、カマド前

底部からはイネ種子、カマド周辺か

らはヤナギタデ果実と、サナエタ

デ・オオイヌタデ果実、タデ属果実、

タデ科果実、ダイズ属種子、イネ種

子、アワ種子がわずかに得られた。

SI-21 (カマド崩落土) : トチノキ

種子が約1個分得られた。

SI-22 (カマド前底部黒色土) : ヤ

ナギタデ果実と、ダイズ種子、マメ

科B種子、ヒエ属種子、イネ種子、

アワ種子、イネ科種子がわずかに得

られた。

SK-8 (6層) : イネ種子が非常

に多く、破片数を含め約3000点であ

った。ヤナギタデ果実と、イヌコウ

ジュ属果実、シソ属果実、ヒエ属種

子、アワ種子、イネ科種子が多い。

タデ科果実と、マメ科B種子、ナス

試料No 遺構名 採取位置 層位	1		2		3		4		5		7		8	
	SI-12	SI-15	カマド内		カマド前底部	カマド周辺	カマド崩落土		カマド前底部		黒色土	カマド前底部		
分類群	部位/重量 (g)													
トチノキ														
炭化種子														
ヤナギタデ														
炭化果実														
イヌタデ														
サナエタデ・オオイヌタデ														
炭化果実														
タデ属														
炭化果実														
タデ科														
炭化果実														
ダイズ														
炭化種子														
ダイズ属														
炭化種子														
マメ科B														
炭化種子														
シソ属														
炭化果実														
ヒエ属														
炭化種子														
イネ														
炭化種子														
アワ														
炭化種子														
イネ科														
炭化種子														
同定不能														
炭化種実														
虫えい														
子囊菌														
炭化子囊														
昆虫														

表2 土坑から出土した炭化種実 (括弧は破片を示す)

試料No 遺構名 層位	9		10		11	
	SK-8	SK-11	SK-15		3層 (灰泥じり)	
分類群	部位/重量 (g)					
トチノキ						
炭化種子						
サンショウ属						
炭化種子						
ブドウ属						
炭化種子						
アサ						
炭化核						
ヤナギタデ						
炭化果実						
イヌタデ						
炭化果実						
タデ科						
炭化果実						
ダイズ						
炭化種子						
ダイズ属						
炭化種子						
ササゲ属アズキ亜属アズキ型						
炭化種子						
ササゲ属						
炭化種子						
マメ科A						
炭化種子						
マメ科B						
炭化種子						
イヌコウジュ属						
炭化果実						
エゴマ						
炭化果実						
シソ属						
炭化果実						
ナス属						
炭化種子						
メナモミ属						
炭化果実						
コナギ						
炭化種子						
ツクサ						
炭化種子						
ヒエ属						
炭化果実						
炭化種子						
イネ						
炭化果実						
炭化種子						
キビ						
炭化種子						
アワ						
炭化果実						
炭化種子						
オオムギ						
炭化種子						
イネ科						
炭化種子						
スゲ属						
炭化果実						
ウキヤガラ						
炭化果実						
ホタルイ属						
炭化果実						
不明						
炭化種実						
同定不能						
炭化種実						
子囊菌						
炭化子囊						
昆虫						

10点未満+, 10点以上50点未満++, 50点以上100点未満+++, 100点以上++++

属種子、コナギ種子、ホタルイ属果実がやや多く、ダイズとアズキ型が少量、トチノキ種子と、ブドウ属種子、アサ核、イヌタデ果実、ダイズ属種子、ササゲ属種子、マメ科A種子、エゴマ果実、メナモミ属果実、ツククサ種子、ヒエ属果実、イネ果実、キビ種子、アワ果実、オオムギ種子、スゲ属果実、ウキヤガラ果実がわずかに得られた。

SK-11 (覆土) : イネ種子とイネ科種子がわずかに得られた。

SK-15 (3層(灰混じり)) : イネ種子が少量、サンショウ属種子と、シソ属果実、ヒエ属種子、アワ種子、イネ科種子がわずかに得られた。

以下に主要な炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) アサ *Cannabis sativa* L. 炭化核 クワ科 : 上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。残存長3.7mm、幅3.5mm、厚さ2.9mm。

(2) ヤナギタデ *Persicaria hydropiper* (L.) Spach 炭化果実 タデ科 : 上面観は両凸レンズ形、側面観は両端が尖る広卵形。表面に細かい網目模様があり、やや光沢がある。基部に果柄の小突起がある。長さ2.0mm、幅1.5mm程度。

(3) タデ属 *Polygonum* sp. 炭化果実 タデ科 : 上面観は円形、側面観は楕円形。先端はやや突出し、下端には円形の着点がある。表面は平滑。長さ1.4mm、幅1.2mm程度。

(4) ダイズ *Glycine max* (L.) Merr. subsp. *max* 炭化種子 マメ科 : 上面観は楕円形、側面観は長楕円形。へそは全体の1/3未満で、長楕円形。中央に縦溝 (hilar groove)、その周囲に縁線 (rim-aril) がある (小畑ほか, 2007)。大きさから栽培種とした (小畑, 2008)。長さ8.1mm、幅5.2mm、厚さ4.0mm程度。ダイズ属はへそが片側に寄り、長さ5.2mm、幅4.2mm、厚さ3.5mm程度で、大きさを現生種と比較すると、野生種と栽培種双方が含まれる (小畑, 2008)。

(5) ササゲ属アズキ亜属アズキ型 *Vigna angularis* var. *angularis* type 炭化種子 マメ科 : 上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。長楕円形のへその内部に厚膜 (Epihilum) が残存する (小畑ほか, 2007)。へそは全長の半分から2/3ほどの長さ。種瘤が明瞭に突出する。現生種と大きさを比較すると、野生種と栽培種双方を含む (小畑, 2008)。長さ6.0mm、幅4.2mm、厚さ4.2mm程度。ササゲ属は側面観が長楕円形で、へそが非常に長い、へその内側は残存していない。長さ7.7mm、幅4.2mm、厚さ4.3mm。

(6) マメ科A *Leguminosae* sp. A 炭化種子 : 上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形で、へそは楕円形で側面中央部に付く。表面は平滑で強い光沢がある。長さ2.3mm、幅1.7mm、厚さ1.3mm程度。へその構造は不明である。

(7) マメ科B *Leguminosae* spp. B 炭化種子 : 破片で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形か。へそは残存していない。表面は平滑。へそが残存していないため、属以下の同定ができなかったが、形状からダイズまたはダイズ属の可能性のある破片を一括した。復元形の大きさは栽培種と野生種双方を含む (小畑, 2008)。

(8) エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens* 炭化果実 シソ科 : いびつな球形。端部に着点がある。表面には不規則で多角形の浅い網目模様がある。網目部分はわずかに凹む。長さ2.3mm、幅2.0mm程度。

(9) コナギ *Monochoria vaginalis* (Burm.f.) C.Presl var. *plantaginea* (Roxb.) Solms-Laub. 炭化種子

ミズアオイ科：上面観は円形、側面観は楕円形。表面には縦方向の低い隆起があり、隆起の間は横方向の線が密に入る。長さ1.3mm、幅0.7mm程度。

(10) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 炭化果実・炭化種子 イネ科：果実は長楕円形。横方向に細かい顆粒状の模様があり、壁は薄く弾力がある。長さ2.7mm、幅1.7mm程度。種子は上面観が扁平で側面観が楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の2/3程度と長い。栽培種であるヒエに近い円形の形状（長さ1.8mm、幅1.6mm程度）と、ヒエよりやや細長い形状（長さ2.1mm、幅1.5mm程度）で、野生のイヌヒエに近い大きさの種子もあるが、明瞭に2者を区別できなかったため、一括した。

(11) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 イネ科：側面観は長楕円形、断面は円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は楕円形～円形となる（Jacomet, 2006）。長さ5.7mm、幅2.1mm、厚さ2.7mm程度。

(12) イネ科 Gramineae sp. 炭化種子：上面観は楕円形、側面観は先端がやや尖る長楕円形。表面は円滑。胚は全長の1/2程度。属以下の同定はできなかった。長さ1.8mm、幅1.1mm。

(13) 不明 Unknown 炭化種実：上面観は円形、側面観はいびつな楕円形。下端にやや突出した大きな着点がある。表面は平滑。遺存状況が悪いため、科以下の同定ができなかった。長さ5.4mm、幅4.6mm。

#### 4 考察

竪穴住居跡のカマドおよび土坑覆土内の炭化種実を検討した結果、SK-8では多数の炭化種実が得られたものの、そのほかの遺構からの産出量はわずかであった。竪穴住居跡であるSI-12・15・16・21・22では栽培植物であるダイズとイネ、アワ、栽培種と野生種双方が含まれるダイズ属とマメ科B、シソ属、ヒエ属が見いだされた。野生種では、利用の可能性がある分類群として木本植物のトチノキ、周辺の植生からもたらされたと推定される分類群として草本植物のヤナギタデや、サナエタデ・オオイヌタデ、タデ属、タデ科、イネ科が得られた。食用可能な分類群はカマド内に多く、食用できない分類群はSI-16のカマド周辺床面（カマド脇の床面の窪みにたまった黒色土）やSI-22のカマド前底部黒色土（カマド手前の床面に広がる黒色土）から得られた。SI-21からはトチノキ種子のみが出土した。トチノキの炭化種子はカマド構築材の一部に含まれていたか、カマドを壊した後の埋め戻し土に含まれていたかは出土状況からは不明であったが、食用可能な子葉でなく、種子の部分が出土したため、保管されていた種子が炭化した可能性がある。

10世紀代の土坑3基から共通して得られた分類群はイネのみで、産出量と組成は異なっていた。SK-11からは栽培種のイネと野生種のイネ科、SK-15は栽培種のイネとアワ、栽培種と野生種双方を含むシソ属とヒエ属、種によっては利用した可能性がある木本植物のサンショウ属、周辺の植生からもたらされたと推定される分類群として野生種のイネ科が得られた。特異な組成を示したのはSK-8である。SK-8は洗浄土壌量を反映してか、炭化種実の量も得られた分類群数も非常に多かった。SK-8は長軸2.5m、短軸1.6mの不正楕円形で、深さは最深部で約60cmの土坑である。6層には調査時に藁灰のようなものが確認されているが、土坑内で火を焚いた可能性は低いと考えられている。栽培植物では水田作物のイネが非常に多く、畑作物のアサと、ダイズ、エゴマ、キビ、アワ、オオムギ、栽培種と野生種双方が含まれるダイズ属と、アズキ型、ササゲ属、マメ科B、シソ属、ヒエ属が見い

だされた。野生種では利用の可能性がある木本植物のトチノキとブドウ属、周辺の植生からもたらされたと推定される分類群として草本植物のヤナギタデや、イヌタデ、タデ科、マメ科A、イヌコウジュ属、ナス属、メナモミ属、コナギ、ツユクサ、イネ科、スゲ属、ウキヤガラ、ホタルイ属が得られた。コナギやウキヤガラ、ホタルイ属は抽水植物のため、水田や畦畔、水がたまった溝や池内に生育していた可能性があるが、土坑周辺には該当する遺構は検出されておらず、遺跡の立地からも水が溜まるような遺構があったとは考えにくい。ほかにも水田・畦畔・湿地に生育するヤナギタデが含まれていることや、種実はずべて炭化していることから、水田などにおいて何らかの要因で燃やされて炭化した種実が土坑に廃棄された可能性がある。栽培植物は水田作物と畑作物の双方が検出されているが、食用となる種子以外に果実を伴う分類群が多い。SK-8 とほぼ同時期で近接するSI-15など、竪穴住居跡等で利用された残渣も含まれているかもしれないが、上記の草本植物が一定量含まれていることから、水田や畑に残っていた栽培植物の果実が火を受けたか、あるいは果実の状態で貯蔵されたものが炭化して廃棄されたか流れ込んだことなどが推察される。ただし、調査区内からは水田や畑作遺構は検出されていない。また、SK-8 には同定された種実のほかに、同定不能種実も500点ほど含まれており、6層にはかなりの量の種実が含まれていたと推察される。SK-11は形状がSK-8 と似ており、同様の廃棄土坑の可能性が考えられているが、土壌採取量が少なかったため、産出した種実が少なかった可能性がある。

#### 引用文献

- Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.
- 小畑弘己 (2008) マメ科種子同定法, 小畑弘己編「極東先史古代の穀物3」:225-252, 熊本大学.
- 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 (2007) 土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培, 植生史研究15(2), 97-114.



図版1 上野遺跡から出土した炭化種実 (1)

スケール1-8:1mm, 4d, 5c, 8d任意

1. アサ炭化核 (No.9)、2. ヤナギタデ炭化果実 (No.9)、3. タデ属炭化果実 (No.5)、4. ダイズ炭化種子 (No.9)、
5. ダイズ属炭化種子 (No.9)、6. ササゲ属アズキ亜属アズキ型炭化種子 (No.9)、7. ササゲ属炭化種子 (No.9)、
8. マメ科A炭化種子 (No.9)



スケール 9-17: 1mm

図版2 上野遺跡から出土した炭化種実 (2)

9. エゴマ炭化果実 (No. 9)、10. コナギ炭化種子 (No. 9)、11, 12. ヒエ属炭化果実 (No. 9)、13, 14. ヒエ属炭化種子 (No. 9)、15. オオムギ炭化種子 (No. 9)、16. イネ科炭化種子 (No. 9)、17. 不明炭化種実 (No. 9)

## 第5章 ま と め

### (1) 調査成果の概要

平成20年度の上野遺跡発掘調査（二次調査）は2,500㎡を対象に行われ、発掘調査面積は1,500㎡であった。検出された遺構は以下のとおりである。

- ・縄文時代（前期～中期か）・・・掘立柱建物跡2棟
- ・平安時代（10世紀前半主体）・・・竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡1棟、土坑15基、溝跡8条、円形周溝1基、性格不明遺構1基
- ・江戸時代以降・・・・・・・・・・掘立柱建物跡1棟、道路（街道）跡1条、

なお、縄文時代早期以前・縄文時代晩期～奈良時代・中世の遺構および遺物は検出されなかった。

### (2) 平安時代の集落について

上野遺跡の一・二次調査で検出された平安時代に属する遺構のうち、最も北西に位置するものは今回IVJ-109グリッドで検出されたSI-2・3、最も南東に位置するものが一次調査のⅢG-62グリッドで検出された溝7である。両者の間は210m離れており、これらが同時期とはいえないが、平安時代には広範囲にわたって集落が営まれていたことが明らかとなった。本遺跡で検出された遺構には、時期決定の指標となる広域火山灰（To-a；915年頃に降下、B-Tm；930年代後半以降に降下）が含まれるものが少ない。遺構同士の重複状況は表1に整理しており、E・F・I区での重複事例が多い。また、火山灰および切り合いによって推定される遺構の帰属時期は、表2の通りである。B-Tm降下後の10世紀中葉と判断されるものは、SI-13・15・16・22、SK-8・11・17、SD-11・17、円形周溝の合計10遺構で、E・F区に多い。出土遺物では、五所川原産須恵器の中で10世紀初頭以前と考えられるものが出土していないこと、また、10世紀後葉以降に増加するとされる把手付土器が出土していないことから、集落の主体となる時期は10世紀前半と考えている。

検出された竪穴住居跡21軒の主軸方位や規模を表3にまとめた。1辺以上の規模が判明したものは16軒ある。1辺の長さが3m以下の小型住居が7軒、4～5m代の中型住居が4軒、6m以上の大型住居が5軒となり、小型・中型・大型各類の軒数はほぼ同程度である。なお、各辺の長さが異なる竪穴住居跡にはSI-8・12・13・16・22があり、いずれもカマドが作られた壁を長く作っている。カマドが確認できたものは14軒である。カマドは煙道を半地下式としたものが南東壁に1基作られる場合が多く、SI-12のみ煙道を地下式とするものが南西壁に作られている。主軸方位は、煙道方向が座標北からどれくらい傾いているかで示しており、煙道が確認できない場合は南東または北西壁に対して直交するラインが指す方位とした。主軸方位は南東方向に集中し、座標北からの傾きは126°～155°である。B-Tm以後と考えられるSI-13・15・16・22の4軒の傾きは136°～150°となっており、全体のばらつきの中に収まるため、時期によって主軸方位が極端に変化した様子は窺えない。また、出土した土師器甕にはロクロ整形のもの（以下ロクロ甕と略す）と非ロクロ整形のもの（以下非ロクロ甕と略す）があり、10世紀では時期が下るにつれて非ロクロ甕が増加するとされている（岩井2009など）。表4に基づいて各住居跡で出土した両者の甕の割合を比較し、図64には、より古いと推定されるロクロ甕が多数を占める住居跡の主軸方位を長線で、新しいと推定される非ロクロ甕が多数を占める住居



跡の主軸方位を短線で表した。これによっても両者は重なっており、本遺跡では主軸方位だけで住居跡自体の新旧関係を判断することはできない。なお、1軒だけ主軸が南西方位をとるSI-12の南東壁に直交するラインの傾きは $N-136^{\circ}-E$ であり、住居跡自体の傾きは他の住居跡と同様といえる。

特殊な遺構としては、SI-11のPit1で須恵器製の破片を蓋、土師器内黒壺を本体とする土器埋設遺構が検出された。壺内からは残存物は回収されなかったため、有機物を埋納していた可能性が高い。

### (3) 平安時代の遺物について

**土師器・須恵器** 本遺跡の二次調査では、土師器が破片数で8,433点、同じく須恵器が401点出土した。平安時代の土器・陶器の総点数は、これに緑釉陶器1点を加えた8,835点である。緑釉陶器の記載は後段に譲り、土器の比率について簡単に述べる。表5には出土土器の数量を示した。表5-aは破片数の比率で、土師器が95.5%、須恵器が4.5%である。なお、表5-b・cには口縁部のみで集計した比率も掲載したが、須恵器はすべて4%代に収まる。この数値は、表6-a・bに示した同じ浪岡地区に所在する山元(1)遺跡の須恵器比率6.1%、高屋敷館遺跡の6.4%に近く、青森平野に所在する新田(1)遺跡の1.6%とは差異があるようにみえる。ただし、この差異は地域性によるものか、各遺跡の主体となる時期によるものか、または調査担当者ごとに酸化焙焼成の硬質土器の扱いが異なることによるものか、更なる検討が必要である。本報告では、酸化焙焼成の硬質土器のうち、火だすき痕が認められるものや器壁・底部の厚さなどが他の須恵器と共通するもののみを須恵器として集計した。

**器種組成** 平安時代には土師器・須恵器とも器種分化が進んでおり、それらは食膳具・煮炊具・貯蔵具に大別され、ごく少量のミニチュア土器がこれに加わる。表7は二次調査で出土した土器のうち、口縁残存度が1/6以上であるものを対象として口縁部計測法によって算出した個体数(総計51.36個)からみた器種組成である。内訳は、食膳具が41.7%、煮炊具が52.1%、貯蔵具が5.9%、ミニチュア土器が0.3%という比率となり、煮炊具および食膳具が組成の主体をなす。地域は異なるが、9世紀後半～10世紀前半の集落跡が調査された岩手県細谷地遺跡の第4・5次調査報告書では、第17表として住居跡出土土器の組成が示されている(岩手県文化振興事業団2003)。同表を集計すると、出土点数651点のうち、食膳具(須恵器坏、土師器坏・高台付坏、あかやき坏、耳皿)は292点で44.9%、煮炊具(土師器甕・甗)は274点で42.1%、貯蔵具(須恵器壺・甕、あかやき壺・甕)は85点で13.1%となる。また、八戸市湯野遺跡の奈良時代の集落跡の調査では、堅穴住居跡から出土した土器を口縁部計測法によって算出している(青森県教育委員会2006)。ここで得られた個体数68.4個の内訳は、食膳具(坏)30.2%、煮炊具(甕・甗)62.3%、貯蔵具(鉢・球胴甕)6.0%、ミニチュア土器1.5%であった。これらから平安時代には奈良時代よりも食膳具が増え、煮炊具の比率が低下する可能性もあるが、現時点で判断するのは時期尚早であり、今後の調査において解決すべき課題と考える。

**製塩土器**(図25-16) SI-12の覆土から、製塩土器と思われる土師質の土器が出土した。製塩土器はその名が示すとおり塩生産に用いられた土器であり、津軽地域内陸部での出土は極めて珍しい。浪岡地区では、山元(3)遺跡の第39号住居跡(年代は10世紀前半とされる)において、底部を欠くものが1個体出土している(青森県教育委員会1994)。

**漆容器**(図21-6) SI-11で出土した土師器坏の内面には、黒色物が塗膜状に付着している。分析の結果漆塗膜であることが判明し、精製漆の容器と考えられた(第4章第3節)。近隣では野尻(1)

表1 遺構の新旧関係(新&gt;旧)

	SI-2	>	SI-3	
	SD-13	>	SI-6	
	SI-19	>	SI-10	
	SK-14	>		
	SK-10	>	SI-11	
	SK-13	>		
	SI-13	>	SI-18	
		>	SI-21	
		>	SI-22	
	SK-8	>	SI-16	
円形周溝	>	SI-15	>	SI-16
SD-17	(SI-22と同時期)	>	SI-20	

表2 遺構の推定時期(主に火山灰との関連から)

推定時期	遺構名	根拠
To-a 以前 (10世紀初頭か)	SK-5	To-a 自然堆積
To-a 以降 (10世紀前葉か)	SK-3・15 SD-13	To-a 二次堆積
	SD-10	SD-10に連続した溝跡
B-Tm以降 (10世紀中葉か)	SI-16 SK-8・11・17	B-Tm二次堆積
	SI-15 SD-11	B-Tm降下後の須恵器
	円形周溝	SI-15より新しい
	SI-13・22	SK-11と土器が接合
	SD-17	SI-22と関連する溝跡

表3 竪穴住居跡の主軸方位

遺構名	方位	主軸方位の基準	ロクロ甕の比率	規模
SI-1	141° - E	南東壁直交	0%	4.5m
SI-2	150° - E	南東壁直交	3%	3.1m
SI-3	147° - E	南東壁直交	0%	4.5m
SI-4	144° - E	北西壁直交	0%	—
SI-6	155° - E	南東壁直交	85%	3.2m
SI-7	129° - E	南東壁直交	—	2.8m
SI-8	152° - E	煙道	100%	3.6m・11
SI-9	131° - E	南東壁直交	100%	—
SI-10	140° - E	南東壁直交	67%	6.6m・41
SI-11	137° - E	南東壁直交	88%	5.1m
SI-12	132° - W	煙道	71%	3.2m・8
SI-13●	136° - E	煙道	12%	7.3m・48
SI-14	144° - E	南東壁直交	0%	6.8m
SI-15●	150° - E	南東壁直交	22%	6.7m
SI-16●	141° - E	煙道	2%	5.6m・27
SI-17	139° - E	南東壁直交	—	3.5m・10
SI-18	126° - E	煙道	62%	—
SI-19	153° - E	南東壁直交	12%	—
SI-20	125° - E	煙道	0%	3.4m・10
SI-21	142° - E	煙道	100%	—
SI-22●	139° - E	煙道	5%	6.2m・29

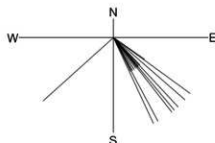


図64 竪穴住居跡主軸方位

短線：ロクロ甕の比率が低い住居

長線：ロクロ甕の比率が高い住居

注1) ●印はB-Tm以後の住居跡。

注2) ロクロ甕の比率が高い住居跡を網掛けとした。

注3) ロクロ甕の比率は表4の値による。

表4 甕の出土個体数（遺構別）

遺構名	ロク口甕	非ロク口甕	時期
SI-6	0.48	0.08	
SI-8	1.40	0.00	
SI-9	0.08	0.00	
SI-10	2.06	0.98	
SI-11	3.13	0.41	
SI-12	3.29	1.30	
SI-18	3.01	1.81	
SI-21	1.82	0.00	
SD-10	0.16	0.00	To-a 以後
SD-13	0.48	0.24	To-a 以後
SK-3	0.32	0.24	To-a 以後
SK-17	0.24	0.08	B-Tm以後
SK-10	0.08	0.08	

参考値

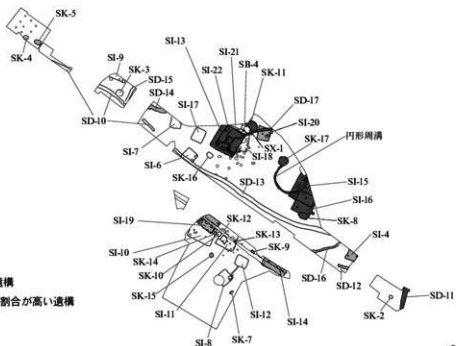
遺構外計	6.82	10.01
------	------	-------

注1) 口縁部破片全点を対象とした口縁部計測法による。

注2) 比率の高い方を網掛けとした。

注3) 甕が出土していない遺構は表示していない。

遺構名	ロク口甕	非ロク口甕	時期
SI-1	0.00	0.34	
SI-2	0.08	2.54	
SI-3	0.00	0.16	
SI-4	0.00	0.90	
SI-13	0.17	1.18	B-Tm以後
SI-14	0.00	0.82	
SI-15	0.64	2.20	B-Tm以後
SI-16	0.16	5.80	B-Tm以後
SI-19	0.08	0.57	
SI-20	0.00	0.08	
SI-22	0.24	4.03	
SK-2	0.00	0.08	
SK-5	0.00	0.17	To-a 以前
SK-7	0.00	0.17	
SK-8	0.08	0.57	B-Tm以後
SK-9	0.00	0.24	
SK-11	0.16	2.79	B-Tm以後
SK-13	0.16	0.24	
SK-14	0.00	0.08	
SK-15	0.16	0.49	To-a 以後
SD-11	0.00	0.48	B-Tm以後
SD-12	0.00	0.08	
SD-14	0.24	0.32	
SD-16	0.00	0.24	
SD-17	0.08	0.16	B-Tm以後



■ B-Tm以降の遺構  
 ■ 非ロク口甕の割合が高い遺構

図65 平安時代の遺構配置

表5 上野遺跡における土師器・須恵器の比率

## a) 全破片数を集計

	破片点数	比率
土師器	8,433	95.5%
須恵器	401	4.5%
合計	8,834	100.0%

## b) 口縁部計測法で集計

	個体数	比率
土師器	122.85	95.9%
須恵器	5.26	4.1%
合計	128.11	100.0%

すべての口縁部破片を対象

## c) 口縁部計測法で集計

	個体数	比率
土師器	48.83	95.1%
須恵器	2.53	4.9%
合計	51.36	100.0%

残存度1/6以上の口縁部破片を対象

表6 他遺跡における土師器・須恵器の比率(破片数)

## a) 山元(1)遺跡(県395集)

	破片点数	比率
土師器	22,735	93.9%
須恵器	1,476	6.1%
合計	24,211	100.0%

## b) 高屋敷館遺跡(県243集)

	破片点数	比率
土師器	10,740	93.6%
須恵器	730	6.4%
合計	11,470	100.0%

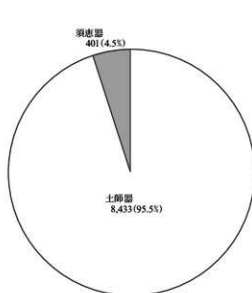
## c) 新田(1)遺跡(県472集)

	破片点数	比率
土師器	22,477	98.4%
須恵器	372	1.6%
合計	22,849	100.0%

表7 上野遺跡における平安時代土器の器種組成

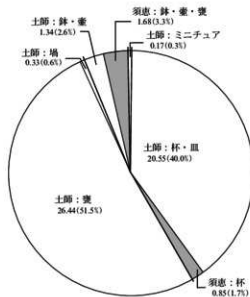
口縁残存度1/6の個体を対象に口縁部計測法で算出

	器種	個体数(比率)		個体数(比率)
食膳具	土師：杯・皿	内黒	18.71(36.4%)	21.40(41.7%)
			20.55(40.0%)	
	須恵：杯	0.85(1.7%)		
煮炊具	土師：甕	26.44(51.5%)		26.77(52.1%)
	土師：埴	0.33(0.6%)		
	土師：鉢・壺	1.34(2.6%)		
貯蔵具	須恵：鉢・壺・甕	1.68(3.3%)		3.02(5.9%)
	土師：鉢・壺・甕	1.68(3.3%)		
	土師：ミニチュア	0.17(0.3%)		
計		51.36(100.0%)		



グラフ1

上野遺跡の土師器・須恵器比率(個体数 8,834)



グラフ2

平安時代土器の器種組成(個体数 51.36)

遺跡で第511号建物跡の外周溝から、生漆の容器とされる土師器が出土している（青森県教育委員会2003）。また、SI-10で出土した墨書の認められる土師器杯（図18-3）の外面には光沢のある黒色物質が付着しており、これも漆の可能性がある。

赤色顔料が付着した杯（図52-8） SK-8で出土した須恵器杯の内面には、口縁部から底部まで赤色顔料が付着していた。付着部が内面のみであることから、当該土器に対する塗彩ではなく、他の道具に塗彩する際のパレットとして利用されたと考えている。漆が含まれているかどうかは不明である。

**埴状土製品**（図39-3） SI-16では板状に整形された焼成粘土が出土している。類似品の出土例が少なく用途も不明のため、現時点では埴状土製品としておく。また、図示はできなかったがSI-13覆土出土資料の中にも二次被熱した焼成粘土がある。胎土が共通しておりSI-16出土例と同様の製品と考えられるが、こちらは板状ではなく三角柱状を呈す。板状に整形されたものとしては、山元(2)遺跡第51・72号住居跡に類例がある（青森県教育委員会1995）。

**緑軸陶器**（図36-1） SI-15のPit1から、緑軸陶器深碗の破片が1点出土した。1辺が2cmに満たない小片で、破損後に周囲を整形している。京都国立博物館の尾野善裕氏に、10世紀中葉（950年前後）の東濃産という鑑定を頂いた。青森県内の緑軸陶器出土遺跡は、本遺跡が4例目となる（表8）。本遺跡の緑軸陶器は、土師器片や鉄製の刀子とともにSI-15のPit1覆土中位で出土している。同ピットは竪穴住居跡の中央付近に位置し、ロームブロックを含む黒褐色土で埋め戻されている。柱穴と考えるには床面中央に寄りすぎており、機能は不明である。SI-15床面では生産年代がB-Tm降下後の10世紀中葉と推定される五所川原産の須恵器（図37-18ほか）が出土しており、緑軸陶器の推定年代とは調和的である。緑軸陶器破片の周囲には、3辺に丁寧な研磨が認められる。このように破片の周囲を整形した緑軸陶器は、生産遺跡において「研磨陶片」とよばれる資料の出土が知られてはいるものの（古代の土器研究会編2003）、消費遺跡では出土しておらず、本遺跡例の用途も不明である。本県の緑軸陶器出土遺跡が4遺跡ということを考えれば、緑軸陶器自体は当時の蝦夷社会において相当の「貴重品」として扱われていたことが推定できる。このように貴重な物品を破片化するという行為は、地域は隔たっているが9～12世紀の北部九州において墳墓に副葬される輸入陶磁器や金属製品で見られるという（狭川1993）。本遺跡例は墓地ではなく住居跡からの出土であるが、埋め戻されたピットの中から刀子などとともに出土していることを考慮すれば、単なる混入ではなく何らかの祭祀的な要素を感じさせる。時期は下がるが、黒石市高館遺跡の第20号住居跡ではカマド焚口部のピットから12世紀代と推定される青白磁の破片が出土しており、「貴重品」を用いた住居内祭祀が本地域で連続する様子も窺える（青森県教育委員会1978、木村1998）。なお、本遺跡出土緑軸陶器の生産地である東海地方と津軽地域を関連付ける遺物としては灰軸陶器が挙げられ、平川市（旧平賀町）旧大光寺城(2)遺跡（平賀町教育委員会1988、同書第9図）や、青森市（旧浪岡町）高屋敷館遺跡で出土している（青森県教育委員会2005、同書図40-33、蛍光X線分析結果は瀬戸・猿投窯産の可能性を示す）。

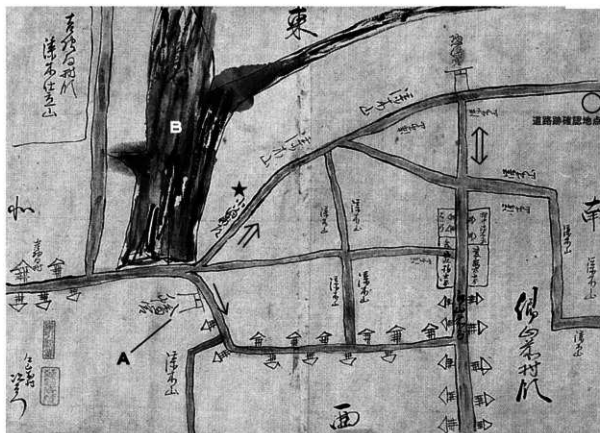
表8 青森県緑軸陶器出土遺跡

遺跡名	所在地	調査担当機関	内容
二十平(1)	上北部野辺地町字二十平	野辺地町教育委員会	碗1点・近江産・10c前半代
平畑(1)	三沢市字平畑	三沢市教育委員会	皿ほか23点・京都(備)産・10c初頭頃
新田(1)	青森市大字新田字忍	青森市教育委員会	木村(2008)による
上野	青森市浪岡大字樺沢字村元	県埋蔵文化財調査センター	深碗1点・東海(東濃)産・10c中葉

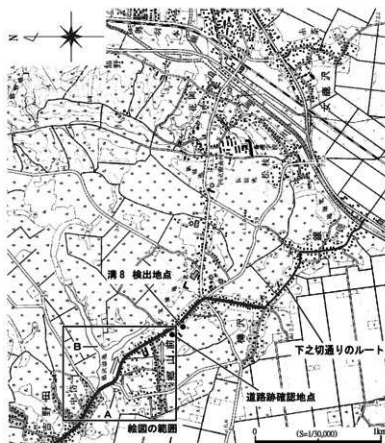
#### (4) 道路(街道)跡について

I・J区では、地面が叩き締められたように硬化する部分が37mにわたって直線的に検出された。この硬化面は、通常の生活面としてはあまりに硬化が進んでおり、硬化面脇には自然堆積によって埋没した溝跡が検出されたことから、側溝を伴う道路跡と考えられた。側溝の出土遺物で最も新しいものは、18～19世紀の所産である肥前系陶器の徳利(図63-1)で、江戸時代の遺物はこの1点である。道路跡硬化面の上部に堆積した黒褐色土からは、明治時代以降の陶磁器やガラス片が出土しており、側溝の一部は硬化面上に黒褐色土が堆積した後に掘り直されていることも判明した。側溝の出土遺物が陶器1点のため、これから年代を推定することは困難だが、近代には古い段階の側溝が埋まり切っていたものと考えられるため、近世に遡る道路跡と推定される。上野遺跡の所在する大字郷山前および樽沢地区には、近世弘前藩の公道である「下之切通り(小泊道)」とよばれる街道跡が通っていたことが知られている。図66-aは江戸時代末期の嘉永5年(1852年)以降に成立したと考えられる『郷山前村漆山絵図』である。図66-bはaとできるだけ方位を合わせるように配置した発掘調査地付近の地形図で、両者に描き加えた記号は同一の場所であることを示している。すなわち、Aで示した神社の東には、Bで示した溜池が位置し、A地点では⇒と→で示した道が東西に分岐する。⇒の道はa図では「小泊街道」と表記(★印の部分)された「下之切通り」で、溜池沿いに南東へ向かう道筋は現在県道になっている。→の道はA地点から分岐して南西に向かい、その後郷山前集落の中心に向けて南下する。⇨の道は郷山前集落を東西に横切る道である。これらから、少なくとも⇒・→・⇨で示した3本の道は、a・b両図で一致している。また、b図上には上野遺跡の発掘調査で道路跡または側溝と考えられる溝跡が確認された地点を●印で示した。これらの場所は⇨で示した東西方向の道の南側に位置し、今回道路跡を検出した地点は、a図右上隅に相当すると考えられる。以上から、「下之切通り」は県道五所川原浪岡線と重なっていると考えられ、県道沿いで検出された江戸時代と考えられる道路跡は「下之切通り」で、道路跡脇の溝跡は同街道の側溝である蓋然性が高い。なお、今回の発掘調査で街道側溝とした溝跡と類似したものが、I区南端から南に120m隔たった一次調査のトレンチ19で溝8として長さ5mにわたって検出されている(図66-c)。溝8は今回調査した街道側溝と同様に出土遺物がなく、報告時には時期判断がされていない。自然堆積によって埋没していることや、幅50cm、深さ40cmと同規模であることから、両者が同じ道路の側溝である可能性は高い。『郷山前村漆山絵図』は、街道沿いが集落ではなく漆の栽培地であったことを記しており、発掘調査地内で江戸時代の遺物が少ないことはそのためと考えられる。「下之切通り」は弘前藩の公道のうちで大道に次ぐ小道に位置づけられており、発掘調査地付近の道幅は一間半～二間(3m程度)と考えられている(青森県教育委員会1984)。

青森県内における近世の街道跡は、西津軽郡深浦町に所在する産野遺跡で大道に位置づけられる西浜街道(羽州街道旧ルート)の検出例がある(青森県教育委員会2003)。その路面幅は最大で4.5m、側溝は開口部の最大幅3.5m、底面の最大幅1.2m、深さは1mを測り、今回検出された「下之切通り」より規模が大きい。



a) 郷山前村漆山絵図 (弘前市立博物館蔵)



c) 2006年調査 溝8  
(矢印部分)

b) 発掘調査地付近地形図

図66 下之切通り関連図

参考文献一覧

- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
- 狭川真一 1993 「墳墓にみる供献形態の変遷とその意味—北部九州を中心として—」『貿易陶磁研究』No.13  
貿易陶磁研究会
- 木村 高 1998 「青森県域における在り土器の編年について—津軽地方・11世紀中葉から12世紀前半—」  
『東北地方の在り土器・陶磁器』Ⅱ 東北中世考古学会第4回研究大会資料
- 尾野善裕 2003 「古代の尾張・美濃における緑軸陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の緑軸陶器・生産地の様相を中心—』古代の土器研究会第7回シンポジウム
- 古代の土器研究会編 2003 「全国緑軸陶器生産関連遺跡出土遺物集成」同上
- 岩井浩人 2008 「津軽地域における古代土器食器具の変遷—9世紀から11世紀を中心—」『青山考古』第24号  
青山考古学会
- 木村淳一 2008 「日本海城における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—「東北地方（米代川流域—津軽）」  
『石川県埋蔵文化財情報』第19号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 岩井浩人 2009 「津軽南域における古代の土器様相」『扶桑』田村晃一先生喜寿記念論文集
- 高橋照彦・長尾正義 2010（3月刊行予定）「三沢市平畑(1)遺跡から出土した緑軸陶器について」『研究紀要』第15号  
青森県埋蔵文化財調査センター
- 愛知県陶磁資料館・五島美術館編 1998 『日本の三彩と緑軸—天平に咲いた華—』五島美術館展覧会図録 No.121
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 浪岡町 2000 『浪岡町史』第1巻
- 青森県 2002 『青森県史』別編 三内丸山遺跡
- 浪岡町 2002 『浪岡町史』別巻1
- 青森県 2005 『青森県史』資料編 考古3 弥生～古代
- 青森県 2008 『青森県史』資料編 古代2 出土文字資料
- 青森県教育委員会 1978 『高館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第40集
- 平賀町教育委員会 1988 『旧大光寺城(2)遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第17集
- 青森県教育委員会 1984 『下之切通り（小泊道）』青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1994 『山元(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
- 青森県教育委員会 1995 『山元(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
- 青森県教育委員会 1998 『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 2003 『尾上山遺跡・蘆野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第347集
- 青森県教育委員会 2003 『野尻(1)遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第351集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 『細谷地遺跡発掘調査報告書 第4・5次調査』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集
- 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器窯跡跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 青森県教育委員会 2006 『湯野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第412集
- 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第393集
- 青森県教育委員会 2005 『山元(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第395集
- 野辺地町教育委員会 2007 『二十平(1)遺跡』野辺地町文化財調査報告書第15集
- 青森県教育委員会 2008 『上野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第445集
- 青森県教育委員会 2008 『寺屋敷平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第450集
- 青森県教育委員会 2009 『新田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
- 青森県教育委員会 2009 『中平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第474集



## 土師器・須恵器(1)

図番号	出土場所	層位	種別	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考	残存度	写真 図版	整理 番号
7	1	SI-1	覆土	土師 甕	—	—	—	外：口縁コナデ、ヘラナデ。内：ヘラナデ、輪積痕。	口：1/6未満	—	2
7	2	SI-1	5層	土師 甕	(20.0)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。輪積痕。	口：1/6未満	—	1
7	3	SI-1	覆土	土師 甕	—	(10.0)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ヘラナデ。	底：4/6	—	4
7	4	SI-1	覆土	土師 甕	—	(9.0)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：砂底。	底：3/6	38	3
8	1	SI-3	覆土、風方	土師 甕	(8.2)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	12
8	2	SI-2	下層	土師 坏	(11.9)	(5.2)	5.0	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：1/6、底：3/6	37	9
8	3	SI-2	上層	土師 坏	—	5.4	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	底：完存	—	11
8	4	SI-2	床面	須恵 坏	—	5.0	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。火だすき。内面スス付着。	底：完存	—	10
8	6	SI-2	カマド 周辺	土師 甕	(14.6)	6.6	12.9	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ナデ。	口：2/6、底：完存	33	6
8	7	SI-2	上層、8層	土師 甕	(12.2)	6.6	14.8	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ケズリ。輪積痕。	口：3/6、底：完存	33	5
9	8	SI-2	上層、 カマド	土師 甕	(20.0)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。輪積痕。	口：1/6未満	—	8
9	9	SI-2	カマド 周辺	土師 甕	(21.4)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6	—	7
10	1	SI-4	覆土	土師 坏	(12.0)	—	—	内・外：ナデ。二次被熱。雨着物あり。増焼やとりへように金属生産に使われたものか。	口：1/6	37	14
10	2	SI-4	7層	土師 甕	(13.6)	(7.8)	14.5	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ナデ。	口：3/6、底：1/6	33	13
10	3	SI-4	5層	土師 甕	(18.0)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ナデ。	口：1/6未満	—	16
10	4	SI-4	1層	土師 甕	(22.0)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラナデ。内：ヘラナデ。輪積痕。	口：1/6未満	—	15
12	1	SI-6 Pit1・2	1、2層	土師 高台付 坏	(18.0)	8.4	(8.5)	内・外：ロクロナデ。内：ミガキ一黒色処理。底：糸切り後高台貼付。a・bは直接接合しない。	口：1/6未満、 底：完存	37 30	19 18
12	2	SI-6 Pit1・2	2層	土師 甕	(18.0)	—	—	外：口縁コナデ、ナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	17
12	3	SI-6 Pit1・2	1層	土師 甕	(20.2)	—	—	内・外：ロクロナデ。外：ケズリ。	口：1/6未満	33	213
12	4	SD-13	1層	土師 坏	(13.2)	(6.0)	5.0	内・外：ロクロナデ。	口：2/6、 底：1/6未満	—	194
12	5	SD-13	1層	土師 坏	(11.8)	4.8	5.5	内・外：ロクロナデ。内：ミガキ一黒色処理。底：糸切り。	口：2/6、底：完存	30	193
12	6	SD-13	1層	土師 坏	(13.4)	(6.3)	5.4	内面スス付着。	口：1/6、底：2/6	—	195
12	7	SD-13	1層	須恵 甕	—	8.2	—	内・外：ロクロナデ。底：回転ヘラ切り。遺構外壁Y-90(5層)と接合。	底：5/6	38	196
12	8	SD-13	1層	土師 甕	(19.2)	—	—	外：ロクロナデ、ケズリ。内：ロクロナデ、ヘラナデ。	口：1/6未満	—	192
12	9	SD-13	1層	土師 甕	(23.8)	—	—	外：口縁コナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。輪積痕。	口：1/6未満	—	191
15	1	SI-8	下層	須恵 坏	(14.9)	(7.2)	5.7	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。酸化縮焼成。	口：1/6未満、 底：1/6未満	37	25
15	2	SI-8	床面	土師 坏	(14.9)	—	—	内・外：ロクロナデ。SI-12(皿X-82・中層)と接合。	口：1/6	—	24
15	3	SI-8	下層	土師 高台付 坏	(14.5)	8.4	7.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り後、高台貼付。	口：2/6、底：完存	30	23
15	4	SI-8	下層	土師 坏	—	5.5	—	内・外：ロクロナデ。内：ミガキ一黒色処理。底：糸切り。	底：完存	—	26
15	5	SI-8	下層	土師 甕	(13.8)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：2/6	—	20
15	6	SI-8	カマド3層	土師 甕	(24.0)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。内：ロクロナデ。	口：1/6未満	—	21
15	7	SI-8	カマド袖	土師 甕	(22.0)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。内：ロクロナデ。	口：4/6	33	27
15	8	SI-8	カマド5層	土師 甕	(28.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6未満	—	22
16	10	SI-9	下層	土師 坏	12.0	6.0	5.8	内・外：ロクロナデ。内：ミガキ一黒色処理。底：糸切り。	口：4/6、底：完存	30	29
16	11	SI-9	下層	土師 甕	—	(6.6)	—	外：ヘラケズリ。内：ナデ。底：ナデ。	底：2/6	—	28
18	1	SI-10 カマド	カマド支脚	土師 甕	—	8.4	—	外：ヘラケズリ。内：ナデ。底：ナデ。	底：5/6	—	32
18	2	SI-10	カマド周辺 床面、下層	土師 坏	(14.0)	5.8	5.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：2/6、底：完存	30	36

## 土師器・須恵器(2)

図番号	出土場所	層位	種別	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考	残存度	写真 図番	整理 番号
18 3	SI-10	下層	土師	坏	(13.3)	5.5	5.9	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 外面黒書および係付着？内面スス付着。 内・外：ロクロナデ。 内：口縁のみミガキ→全体を黒色処理。	口：3/6、底：完存	30 40	35
18 4	SI-10	床面	土師	短頸壺	(12.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6	—	32 34
18 5	SI-10	下層	土師	甕	(15.1)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：3/6	—	34 33
18 6	SI-10	周溝・床直	土師	甕	19.6	10.0	31.3	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。底：ナデ。	口：4/6、底：4/6	—	33 30
18 7	SI-10 カマド	カマド周辺 床面	土師	甕	(21.6)	—	—	外：タタキ→ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ、ヘラナデ。	口：2/6	—	33 31
19 1	SI-19	下層	土師	甕	(11.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	118
19 2	SI-19	下層	土師	甕	(10.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラナデ。内：ナデ。	口：1/6	—	119
19 3	SI-19	下層	土師	甕	(16.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	120
20 4	SI-11	PitI 埋設土師	土師	壺	—	(5.4)	—	内・外：ロクロナデ。内：黒色処理。 底：糸切り。底部へラ記号。埋設土師本体。	底：1/6	—	32 40
20 5	SI-11	PitI 埋設土師	須恵	甕	—	—	—	外：タタキ。内：タタキ→ナデ。 埋設土師蓋。SI-12 (図25-15) と接合。 五所川原産ではない。	—	—	32 45
21 1	SI-11	床面	土師	坏	(12.5)	5.4	5.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内外面スス付着。	口：2/6、底：3/6	—	30 42
21 2	SI-11	甕方、床面、 カマド	土師	坏	(13.4)	6.0	5.2	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：2/6、底：完存	—	30 43
21 3	SI-11	甕面、カマド	土師	坏	(16.4)	—	—	内・外：ロクロナデ。 内：ミガキ→黒色処理。	口：1/6	—	44
21 6	SI-11 カマド周辺	床面	土師	坏	—	—	—	内面：ミガキ→黒色処理。 内面に精製漆の痕跡付着。	—	—	37 赤23
22 7	SI-11 カマド周辺	床面	土師	甕	(16.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6	—	35 40
22 8	SI-11 Pit2	1層	土師	甕	(30.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積直。	口：1/6	—	39
22 9	SI-11	床面、カマド	土師	甕	20.0	(8.8)	31.3	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。底：ナデ。	口：5/6、 底：1/6未満	—	34 46
22 10	SI-11	床面	土師	甕	(22.4)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。	口：5/6	—	34 37
22 11	SI-11	床面	土師	埴	(35.0)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ→ナデ。 SI-12 (図25-17) と同一個体。	口：2/6	—	32 38
24 1	SI-12	下層	土師	坏	(12.9)	5.5	4.4	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面調整粗雑で工具痕残る段状のロクロ目。 内外面スス付着。	口：3/6、底：完存	—	30 59
24 2	SI-12	中層、下層	土師	坏	13.2	5.9	5.2	内・外：ロクロナデ。底：ケズリ。 内面スス付着。	口：5/6、底：完存	—	30 61
24 3	SI-12	下層	土師	坏	13.5	5.5	5.8	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内外面黒色処理。口縁打欠きか。 内面スス付着。	口：4/6、底：完存	—	30 60
24 4	SI-12	中層	土師	坏	(12.7)	—	—	内・外：ロクロナデ。内：ミガキ→黒色処理。	口：1/6	—	62
24 5	SI-12	中層	土師	甕	(13.6)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 口縁内面に沈殿状の段。	口：2/6	—	56
24 6	SI-12	中層、下層	土師	甕	—	(9.2)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ナデ。	底：2/6	—	47
24 7	SI-12	中層、下層	土師	甕	—	7.3	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ナデ。	底：完存	—	48
24 8	SI-12	中層	土師	甕	—	(7.8)	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	底：1/6	—	58
24 9	SI-12	中層、下層	土師	甕	(22.2)	(12.0)	32.5	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。	口：2/6、底：1/6	—	35 50
24 10	SI-12	中層、下層	土師	甕	(19.2)	7.0	31.0	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。底：ナデ。	口：2/6、底：完存	—	34 49
25 11	SI-12	中層	土師	甕	(23.4)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ、ヘラナデ。	口：2/6	—	34 53
25 12	SI-12 カマド	煙道覆土	土師	甕	(22.0)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ、ヘラナデ。腹面にへラ記号。	口：1/6	—	34 50
25 13	SI-12	中層	土師	甕	(13.0)	7.2	14.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：1/6、底：完存	—	35 51
25 14	SI-12	中層	土師	壺	(14.0)	—	—	外：ロクロナデ。 下半は細かいヘラナデ→ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。 内外二次被熱によるハジケ。	口：1/6	—	32 55
25 15	SI-12	中層	須恵	甕	—	—	—	外：タタキ。内：タタキ→ナデ。 SI-11 (図20-5) と接合。五所川原産ではない。	—	—	32 63

## 土師器・須恵器(3)

図番	出土場所	層位	種別	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考	残存度	写真 図版	整理 番号	
25	16	SI-12	中層地	土師 製塩 土器	—	(15.0)	—	外：ナデ。指頭圧痕。内：ナデ。 底：木目状圧痕。 輪積痕。色調は明赤褐色。	底：1/6未満	32	52	
25	17	SI-12	中層	土師	塀	(35.4)	—	外：ロクロナデ→ヘラケズリ。 内：ロクロナデ→ナデ。 SI-11 (図22-11) と同一個体。	口：1/6未満	—	57	
28	1	SI-13	2層	須恵	坏	(13.0)	—	内・外：ロクロナデ。火だすき。ヘラ記号。 酸化焙焼成。	口：1/6	40	71	
28	2	SI-13	J層	須恵	鉢	(14.6)	—	内・外：ロクロナデ。産地・時期不明。	口：1/6未満	—	73	
28	3	SI-13	カマド付近	土師	鉢	7.2	5.6	5.6	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面から打ち欠きによる穿孔。 外面黒炭残存。酸化焙焼成(硬質)。 須恵器鉢の写しか？	口：5/6, 底：完存	32	64
28	4	SI-13	硬化面下	土師	甕	(10.2)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。口縁肥厚。	口：1/6未満	—	69	
28	5	SI-13	下層	土師	甕	(12.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6	—	68	
28	6	SI-13	覆土	土師	甕	(13.6)	—	外：口縁ヨコナデ。ナデ。内：ナデ。	口：1/6	—	66	
28	7	SI-13	床粘土直上	土師	甕	(14.4)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6	—	67	
28	8	SI-13	床粘土直上	土師	甕	(24.8)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。SK-11 (2層) と接合。	口：2/6	—	162	
28	9	SI-13	上層地	土師	甕	(21.4)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。口唇面取り。輪積痕。	口：2/6	35	65	
28	10	SI-13	下層	土師	甕	—	—	内・外：ナデ。把手部：ヘラケズリ。	—	32	70	
30	5	SI-22	床面	土師	坏	(12.3)	5.2	5.1	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 SI-16 (床下Pt5) と接合。酸化焙焼成(硬質)。	口：1/6, 底：5/6	37	107
30	6	SI-22	床面	須恵	坏	(13.2)	4.3	4.3	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 火だすき。SI-13Pt2 と接合。	口：1/6, 底：完存	30	72
31	7	SI-22	カマド崩落土	土師	甕	(13.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積痕。	口：1/6	—	138	
31	8	SI-22	カマド崩落土	土師	甕	16.2	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積痕。	口：5/6	37	133	
31	9	SI-22	カマド付近	土師	甕	(21.6)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積痕。SK-11 (底面) と接合。	口：2/6	37	134	
31	10	SI-22	カマド崩落土 他	土師	甕	(20.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積痕。SK-11 (2層) と接合。	口：1/6	38	136	
31	11	SI-22	カマド崩落土 他	土師	甕	(21.0)	9.1	29.0	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。底：砂底。	口：1/6, 底：完存	36	132
31	12	SI-22	カマド付近 他	土師	甕	(23.8)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 輪積痕。SI-13 (床面) と接合。	口：1/6	38	137	
31	13	SI-22	火床面	土師	甕	—	10.8	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：砂底。 内底面に粘土が厚く付着。	底：完存	—	140
31	14	SI-22	床直地	土師	坏	(14.0)	5.0	6.7	内・外：ロクロナデ。底：糸切り→ケズリ。 酸化焙焼成(硬質)。底面はSK-11 (2層) で出土。	口：2/6, 底：完存	30	141
31	15	SI-22 カマド	カマド崩落土	須恵	壺	(13.0)	—	—	ロクロナデ。	口：1/6未満	—	142
34	1	SI-14 Pt5	覆土	土師	甕	(13.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ナデ。内：ナデ。	口：1/6未満	—	76	
34	2	SI-14	下層	土師	甕	(14.4)	—	内：ナデ。	口：1/6	—	74	
34	3	SI-14	下層、 Pt5覆土	土師	甕	(15.2)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積痕。	口：1/6未満	—	75	
36	5	SI-15	下層	須恵	坏	(13.0)	4.8	5.3	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 火だすき。ヘラ記号。二次被熱によるハジケ。 内面が不仕着。	口：1/6, 底：完存	30 40	83
36	6	SI-15	下層	須恵	坏	(12.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。火だすき。ヘラ記号。 断面色調：褐色。	口：1/6未満	—	84
36	7	SI-15	床面、覆土	須恵	坏	—	4.5	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。火だすき。	底：完存	—	89
36	8	SI-15 Pt1	覆土中位	土師	坏	—	5.4	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	底：完存	—	85
36	9	SI-15 Pt2	1層	土師	坏	—	(5.0)	—	内・外：ロクロナデ。内：黒色処理。 底：糸切り。	底：2/6	—	86
37	10	SI-15	下層	土師	甕	(12.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6	—	80	
37	11	SI-15	下層	土師	甕	(10.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。内：ナデ。	口：1/6	—	79	
37	12	SI-15	上層	土師	甕	(21.4)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 SI-16 (7層) と接合しており、 本来の輪積はSI-16。	口：1/6未満	—	104	

## 土師器・須恵器(4)

図番号	出土場所	層位	種別	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考	残存度	写真 図版	整理 番号
37	13	SI-15 Pa1	覆土中位	土師 甕	(17.0)	—	—	内・外：口縁ヨコナデ。	口：1/6未満	—	81
37	14	SI-15 Pa1	覆土中位	土師 甕	(24.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ、輪積痕。	口：1/6未満	—	82
37	15	SI-15	上層	土師 甕	(24.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 SI-16(床面)と接合しており、 本来の輪積痕はSI-16。	口：1/6未満	—	102
37	16	SI-15	下層	土師 甕	(28.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	78
37	17	SI-15	床面直上	土師 甕	—	(7.2)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：砂底。	底：2/6	38	77
37	18	SI-15	下層	須恵 甕	20.2	—	—	胴部：タタキーカキ目。外：タタキ。 内：胴部縦方向のヘラナデ、ナデ。 五所川原産・B-Tm降下後。	口：完存	32	87
37	19	SI-15 床面溝	床面	須恵 壺	(12.0)	—	—	ロクロナデ。五所川原産・B-Tm降下後。	口：1/6	38	90
37	20	SI-15	下層	須恵 壺	(7.0)	—	—	ロクロナデ。五所川原産・B-Tm降下後。	口：1/6	38	92
37	21	SI-15	下層	須恵 壺	—	(12.0)	—	外：ロクロナデ→ヘラケズリ。内：ロクロナデ。 外底：ヘラケズリ。 五所川原産・B-Tm降下後か。	底：1/6	—	88
39	6	SI-16	7層	土師 皿	(13.5)	4.5	3.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り一磨減。 内底に重ね焼き時の変色。酸化焙焼成(硬質)。	口：1/6未満。 底：完存	31	106
39	7	SI-16 カマド	上面	土師 甕	(18.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。内：ナデ。	口：1/6未満	—	103
40	8	SI-16	7層	土師 甕	(14.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	105
40	9	SI-16	2層	土師 甕	(18.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6	—	100
40	10	SI-16	7層	土師 甕	(10.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ、SI-15(上層)と接合。	口：1/6	—	97
40	11	SI-16 カマド、カマ ド付近床面	土師 甕	甕	14.5	(7.9)	14.9	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。底：砂底。	口：5/6。底：1/6	36	94
40	12	SI-16	12層	土師 甕	24.2	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 平面楕円形。壁厚19.6cm。輪積痕。	口：5/6	35	93
40	13	SI-16	7層	土師 甕	(21.8)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6	—	101
40	14	SI-16 カマド左脇	床面他	土師 甕	(20.8)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：2/6	38	99
40	15	SI-16	袖下、中層	土師 甕	(20.2)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。口縁肥厚。	口：1/6	35	98
40	16	SI-16	床面他	土師 甕	—	8.2	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 底：ナデ。	底：完存	—	95
40	17	SI-16	中層他	土師 甕	—	7.2	—	外：ヘラケズリ。内：ナデ、ヘラナデ。 底：砂底。SI-15(下層)と接合。	底：完存	—	96
42	1	SI-18	カマド支脚	土師 坏	4.0	5.2	6.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：5/6。底：完存	31	116
42	2	SI-18	カマド支脚	土師 坏	12.6	5.7	4.8	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口・底：完存	31	115
42	3	SI-18	カマド支脚	土師 甕	14.9	(8.6)	13.5	内・外：ロクロナデ。底部：糸切り。 全体に蒸熟。	口：3/6。底：2/6	36	109
42	4	SI-18	カマド支脚	土師 甕	12.7	6.2	10.4	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。底：ヘラケズリ。	口・底：完存	36	108
42	5	SI-18	カマド支脚	土師 甕	—	6.4	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 底：ナデ。	底：完存	—	214
43	6	SI-18	カマド	土師 坏	(14.6)	—	—	内・外：ロクロナデ。内：ミガキ→黒色処理。	口：2/6	37	117
43	7	SI-18	カマド	土師 皿	14.0	5.7	3.3	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面調整粗磨で工具痕残る段状のロクロ目。 口縁打ち欠きか。	口：4/6。底：完存	31	114
43	8	SI-18	カマド	土師 甕	23.4	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ、ヘラナデ。	口：5/6	36	110
43	9	SI-18	カマド	土師 甕	(16.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。外面胴部に段。	口：1/6	—	112
43	10	SI-18	カマド	土師 甕	—	6.0	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	底：完存	—	113
44	2	SI-20 Pa2	3層	土師 坏	12.0	4.6	5.1	内・外：ロクロナデ。外：底部付近ケズリ。 底：静止糸切り。酸化焙焼成(硬質)。 内面調整粗磨で工具痕残る段状のロクロ目。 内面スス付着。	口：5/6。底：5/6	31 40	125
44	3	SI-20	カマド支脚	土師 坏	12.4	6.1	5.8	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面調整粗磨で工具痕残る段状のロクロ目。	口・底：完存	31	124
44	4	SI-20	カマド支脚	土師 甕	—	8.1	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 底：砂底。ヘラ記号。	底：完存	40	123

## 土師器・須恵器(5)

図	番号	出土場所	層位	種別	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考	残存度	写真 図版	整理 番号
46	1	SI-21	カマド 硬化面直上	土師	皿	13.9	5.9	3.5	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面調査紐で段状のロクロ目。 口縁打ち突きか。	口：4/6。底：完存	31	129
46	2	SI-21	カマド 硬化面直上	土師	坏	14.0	5.8	4.9	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面スス付着。	口：5/6。底：完存	31	128
46	3	SI-21	カマド支脚	土師	坏	13.6	5.9	4.8	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 酸化腐蝕成（硬質）。	口：底：5/6	31	130
47	4	SI-21	カマド底土	土師	甕	(21.8)	—	—	外：ロクロナデ。ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。輪積痕。	口：1/6未満	—	127
47	5	SI-21	カマド袖	土師	甕	22.0	—	—	外：ロクロナデ。ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。ヘラナデ。	口：5/6	36	126
47	6	SI-21	カマド袖	土師	甕	21.8	—	—	外：ロクロナデ。ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。	口：5/6	36	111
48	7	D-1tr ⅢA-95	Ⅱ層	須恵	甕	—	—	—	頸部：タタキ→ヨコナデ。ヘラ記号。 酸化腐蝕成。五所川原産・B-Tm降下後か。	口：1/6未満	40	199
48	8	G-1tr	Ⅱ層	須恵	甕	—	—	—	口縁部沈着。五所川原産・B-Tm降下後か。	口：1/6未満	—	200
48	9	G-2tr	Ⅱ層	須恵	鉢	(11.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。 五所川原産・B-Tm降下後か。	口：1/6	—	201
52	1	SK-2	1層	土師	甕	(9.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ケズリ。内：ナデ。	口：1/6未満	—	143
52	2	SK-3	2層	土師	甕	—	7.2	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	底：完存	—	146
52	3	SK-3	甕土中位、 下位	土師	甕	(21.4)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6未満	38	144
52	4	SK-3	5層	土師	甕	—	(9.0)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 底：ヘラケズリ。	底：2/6	—	145
52	5	SK-5	1層	土師	甕	(10.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6	38	148
52	6	SK-5	5層	土師	甕	—	(8.0)	—	外：ロクロナデ。底部付近ケズリ。 内：ロクロナデ。ヘラナデ。 底：糸切り。	底：2/6	38	149
52	7	SK-7	1層	土師	甕	(22.0)	(5.0)	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6	38	150
52	8	SK-8	中層、上層	須恵	坏	(10.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。底糸切り。 外面底部付近にヘラ状工具の痕跡のような段。 a・bは接合しない。 内面赤色顔料付着。五所川原産ではない。	口：1/6未満	37	155
52	9	SK-8	上層	須恵	坏	(12.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。火だすき。ヘラ記号。 酸化腐蝕成。	口：1/6未満	—	157
52	10	SK-8	上層	土師	坏	(11.6)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6	—	156
52	11	SK-8	底面	土師	坏	12.6	5.0	6.4	内・外：ロクロナデ。底：糸切り→ナデ。 外面調査紐で工具痕の残るロクロ目。	口：4/6。底：完存	31	154
52	12	SK-8	上層	土師	甕	(27.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	151
52	13	SK-8	上層	土師	ミニチュア	(6.3)	1.0	—	外：ケズリ。内：ヘラナデ。底：ナデ。 a・bが上下でどう接合するかよくわからない。	口：1/6。底：3/6	37	152 153
52	17	SK-9	覆土	土師	甕	(17.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪積痕。口唇面取り。	口：1/6未満	—	159
52	18	SK-9	覆土	土師	甕	(18.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	158
52	20	SK-10	覆土	土師	甕	(26.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	160
53	1	SK-11	2層	土師	坏	13.3	5.3	4.3	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 内面調査紐で工具痕の残る段状のロクロ目。 内面スス付着。	口：5/6。底：完存	31	170
53	2	SK-11	2層	土師	坏	13.6	5.6	5.9	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：5/6。底：完存	31	169
53	3	SK-11	上層	須恵	坏	(12.6)	—	—	内・外：ロクロナデ。火だすき。ヘラ記号。	口：1/6未満	37	171
53	4	SK-11	上層	須恵	壺	(10.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。頸部：リング状突起。 ヘラ記号。E-2tr（Ⅱ層）と接合。	口：1/6	38	172
53	5	SK-11	3層、中層	土師	甕	(13.8)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ナデ。内：ヘラナデ。	口：1/6	38	173
53	6	SK-11	2層、3層、 中層	土師	甕	(21.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 SI-13（床面粘土直上）と接合。	口：2/6	—	164
53	7	SK-11	2層	土師	甕	(14.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。黒色処理。	口：1/6未満	—	168
53	8	SK-11	2層	土師	甕	(26.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 SI-13カマド粘土。粘土下と接合。	口：2/6	—	165
53	9	SK-11	3層	土師	甕	(22.2)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。ヘラ記号。	口：1/6	40	166
53	10	SK-11	覆土	土師	甕	(24.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ。ヘラケズリ。内：ヘラナデ。 輪積痕。SI-13（カマド付近）と接合。	口：2/6	—	135

## 土師器・須恵器(6)

図番号	出土場所	層位	種別	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	備考	残存度	写真 図版	整理 番号
53 11	SK-11	2層、3層	土師	甕	(23.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。輪横腹。	口：1/6	37	163
53 12	SK-11	上層、3層	土師	甕	—	9.4	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：ナデ。	底：完存	—	161
53 13	SK-11	2層	土師	ミニチュア	—	3.0	—	外：ケズリ。内：ケズリ。底：ナデ。	底：5/6	—	174
54 1	SK-3	2層	土師	坏	(13.7)	(6.3)	6.9	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	口：2/6、底：2/6	31	147
54 2	SK-13	覆土	土師	坏	(11.6)	(5.9)	5.3	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 二次板敷。	口：2/6、 底：1/6未満	37	178
54 3	SK-13	覆土	土師	甕	(12.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6未満	—	177
54 4	SK-13	覆土	土師	甕	(20.0)	—	—	内・外：ロクロナデ。	口：1/6未満	—	176
54 5	SK-13	覆土	土師	甕	(18.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	175
54 7	SK-15	1、2、3層	須恵	坏	(11.7)	—	—	内・外：ロクロナデ。火だすき。	口：1/6	37	183
54 8	SK-15	5層	土師	坏	12.5	5.9	5.6	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。 酸化燻焼成(硬質)。SK-14(1層)と接合。	口：4/6、底：4/6	31	179
54 9	SK-15	3層	土師	甕	—	(7.6)	—	内・外：ロクロナデ。底：糸切り。	底：3/6	—	182
54 10	SK-15	5層	須恵	壺	—	—	—	胴部：リング状突起。ロクロナデ。 外面自然釉。五所川原産。	—	—	184
54 11	SK-15	1、2、3、5層	土師	甕	(25.1)	8.0	27.3	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。底：砂底。	口：2/6、底：5/6	37	180
54 12	SK-15	3層	土師	甕	—	(9.0)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：砂底。	底：1/6	—	181
54 13	SK-17	覆土	土師	甕	—	(9.0)	—	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底：砂底。	底：1/6	38	186
54 14	SK-17	覆土	土師	甕	(22.0)	—	—	外：ロクロナデ、ヘラケズリ。 内：ロクロナデ。	口：1/6未満	38	185
58 1	SD-10 (D-1tr)	上層、下層	土師	短頸壺	(9.8)	—	—	内・外：ロクロナデ。 内：部分的なミガキ→黒色処理。	口：1/6未満	38	187
58 2	SD-11 (G-2tr)	1層	土師	皿	(13.2)	(4.9)	3.8	内・外：ロクロナデ。底：糸切り→磨減。 底部が柱状高台のように突出。内面スス付着。	口：1/6、底：2/6	37	188
58 3	SD-11 (G-2tr)	1層	土師	甕	(11.2)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	189
58 4	SD-11 (G-2tr)	1層	須恵	甕	(17.4)	—	—	ロクロナデ。五所川原産・B-Tm降下後。	口：1/6未満	—	190
58 5	SD-14	2層	須恵	坏	(12.9)	—	—	内・外：ロクロナデ。ヘラ記号。火だすき。 酸化燻焼成。	口：1/6未満	40	198
58 6	SD-14	2層	土師	甕	(16.0)	—	—	外：口縁ヨコナデ、ヘラケズリ。 内：ヘラナデ。	口：1/6未満	—	197

## 銭貨

図番号	遺構名	グリッド	層位	種別	直径 cm	厚さ cm	重量 g	備考	写真 図版	整理 番号
62 13	遺構外	G-2tr	Ⅱ層	銅銭	2.4	0.1	2.0	寛永通宝(新寛永)	—	赤-8
62 14	遺構外	D-2tr	Ⅱ層	銅銭	2.4	0.2	2.6	寛永通宝(新寛永)	—	赤-10
62 15	遺構外	C-1tr	Ⅱ層	銅銭	2.4	0.1	2.1	寛永通宝(新寛永)	—	赤-11
62 16	遺構外	D-1tr	Ⅱ層	銅銭	2.4	0.1	2.0	寛永通宝(新寛永)	—	赤-9
62 17	遺構外	IVE-102	Ⅱ層	銅銭	2.5	0.1	2.8	寛永通宝(新寛永)	—	赤-7

## 鉄製品

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考	写真 図版	整理 番号
22	12	SI-11	—	床面	刀子	a (7.9) b (3.0) c (4.3)	a (2.1) b (1.7) c (1.1)	a (1.6) b (0.7) c (0.5)	平安。破片になったものも同一 個体と思われる。	38	鉄-2
30	1	SI-22	—	床直	刀子	(9.1)	(1.2)	(0.6)	平安。複数に分かれているが同 一個体と思われる。	38	鉄-9
36	2	SI-15	Pit1	覆土	刀子	(13.6)	(1.3)	(0.5)	平安。	38	鉄-8
36	3	SI-15	Pit2	1層	棒状	(9.4)	(0.9)	(0.6)	平安。	38	鉄-7
36	4	SI-15	—	上層	刀子	a (5.9) b (2.3)	a (1.8) b (2.4)	a (0.4) b (0.4)	平安。2つに分かれているが同 一個体と思われる。	38	鉄-3
39	1	SI-16	—	床面	棒状	(4.7)	(0.9)	(0.5)	平安。	38	鉄-6
39	2	SI-16	—	2層	鎌	(18.7)	(3.2)	(0.7)	平安。	38	鉄-1
44	1	SI-20	—	確認面	刀子	(5.2)	(1.6)	(0.8)	平安。	38	鉄-10
52	15	SK-8	—	上層	刀子	(3.0)	(1.6)	(0.3)	平安。	38	鉄-4
52	19	SK-10	—	覆土	不明	(2.2)	(2.5)	(0.8)	平安。円筒状。	38	鉄-5

## 土製品・石製品・陶器・その他

図	番号	遺構名	地区	層位	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考	写真 図版	整理 番号
15	9	SI-8	—	カマド3層	粘土塊	(2.3)	(2.2)	(1.7)	4.2	平安。焼成粘土塊。 全部で3点出土しており、合計9.1g。	—	赤14
28	13	SI-13	ⅢV-90	上層	土製品	2.1	2.1	2.1	8.0	平安。土玉。孔なし。外面ナデ。	39	赤22
28	14	SI-13	—	覆土	碁石	2.4	2.0	0.8	5.5	平安。玉髓。白色。	39	磯103
28	15	SI-13	—	3層	碁石	1.9	1.4	0.7	2.4	平安。石英。白色。	39	赤21
30	2	SI-22	—	粘土散乱部	鉄滓	(9.3)	(9.3)	(4.7)	990	平安。碗形鍛冶滓。	39	赤18
30	3	SI-22	ⅢU-89	覆土	碁石	3.6	3.4	1.8	27.2	平安。頁岩。黒色。	39	磯106
30	4	SI-22	—	床面	自然礫	6.3	3.6	2.7	58.7	平安。玉髓。 人急的な加工は認められない。	39	磯108
36	1	SI-15	Pit1	覆土中位	緑釉陶器	(1.9)	(2.3)	0.4	—	深碗の腰の部分。 破片の周囲を研磨整形。 10世紀中葉。東海(美濃)産。	37	特2
39	3	SI-16	—	6層	焼成粘土	(6.3)	(10.3)	(3.0)	132	平安。板状に整形された粘土塊。 薄状土製品。側面に面取りを施す。	39	赤25
39	5	SI-16	カマド左脇	床直	羽口	(9.0)	6.2	5.7	—	平安。粘土・ガラス質滓付着。 還元による変色部あり。鍛冶用。	39	特3
48	10	遺構外	ⅢU-89	—	鉄滓	(3.4)	(2.5)	0.9	20	平安。流動滓。	—	赤17
52	14	SK-8	ⅢR-83	上層	粘土塊	(4.4)	(2.0)	(1.5)	5.5	平安。焼成粘土塊。	39	赤24
52	16	SK-8	—	6層	鉄滓	(4.6)	(2.6)	(2.3)	60	平安。鍛冶滓。	39	赤20
54	6	SK-14	—	1層	粘土塊	(4.3)	(3.2)	(3.0)	25.9	平安。焼成粘土塊。	39	赤15
62	10	遺構外	ⅢU-89	—	土偶	(1.5)	(1.8)	0.8	—	縄文時代後期。土偶右腕。沈線。	39	特1
62	18	遺構外	C-1tr	Ⅱ層	キセル	4.9	1.1	1.5	—	19C。雁首。銅製。	—	赤12
62	19	遺構外	C-1tr	攪乱	ガラス瓶	7.0	3.5	2.0	—	近代。薬瓶。 銘：イタミトール・富山模範精製院。	—	赤13
63	1	街道側溝	ⅢW-82	1層	陶器	—	—	—	—	18~19C。肥前系。徳利。高台部分。 外：ハケメ。	39	陶1

## 石器

図番号	遺構名	地区	層位	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	備考	写真 図版	整理 番号	
8	5	SI-2	A-2tr	下層	砥石	(3.6)	4.4	(2.8)	54.3	流紋岩	平安。両端破損。外面全体を使用している。使用痕は平滑な部分を主とし、所々に深い溝状の擦痕がある。	39	101
28	11	SI-13	—	覆土	台石	(12.5)	(9.2)	6.9	614	細粒凝灰岩	平安。被熱。破損部以外を機能面とする。使用痕は平滑な部分を主とし、所々に敲打痕がある。	—	112
28	12	SI-13	—	覆土	砥石	(5.2)	3.5	2.8	52	細粒凝灰岩	平安。破損部以外を機能面とする。使用痕は平滑な部分を主とし、所々に深い溝状の擦痕がある。	39	102
32	16	SI-22	—	床直	砥石	10.1	6.0	2.6	245	頁岩	平安。表面2面を機能面とする。使用痕は平滑な部分を主とし、所々に深い溝状の擦痕がある。	39	107
32	17	SI-22	—	床面	砥石	13.0	10.8	4.0	540	凝灰岩	平安。表面2面を機能面とする。使用痕は平滑な部分を主とし、所々に溝状の擦痕がある。	39	109
32	18	SI-22	—	床面	台石	(8.5)	(9.0)	5.4	720	安山岩	平安。敲打痕を有する。	39	110
39	4	SI-16	カマド左脇	床面	砥石	10.6	4.8	4.1	205	凝灰岩	平安。4面を機能面とする。使用痕は平滑な部分を主とし、所々に溝状の擦痕がある。	39	105
62	11	SD-14	—	2層	石織	2.1	1.3	0.4	0.7	珪質頁岩	縄文。凹基無茎。	39	4
62	12	遺構外	ⅢT-89	検出面	砥石	12.1	8.7	5.0	755	花崗岩	縄文。被熱。風化激しい。	39	111

## 縄文土器

図番号	遺構名	地区	層位	器種	時期	型式	備考	写真 図版	整理 番号
60	1	SB-2柱2	D区	覆土	深鉢	前期	円筒下層d1 外：単軸結条体1類(R)。内：ナデ。 胎土に繊維・海綿骨針混入。	—	202
60	2	SB-3柱3	E区	覆土	深鉢	中期	円筒上層d・e 外：縄文LR横位。	—	204
62	1	遺構外	ⅢV-86	Ⅱ層	深鉢	前期	円筒下層d1 外：口縁縄文LR横位。単軸結条体1A類および縄文LR側面押圧。内：ナデ。胎土に繊維混入。	—	206
62	2	遺構外	ⅢW-89	Ⅱ層	深鉢	前期	円筒下層d1 外：単軸結条体1類(L)押圧。微隆帯に縄文LR横位回転。内：ナデ。 胎土に繊維・海綿骨針混入。	39	208
62	3	SK-17	—	覆土	深鉢	中期	円筒上層d 波状口縁。外：口唇部外面肥厚。微隆帯、ナデ。 内：ナデ。	39	203
62	4	遺構外	J-1tr	I層	深鉢	中期	円筒上層e 波状口縁。外：隆帯、胸骨文、縄文RL横位。 内：隆帯、ナデ。	39	212
62	5	遺構外	ⅢV-88	Ⅱ層	深鉢	中期	円筒上層e 波状口縁。外：口唇部外面を肥厚させキザミを施す。弧状文、縄文LR横位。内：ナデ。	—	207
62	6	遺構外	ⅢT-86	Ⅱ層	深鉢	中期	円筒上層e 外：縄文は直前段合底(R(L・R))。胸骨文を縄文施文後に施す。内：ナデ。	39	205
62	7	遺構外	A-2tr	I層	深鉢	中期	円筒上層d・e 波状口縁。外：口唇部外面を肥厚させキザミを施す。縄文LR横位。内：ナデ。	39	209
62	8	遺構外	G-2tr	Ⅱ層	深鉢	後期	十徳内I 外：横位沈陥。円および長楕円文。内：ナデ。	—	211
62	9	遺構外	G-1tr	Ⅱ層	深鉢	後期	十徳内I 外：横位沈陥。円文。波状入組文。白色粘土による塗彩。内：ナデ。	39	210





遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（北西から）

図版 2 調査区



集落主体部 (南東から)



E・F区 (南から)



E・F区 (北から)



立地 (正面の段丘上:南から)



基本土層 (ⅢS-90)



調査前の状況 (E・F区)(南から)



調査前の状況 (D区)

図版 4 竪穴住居跡 (1)



SI-1 完掘 (北西から)



SI-1 土層 (A-B)



SI-1 土層 (C-D)



SI-1 壁の立ち上がり



SI-2・3 完掘 (南から)



SI-2・3 土層 (A-B)



SI-4 完掘 (北西から)



SI-4 土層 (A-B)



SI-6 検出 (北西から)



SI-6 土層 (C-D)



SI-6 Pit2 遺物出土状況



SI-6 掘方完掘 (北西から)



SI-7 検出 (南西から)



SI-7 掘方完掘 (南西から)



SI-8 検出 (北から)



SI-8 全景 (北から)